

SGRA REPORT

SGRAレポート No. 96

NO. 96

ISSN 1346-0382

第66回 SGRA フォーラム

第6回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性 人の移動と境界・権力・民族



第 6 回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性

人の移動と境界・権力・民族

■ 開催趣旨

「国史たちの対話」企画は、自国の歴史を専門とする各国の研究者たちの対話・交流を目的として 2016 年に始まり、これまで全 5 回を開催した。国境を越えて多くの参加者が集い、各国の国史の現状と課題や、個別の実証研究をめぐって、議論と交流を深めてきた。第 5 回は新型コロナ流行下でも対話を継続すべく、初のオンライン開催を試み、多くの参加者から興味深い発言が得られたが、討論時間が短く、やや消化不良の印象を残した。今回はやや実験的に、自由な討論に十分な時間を割くことを主眼に、思い切った大きなテーマを掲げた。問題提起と若干のコメントを皮切りに、国や地域、時代を超えて議論を豊かに展開し、これまで広がってきた参加者の輪の連帯を一層深めたい。

なお、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつけた。

■ 問題提起

「人の移動から見る近代日本：国境・国籍・民族」

国や地域をまたいで移動する人々は、過去から今日まで普遍的に存在してきた。しかし歴史が国家を単位とし、かつ国民の歴史として書かれるとき、彼らの経験は歴史から抜け落ちる。逆にいえば、歴史をめぐる対話において、人の移動はもっとも好適な話題の一つになりうるといえよう。

「人の移動と境界・権力・民族」というテーマについて、この問題提起では近代日本の経験を素材として論点を提示する。まず導入として、アメリカ合衆国の沖縄系コミュニティに関する報告者のフィールドワークをもとに、現代世界における民族集団（ethnic group）について概観する。

第一の問題提起として、近現代における人の移動を左右してきた国境と国籍に焦点をあて、具体的な事例として、20 世紀前半における日本統治下の沖縄・朝鮮や、戦後アメリカ統治下の沖縄からの移民について紹介する。国境や国籍が、近現代の主権国家体制や国際政治構造（帝国主義や冷戦）と密接に関わることを指摘したい。

第二の問題提起として、人の移動が政治・社会秩序に与えたインパクトとして、国家や地域をまたぐ民族集団の形成、そして国家間関係とは異なる民族間関係の形成に焦点をあてる。具体的な事例としては、20 世紀前半のハワイにおける日系住民と中国系住民の複雑な関係についてとりあげる。

以上を踏まえて、近現代における人の移動は前近代とどのような異同があり、また国を単位として比較した場合には何がいえるのか、議論を喚起したい。

塩出浩之（京都大学）

SGRAとは

関口グローバル研究会（Sekiguchi Global Research Association/SGRA）は、良き地球市民（Global Citizen）の実現に貢献することを目標に2000年に設立されました。渥美国際交流財団の所在地、東京都文京区「関口」に因みます。SGRAは日本の大学院で博士号の取得を目指して研究を行い、渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となり、現代の課題に立ち向かうための研究や提言を、フォーラムやレポート等を通じて社会に発信しています。幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動が狙いで、多国籍の研究者が広汎な知恵とネットワークを結集し、多面的なデータを用いて分析・考察を行います。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料でご購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。

http://www.aisf.or.jp/sgra/entry/registration_form/

第6回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性

人の移動と境界・権力・民族

会 期	2021年9月11日(土)午前10時～午後4時20分(日本時間)
方 法	オンライン
言 語	日中韓3言語同時通訳
主 催	渥美国際交流財団関口グローバル研究会(SGRA)

第1セッション [総合司会：李 恩民(桜美林大学)]

【開会趣旨】	はじめに	5
	村 和明(東京大学)	
【問題提起】	人の移動からみる近代日本：国境・国籍・民族	9
	塩出浩之(京都大学)	
【指定討論1】	13～14世紀のモンゴル帝国期における人の移動	21
	韓国：趙 阮(釜山大学)	
【指定討論2】	中国の歴史における大規模な人口移動	23
	中国：張 佳(復旦大学)	
【指定討論3】	古代および中世日本の出入国管理	27
	日本：榎本 渉(国際日本文化研究センター)	

第2セッション 指定討論 [司会：南 基正(ソウル大学)]

【指定討論4】	近代における韓国人の移動	30
	韓国：韓 成敏(世宗大学)	
【指定討論5】	中心から辺地へー「ゾミア」という概念ー	34
	中国：秦 方(首都師範大学)	
【指定討論6】	帝国・人権・南洋ー政治思想の視座からー	37
	日本：大久保健晴(慶應義塾大学)	

指定討論者への応答

40

塩出浩之（京都大学）

自由討論1

42

講師と指定討論者

第3セッション

自由討論2 [司会：彭 浩（大阪市立大学）]

51

論点整理：劉 傑（早稲田大学）

パネリスト（国史対話プロジェクト参加者）：

市川智生（沖縄国際大学）、大川 真（中央大学）、佐藤雄基（立教大学）、

平山 昇（神奈川大学）、浅野豊美（早稲田大学）、沈 哲基（延世大学）、

南 基玄（韓国独立記念館）、金キョンテ（全南大学）、王 耀振（天津外国語大学）、

孫 継強（蘇州大学）

第4セッション

自由討論3 [司会：鄭 淳一（高麗大学）]

69

パネリスト（国史対話プロジェクト参加者）：

市川智生（沖縄国際大学）、大川 真（中央大学）、佐藤雄基（立教大学）、

平山 昇（神奈川大学）、浅野豊美（早稲田大学）、沈 哲基（延世大学）、

南 基玄（韓国独立記念館）、金キョンテ（全南大学）、王 耀振（天津外国語大学）、

孫 継強（蘇州大学）

総括

宋 志勇（南開大学）、三谷 博（東京大学名誉教授）

81

閉会挨拶

趙 珖（高麗大学名誉教授）

86

講師略歴 88

あとがきにかえて

金キョンテ 90、三谷博 93

参加者リスト 95

※同時通訳

日本語⇄中国語：丁 莉（北京大学）、宋 剛（北京外国語大学）

日本語⇄韓国語：李 ヘリ（韓国外国語大学）、安 ヨンヒ（韓国外国語大学）

中国語⇄韓国語：金 丹実（フリーランス）、朴 賢（京都大学）

開
会
趣
旨

はじめに

村 和明

東京大学



本日は世界中からご参加くださりありがとうございます。深夜のアメリカやケンブリッジからご参加の方もいらっしゃるということで、御礼申し上げます。今からごく簡単に本日の企画の趣旨をご説明いたします。

この「国史たちの対話」という企画は今回で6回目です。従来自分の国の歴史を研究する専門家が国境を越えて集う、交流する、そういう場として企画し、世界の、アジアのある都市に集まって開催する、という形で進めてきました（「国史たちの対話」プロジェクトの経緯p7参照）。

過去には北九州、ソウル、フィリピンのマニラ南郊に集まって、何日か皆で同じ場所に泊まって議論する。そういう形で進めてきた企画です。特に昨年1月にはフィリピンで開催したあとに、火山の噴火でフィリピンから出られなくなりました。そういう苦勞も皆で共にしまして、連帯を深めた記憶が新しいところです。

ただ、その後、新型コロナウイルスの感染が世界的に広がってしまいまして、そのような形でどこかに皆で集まるということが、難しい状態になってしまいました。

しかし、そうした状況のなかでもなんとか対話を続けたい、ということでオンラインでの開催を試みました。

今年の1月、オンラインのアプリを使いまして、まさに感染症をテーマにした対話を、約半日開催いたしました。当日はかなり多くの参加者に来ていただきまして、大変たくさんの重要な意見が出ました。しかし、時間が短かった。討論のための時間をあまり十分に用意することができず、たくさんの面白い意見が出たにもかかわらず、議論が広がらない、議論がつながらない、誰かが喋ったらそれで終わりになってしまう。そういう問題点が残ってしまいました。

今回は前回の経験を活かしまして、引き続きオンラインで開催していますが、従来のように詳しい報告を多く用意するのではなく、自由な討論にたくさん時間を割くということを主眼にしてプログラムを構成しております。やや実験的な試

みであると考えています。

新型コロナウイルスの感染症蔓延下では、皆さんの国、お住まいの国や都市で、歴史学研究に大きな障碍が出ていると思います。とても苦しまれていると思いますが、わずかですがメリットもあると思っています。

メリットの一つはこのようなオンラインの開催が気軽にできて、ご参加いただくのも比較的容易であるということですね。そうしますと、やや実験的な試みがやりやすいと考えたのです。例えばこれをどこかの都市に3日間お集まりいただいて実験的な試みをやるというのはコワイのですが、オンラインであればできるだろう、と考えた企画です。

皆さんで議論をしていただくために、大きなテーマを掲げる必要があります。この「国史たちの対話」という企画の全体のテーマ、そして今の状況を考えまして、「人の移動と境界・権力・民族」というテーマを掲げました。

まさに人の移動がこれだけ制限されているというのは、近代以降なかなかないことをごさいまして、このことを改めて多くの皆さんがお考えになっている。そういう状況だと思います。このテーマ、時代も地域も越えて議論ができるテーマ、これを皆で考えることによって、これまでの国史たちの対話にご参加くださった皆さんのつながりをいっそう深め、また新しく参加してくださった皆さんとのつながりを深める、そのような場にしたいと考えております。このあと、直後ですが、問題提起として、京都大学の塩出浩之先生、まさにこの問題を考えてこられた方ですけども、日本の近代の事例を中心に、まず口火を切っていただきたいと思います。

そのあと三カ国、それぞれお二人ずつに、今は時間の関係でお名前をご紹介しますませんが、指定討論、コメントを各10分お願いしています。

こちらで具体的に用意している発言者はそこまでです。そのあとは自由に議論していただく。第3セッション、第4セッションは誰がどんな順序で発言するか全く決めておりません。自由に豊かに議論を展開し、つないでいただきたいと思っています。

本日の試験的な試みがどこまで成功するかは、皆さんお一人お一人にかかっています。ぜひ指定討論者の皆さん、パネリストの皆さん、積極的にご発言いただき、議論をつないで展開していただきたい。考え方やアイデアを交換して、共有する場として、あるいは自分にとって考え方が面白い人、自分にとって重要な議論をする人、そういう人をお互いに国を超えてみつけていく場、そういう場、そういう機会になればいいと思っています。

他に一般参加の皆さんも多数いらっしゃいますが、誠に申し訳ありませんが、システムの性格上、声を出してご参加いただくことができません。どうしても何かご意見があるという場合は、チャットでご意見をいただくことは可能ですが、どこまで拾うかは司会の裁量であることをご承知いただければと思います。

最後に、先ほど総合司会の李恩民先生からお話でしたが、通訳についてのご願いがございます。

この企画の性格上、同時通訳がどこまでスムーズにいくかというのが根本的に重要です。この「国史たちの対話」の強みは、非常に優秀な同時通訳の方がたく

さん、いつも協力してくださるというところにあるのですが、今日の企画はとくに同時通訳の方に負担がかかります。発言の順序や内容が決まっていない時間が非常に長いのです。かつ、オンラインの形式ですと、同時通訳の方が見えませんので、存在を忘れがちだと思います。このあと、それぞれのセッションの司会からも、再三注意があると思いますが、今自分がしゃべっていることが、同時に二カ国語に翻訳されているということを常に意識していただきたいと思います。ゆっくりとはっきりとお話してください。また、一番最初に自分はどの言語で話すのか、必ずおっしゃっていただくようお願いしたいと思います。

今私もかなりゆっくりしゃべっているつもりですが、ぜひ同時通訳の皆さんの存在を頭に入れていただく、ということを改めて強調したいと思います。

本日はやや長時間となり、モニターの画面をかなり長くご覧いただくこととなりますが、ぜひ積極的な議論をお願いしたいと思います。これで趣旨説明を終りにしたいと思います。

■「国史たちの対話」プロジェクトの経緯

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA（関口グローバル研究会）フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、先ず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智慧を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月の第3回アジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで三カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、先ず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生（東京大学名誉教授）、葛兆光先生（復旦大学教授）、趙珖先生（高麗大学名誉教授）の講演により、三カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月北九州に、日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると、国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を下げて「17世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018年8月ソウルに日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満州のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景

にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、3回の国史対話を振り返って次に繋げるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

第4回対話は『『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—』というテーマで、2020年1月にフィリピンのマニラ市近郊に日本・中国・韓国から国史研究者が集まり、各国の「西洋への認識」「伝統への挑戦と創造」「国境を越えた人の移動」について論文発表と活発な討論が行われた。

第5回対話は「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」というテーマで、コロナ禍中の2021年1月に完全オンライン形式で開催され、19世紀に感染症の問題を各国がどのように認識し、如何に対応策を用意したかを見、さらに各国の相互協力とその限界について考えた。各国からの論文発表に加え、過去4回の参加者がパネリストとして多数参加し、活発な討論が行われた。新型コロナウイルス感染症流行により、やむを得ずオンライン開催となったものの、結果としてはオンラインというプラットフォームを得ることになり、新たな展開につながる有意義な対話となった。

問題提起

人の移動からみる近代日本：
国境・国籍・民族

塩出浩之

京都大学



皆さんおはようございます。早速ですが、私から問題提起として30分ほどお話をいたします。テーマは「人の移動からみる近代日本：国境・国籍・民族」です。近代日本の事例を中心に話しして、日本・中国・韓国の対話の糸口にしたいと考えております。

先ほど開催挨拶で村先生もお話しされていましたが、今は国境を越える移動が非常に難しくなっています。皆さんに、気持ちだけでも国境を越える旅をしていただこうと思い、まずは私のフィールドワークでの画像をもとに、「人の移動は民族とかかわるものだ」という具体的な事例から話を始めようと思います。

写真1は、2014年1月に私がアメリカのロサンゼルスを訪れた際に撮ったチャイナタウンの入り口の様子です。



ロサンゼルスチャイナタウン
(2014年1月に塩出が撮影、以下同じ)
洛杉矶中国城
(盐出摄于2014年1月，下同)
로스앤젤레스 차이나타운
(2004년 1월 시오데 촬영, 이하 동일)

写真1

なぜこのチャイナタウンの話から始めたのかというと、ロサンゼルスというのは日本・中国・韓国のエスニックタウンがそれぞれ存在している非常に面白い場所だからです。チャイナタウンは非常に広く、中には多くの中国系アメリカ人のコミュニティが存在し、お店やレストランもたくさんあります。

次の写真2は、同じくロサンゼルスのコリアタウンの中にあるレストランの一つです。韓国料理が並んでいて、韓国語も普通に使われています。残念ながらあまりいい写真がなくて、小さな町のように思われるかもしれませんが、実際はとても広い場所です。ロサンゼルスのコリアタウンはいまやチャイナタウンよりも活気のある非常に大きな町です。

写真3はリトルトーキョーと呼ばれている日系人のコミュニティがある場所です。リトルトーキョーは、チャイナタウンやコリアタウンに比べるとかなりこじんまりとした、小さく目立たない町です。これにはさまざまな理由が考えられますが、ひとつ大きな要因として、日本とアメリカが戦争をしたときに、リトルトーキョーにいた人たちは強制的な立ち退き処分を受けました。町が一度なくなったことが影響していると考えられます。

以上見ていただいたように、ロサンゼルスには東アジアから移住した人たちのコミュニティがそれぞれもとの国を母体として、チャイナタウン、コリアタウン、リトルトーキョーとして存在しています。これが私の考える民族のありようということになります。

次にもっと具体的な事例を紹介しましょう。写真4は北米沖縄県人会という団体の建物です。日本の中でも沖縄から移民した人々のコミュニティで、ロサンゼルスを中心部からは離れたところにあります。私が実際に沖縄県人会の人々の新年会に参加させていただいたときの写真がありますので、そのときの様子を少し紹介します。

写真2



写真 3



写真 4



大きなレストランを借り切って、そこでお昼を食べながらいろいろな催し物が行われます（写真5・p12）。食べ物自体は完全にアメリカ風の食べ物です。催し物はいわゆる沖縄の伝統的な格好をした皆さんが、沖縄の音楽を演奏したり、歌ったりしながら続いていきます。皆さんの親睦を深めるというようなパーティです（写真6・p12）。クライマックスになると音楽に合わせてみんなで「カチャーシー」という沖縄伝統の踊りを踊って盛り上がっていきます。

このときたまたま私と同じテーブルで同席した方々は、沖縄系の二世の男性とその奥さん、彼のお姉さんでした。奥さんのルーツは沖縄ではなく、祖父母は滋

写真5



写真6



賀県出身だと聞きました。滋賀県人会にも参加しているそうですが、こちらの沖縄県人会のほうが楽しいとおっしゃっていました。ちなみにこのご夫婦とは、その後2017年ごろに、沖縄で再会することができました。世界各地の沖縄系の移民が集まる5年に1度のイベント（「世界のウチナーンチュ大会」）があって、それに参加されていたのです。

沖縄というのは日本の中では特殊な歴史を持った地域です。日本に支配される前は琉球王国でした。他の日本の地域に比べ、とくに強い民族的なアイデンティティを持っていることが、こういった例からもわかると思います。

以上が、私が皆さんに、現在具体的に存在する民族＝エスニックグループというものについて、事例から考えてもらおうと思ったお話です。
ではここから、本題のプレゼンテーションに入りたいと思います。

1 人の移動と国境

1-1 “移動の自由”と国籍

まず最初に考えたいテーマは、「人の移動」ということと、まさに今日の主題の一つである境界、「国境」についてです。

国境について考えるにあたり、私がとくにフォーカスしたいのは、「移動の自由」ということです。現在、移動の自由が非常に制約されている状況なわけですが、そもそも移動の自由とは何なのかということについて、まず考えてみたいと思います。

そこで重要な要素になるのは「国籍」についてです。移動の自由、国境を越える自由というのは、実は国籍と深くかかわっています。

スライド1の資料はパスポートとビザの写真です。写っている人物はご覧のとおり朝鮮人の女性ですね。ところが、左側の文字を見ていただくと、日本語で書かれています。上部に「日本帝国海外旅券」と書いてあります。つまり日本のパスポートです。朝鮮人の女性が日本のパスポートを持っているわけです。1918年の日付が書かれていることからわかりになるように、朝鮮半島が日本に支配されていた時代のものです。

このキムさんという女性のパスポートの中身をもう少し詳しく見てみると、「夫の呼び寄せによって、アメリカ領ハワイに赴くことを日本の外務大臣が認め

スライド1

1 人の移動と国境 1-1 “移動の自由”と国籍




日米紳士協約(1907~1908)に基づく家族の呼寄せ

(フランクリン王堂、篠遠和子『図説ハワイ日本人史』ビショップ博物館、1985)

る」という趣旨が書かれています。彼女の夫がハワイにいるので、その呼び寄せによってハワイに渡航することを認めます、という内容です。

なぜこのようなことが書かれているのかというと、この時代、日本からアメリカに行くことが非常に制限されていました。というのも、それ以前、日本からアメリカへの移民が非常に増えた時期があって、アメリカで排日運動が起こったためです。日本人は移民に入ってくるな、という運動ですね。そのために日米関係が悪化し、これを解決するために、日米間で日本からアメリカへ向かう移民を制限する取り決めをしました。「日米紳士協約」と呼ばれるものです。この「日米紳士協約」によって、日本からアメリカに渡れる人は、原則として家族の呼び寄せだけということになりました。つまり一般の労働者が自由に渡航することはできなくなったけれども、家族がすでにアメリカにいる場合はその呼び寄せを認める、ということになったのです。この朝鮮人の女性も自分の家族がハワイにいて、その呼び寄せによってハワイに渡ることができたわけです。

彼女の夫のパスポートも残っているのですが、そちらを見ると日本のパスポートではなく、大韓帝国のパスポートです。1904年、つまり韓国が独立国だった時代にハワイに移民しているのです。ところがその後、日本に韓国が併合されたため、その妻である女性は日本のパスポートによってハワイに呼び寄せという形で移民したということがわかります。

細かいことを説明しますと、こちらのビザは横浜にあるアメリカ総領事館で発行されています。彼女は朝鮮半島からいったん横浜に、日本の本土にやってきて、そこからハワイに渡っているわけです。この資料からは、近代において人間が国境を超えて移動するためには、ある国籍がないと移動できないということがわかります。朝鮮人の女性が植民地支配下にある朝鮮半島からハワイに行くためには、日本の国籍が必要であったということになります。

1-2 帝国主義と“移動の自由”

次にまた別の角度から、人の移動、あるいは移動の自由と国境という問題について考えてみたいと思います。

スライド2は、沖縄出身の二人の男性が移民した経験について回想している談話です。

二人とも1930年代に沖縄からサイパン島に移民しています。サイパンは当時南洋群島と呼ばれていたミクロネシアの一部です。日本の領土ではないのですが、委任統治領として日本の支配下にありました。なぜそのサイパン島にこの二人が移民したのかということ話をしてくれているのがこの資料です。

まず上の渡口麗宗さんという人は、お兄さんたちはみんなお父さんとブラジルに行ったけれども、自分はサイパンに行った。それはなぜかという、間近に迫った徴兵検査から逃れるために急いでいたからだと言っています。ブラジルでは手続きが間に合わなかったから南洋に行ったというわけですね。ここで気をつけていただきたいことは、ブラジルは明らかに外国です。これに対して南洋、つ

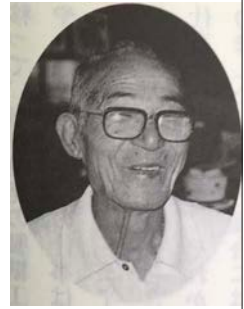
スライド2

1 人の移動と国境

1-2 帝国主義と“移動の自由”

渡口麗宗さん(1915年生まれ。1932年、沖縄からサイパン島へ)：

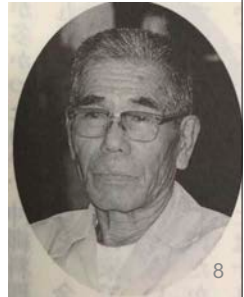
兄さんたちはみんな(父と)ブラジルに行っていますが、私が南洋に行ったのは、徴兵検査が間近にせまっていたので、それを逃れるために急いでいました。ブラジルでは手続きが間に合わなかったの、南洋に行ったわけです。南洋へは手続きにそれほど時間もかからないし、募集人の金城善文が全部やってくれましたから。



照屋寛志さん(1915年生まれ。1938年、沖縄からサイパン島へ)：

そのころ、兵隊に行く人もいれば、満洲あたりやフィリピンに行く人もいます。だから、沖縄には若い男はいなかったの、私も南洋に行きたくなったわけです。南洋は満洲よりは近いからね。

(『具志川市史』第4巻、具志川市教育委員会、2002年)



まりサイパン島は、日本の支配下にあったため渡航の手続きがいらない。パスポートやビザを揃える必要がないことが、南洋を選んだ理由です。逆にいえば、別にどちらでもよかったけれども、楽に行けるほうに行ったことがわかります。

下の照屋寛志さんという男性も沖縄からサイパンに行きました。先ほどの渡口さんは1932年ですが、照屋さんがサイパンに行ったのは6年後の1938年です。沖縄から兵隊に行く人もいれば、満洲に行ったり、フィリピンに行く人もいた。若い男はみんな沖縄から出ていったので、私も南洋に出ていきたくなった。南洋は満洲よりも沖縄に近いからだというわけです。照屋さんの場合も、満洲に行くか、フィリピンに行くか(当時はアメリカ領ですが)、南洋に行くか。はっきりいえばどこでもあまり大きな違いはなかったということがわかります。つまり外国に行くか、日本の支配するところに行くかということに、大きな違いはない。自分にとって楽に行けるところに移民したわけです。

この二人の話からわかるように、ここでなければいけないという理由があって移民した人はあまりいないのです。仕事があるところに行っているだけ、そのとき行けるところに行っただけ。ところがそのときに行ける場所というのは、日本の支配する場所がかなり大きな比重を占めている。このようなかたちで、当時の日本の帝国主義と移動の自由というのが深くかかわっているわけですね。つまり、簡単に行ける場所というのが日本の領土であることが多かった。パスポートもビザも要りませんから。

これも彼らが日本国籍を持っていたから、日本の支配下にあった地域の内部で移動することが簡単だったということがいえると思います。

1-3 戦後国際政治と“移動の不自由”

最後にもう一つ、移動と国境ということについてお話します。これは1948年の話です。

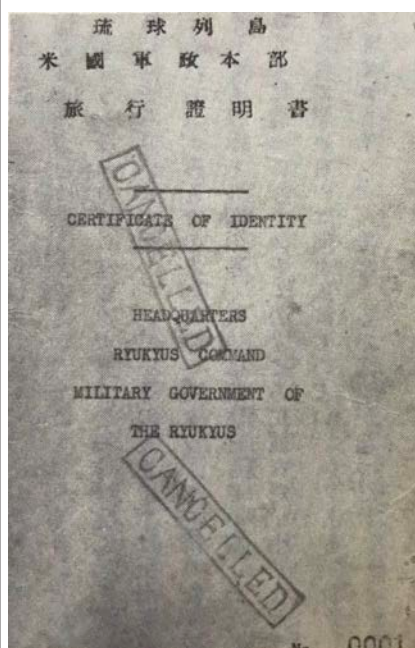
ここでとくに問題になるのは、第二次世界大戦後になると、むしろ移動の不自由ということについて、考える必要が出てくるということです。

スライド3は、沖縄から上海を経由してヨーロッパに行こうとした比嘉善雄さんという人の回想録です。

1948年に上海で比嘉さんが入国ビザを受け取るためにパスポートを差し出したら、出入国管理官が「これは何だ」と聞いてきた。「パスポートだ」というと「これはパスポートではない」と言われたというのです。写真は比嘉さんが持っていたパスポートのコピーですが、これを見ると「琉球列島米軍政本部旅行証明書」と書いてあります。英語をみると「CERTIFICATE OF IDENTITY」となっていて、パスポートとは書かれていません。これは戦後、沖縄がアメリカの支配下にあった期間、つまり沖縄の人々の国籍が非常にあいまいになってしまった時代に発行されたものです。アメリカ領なのか、日本領なのか、どちらでもないのかわからないため、沖縄の人々はパスポートを発行してもらえなくなってしまう、このようなあいまいな身分証明書のようなものになっていたわけです。

これはアメリカでは有効に使えるのですが、アメリカ以外の地域に行くと、このように「これはパスポートではない」と言われてしまうのです。なお、上海の出入国管理官はいったん比嘉さんの証明書を没収するのですが、翌日アメリカの総領事館から「これはアメリカ軍が発行したものだ。取り上げて返さないと大変なことになるぞ」と、要するに圧力をかけてもらって、ようやく事なきを得ることができました。

スライド3



1 人の移動と国境

1-3 戦後国際政治と“移動の不自由”

(1948年、上海で)入国査証を受けるために例の「パスポート」を差し出したとたんに、出入管理官の態度が変わった。...「これは何か」と聞くのであった。

「パスポートである」

「こんなパスポートがあるか」...

「これは一応預かっておく。明日の朝警察本部に取りに来い」...

(アメリカ総領事館憲兵)大尉は...「この人のパスポートは沖縄に駐留しているアメリカ軍が発行したものである。...取り上げて返さないと、事はおだやかでないがどうか」と畳みかけた。これには流石の(警察)署長も応答に困って、しぶしぶと机の引き出しを開けて、わたしのパスポートを取り出した。

(比嘉善雄『わたしの戦後秘話』琉球文教図書、1978年)

9

この例からわかるように、20世紀後半、第二次世界大戦後に冷戦構造が生じるなかで、沖縄のように、帰属があいまいな地域が生じた。移動が非常に不自由になった地域があった。そこでは戦後の国際政治、とくに冷戦構造が大きな影響を与えるようになっていったということがわかるのではないかと思います。

ここまでが、移動の自由・不自由という話です。

2 越境する民族

2-1 国家や地域をまたぐ民族

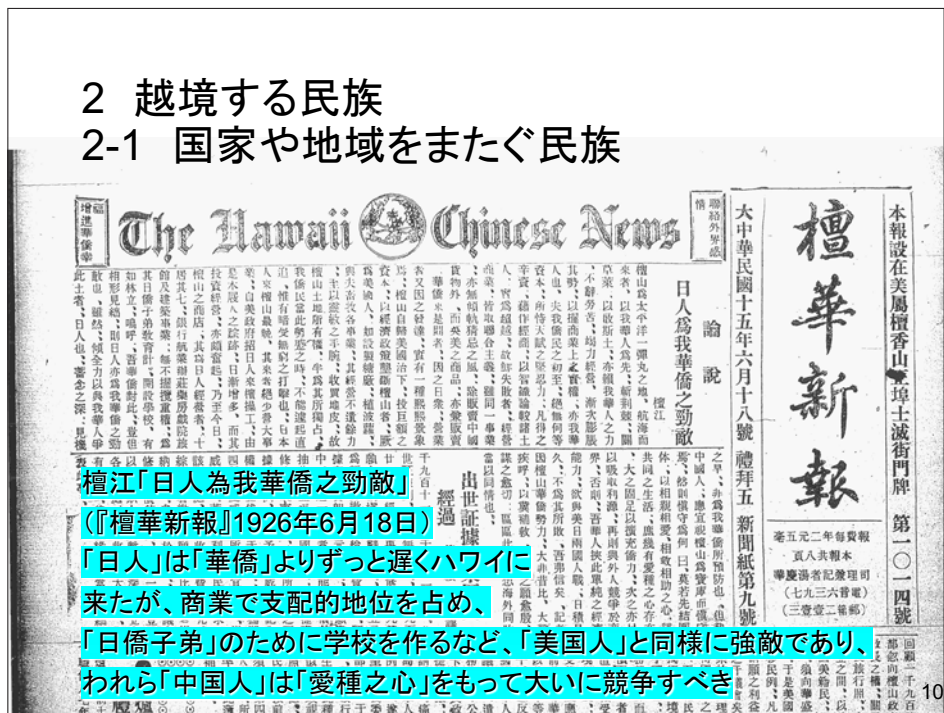
次に民族ということについて考えたいと思います。

まずご覧いただきたいのが、1926年にハワイで出された新聞記事です（スライド4）。

上部に「The Hawaii Chinese News」と書かれていますね。ハワイの中国系移民が発行している新聞です。中国語の記事と英語の記事と両方あります。今見ていただいている社説には「日本人は我々華僑の大敵だ」と書いてあります。これを見ると、いかにも中国人が日本人に対してナショナリズムを燃え立たせているように思えますが、中身は全然違います。

なんと書いてあるか要約すると、「日本人は華僑よりもずっと遅い時期にハワイにやってきたが、ハワイの商業で支配的な地位を占めるようになった。しかも日僑の子弟のために学校を作ったりしている。こういう日本人のハワイにおける勢力はアメリカ人と同じように強敵であるから、我々中国人は「愛種之心」を持って大いに競争すべきだ」といっています。ここで「愛種之心」という言葉を

スライド 4



使っているのが非常に面白いのですが、つまりこれこそが民族なわけです。国としての日本との競争ということをしているのではなく、民族としての中国人と日本人、あるいは華僑と日僑について語っているということがわかります。

ところが国家はそれで無関係になったのかというと、まったくそうではありません。実際日本と中国との間で日中戦争が起きますが、その日中戦争はこのハワイにおける日系の民族と中国系の民族の間に非常に厳しい緊張関係を作りました。

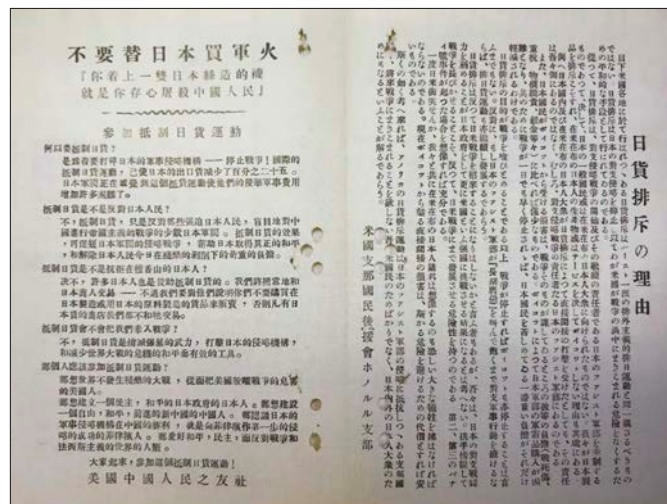
2-2 出身国の衝突と民族間の対立

スライド5は1938年にハワイの中国系の住民が、日本の商品をボイコットする呼びかけを行った資料です。

「日本のために武器を買わないで」というのは、あなた＝ハワイに住んでいる中国系の人が、日本の絹でできた靴下を履くと、それは日本の収入になるから、中国の人を殺すことになる。つまり日本が武器を買うためのお金にそれは利用されるのだという呼びかけをしているわけですね。このようにハワイにいる中国系の人々は、祖国の中国が日本と戦っている状況において、日本の商品をボイコットする運動を行っている。ところが問題は、そういうボイコットを行うとハワイにいる日系の人々が損害を受ける可能性があります。日本の靴下を扱っているのは当然日系の商店であるということがあり得ます。ですから、わざわざハワイの日本人に向けたボイコットではありませんと断って、日本語での呼びかけもしているわけです。

このように、国と国との関係と、ハワイ現地における日系の人々中国系の人々

スライド5



2 越境する民族

2-2 出身国の衝突と民族間の対立

「日本のために武器を買わないで(あなたが日本の絹でできた靴下をはくと、あなたは中国人民を殺すことになります)」

1938年、ハワイの中国系住民が日中戦争下で呼びかけたが、「ハワイの日本人に向けたボイコットではない」

(国立歴史民俗博物館『ハワイ 日本人移民の150年と憧れの島のなりたち』2019年)

日系住民も中国系住民も、それぞれの出身国への献金活動を展開

という民族同士の関係という二つが存在していて、それが連動しているという状況が起っていました。

2-3 社会的・経済的関係のなかの民族

ハワイにおける日系と中国系の間には社会的経済的な関係があり、国と国の緊張だけでは説明できない部分がありました。

スライド6はやはり新聞記事ですが、この『馬哇新聞』という日本語の新聞に、中国系の人々の商店が広告を載せています。「ウインシンウー商店」とか「アーフク商店」というのがそれです。これはつまり、日系の人々が中国系の商店の顧客であったということを示しています。

先ほどボイコットの話をしましたが、日系の人々はもしボイコットが起こったら、自分たちは報復をします。そうすれば中国系の人々のほうがよっぽど大きな損害を受けるだろうと脅しをかけるわけです。当時のハワイでは日系の人口のほうが中国系の人口よりもはるかに多かったので、もしボイコットをやればダメージを受けるのは自分たちだということは中国系の人々も自覚していました。ですから、あまり大きなボイコットにはなりませんでした。

以上みてきたように、民族同士には非常に複雑な関係が生じます。国家だけの関係では説明できない状況が生まれるのだということが、私の言いたかったことです。

スライド6

2 越境する民族
2-3 社会的・経済的関係のなかの民族

中国系商店の広告(『馬哇新聞』1931年10月9日)

日系住民は、自分たちがボイコットに報復した場合に中国系住民が受ける損害の大きさを指摘(1938年)

中国系住民も「彼らは数で勝っているので、(ボイコットをやれば)我々が負けるだろう」と認識(1939年)

他方で日系住民は、ハワイを支配する白人の排日運動を懸念 → まもなく現実

問題提起

時間の都合で後半の話が駆け足になりましたが、最後に問題提起に移ります(スライド7)。

ここまでの話をまとめますと、ひとつは「何が人の移動を規定するのか？」ということです。日本の例からは、国境と国籍を有する主権国家の問題がまず重要であるし、同時に国際政治の状況というのが非常にそれを左右する要因になるということをお話ししました。

もうひとつの話題としては「人の移動は何をもたらすか？」ということです。国と国の関係とは区別される民族間の関係というものが生まれるということをお話ししました。

最後にもうひとつだけ付け加えますと、今日は人の移動をテーマに国史たちの対話をしようというのが趣旨です。私が問題提起の事前説明として書いたのは、「そもそも国史においては人の移動という問題は無視される」ということです。私が今日お話ししたような話題は、一般には日本の歴史として教えられる内容ではありません。日本で出版された日本史の教科書にはほとんど出てこない内容です。つまり国史というのは人の移動という全然珍しくない経験を都合よく忘れていることが多いと思うのです。そこでとくに中国、韓国の研究者の皆さんには、それぞれの国史＝ナショナルヒストリーが人の移動をどう扱ってきたかということについて伺いたく、問題提起に付け加えたいと思います。

以上です。ご静聴ありがとうございました。

スライド7

問題提起

1: 何が人の移動を規定するのか？

近代日本の経験:

主権国家(国境・国籍)と国際政治

2: 人の移動は何をもたらすか？

近代日本の経験:

国家間の関係と区別される民族間の関係

・主な参考文献

塩出浩之『越境者の政治史: アジア太平洋における日本人の移民と植民』名古屋大学出版会、2015年

13



13～14世紀の モンゴル帝国期における 人の移動

趙 阮

釜山大学

[原文は韓国語、翻訳：尹 在彦（一橋大学）]

こんにちは。釜山大学歴史学科で（訳注：韓半島以外の）東洋史を教えています、趙阮と申します。韓国語で討論を進めさせていただきます。私の研究分野は「13～14世紀のモンゴル帝国」です。そのため、塩出浩之先生のご研究される時代とは相当距離がありますが、討論にお招きいただいたため、私が研究している「13～14世紀のモンゴル帝国期の人の移動」に関して手短にご紹介したいと思います。本日のテーマの一つでもある、近代日本における人の移動の持つ普遍性と特殊性の議論にも寄与できればと思います。それでは、早速PPTを用いて討論を始めさせていただきます（掲載略）。

東アジアの前近代期における人の移動は様々な交通や政治的な問題により比較的制約されていたと考えられます。ところが、私の研究するモンゴル帝国期は、これとはかなり異なる様相が見られます。当時のモンゴル人は13～14世紀において世界帝国を築き上げ、草原で移動生活を営んできた遊牧民族でした。移動を普遍的な生活様式として行う集団でした。このような人々は征服を通じて政治体間の境界を取り払い、ユーラシアにおける単一の覇権を成し遂げます。こういった背景から使臣だけでなく、商人、旅行者、宗教家、そして様々な集団の人々が、即ち個人と集団の移動と移住が大規模にユーラシアのレベルで進められた時代でした。

モンゴル帝国期の人の移動と関連して、当時の政策は「自発的な様相」と「非自発的な様相」に分けることができます。まず、非自発的な移動に関して申しますと、モンゴルは征服戦争の過程で確保した中央アジア、西アジアの軍人、捕虜、技術者らを帝国の中心地に移動させました。このような人々はモンゴル草原や中国地域に強制移住され、モンゴル帝国の重要な人的資源として活用されました。軍事の場合、代表的な例として、モンゴル西部への遠征の際に投降したり、捕虜になったりした、キプチャク草原出身のキプチャク人もしくは中央アジアのカンクリ人、アス人などが中国駐屯後に定着します。南宋遠征に動員された事例もあります。このほかにも、中央アジアや西アジアの職人、手工業者、医療従事

者のように専門的な技術を持ち合わせていた人々が東アジア地域に移住し、モンゴル草原と中原（中国）等に分布しており、このような人々が「色目人」として把握されます。

このほかに、征服戦争中に捕虜になり、中央アジア・西アジア地域からモンゴル人と一緒に中国に入ってきた移住者らがいました。彼らは非自発的な移住により故郷を離れ現地に定着します。帝国が安定期に入るにつれ現れた興味深い現象で、このように奴隷化した捕虜らが奴隷主から逃亡し流民になる「人口の流動化現象」も起こりました。

次に紹介するのは自発的な移動と移住です。経済的要因による自発的な移住と申しましたが、実はこれ以外にも政治的要因、出世の機会を獲得するために帝国の中心部になだれ込む現象もありました。特に注目すべきことは、モンゴル帝国建設の舞台裏で統治勢力とムスリム商業勢力の結合が見られる点です。ムスリム商人らは、モンゴル帝国期において移住と移動の面で恵まれており、ユーラシア全域で自由な経済活動を行っていました。彼らは帝国が安定するにつれ、モンゴル帝国の官員として拔擢される一方で「オルトク」という商業勢力、御用商人として陸上、水路、海上を往来し、営利活動を行います。これらの人々はその後、中国地域に定着し、元時代のモンゴル人統治期に戸籍上「回回」、もしくは広い範疇の「色目人」と呼ばれます。

レジュメには書いていませんが、塩出先生は民族間の競争、移住する民族間の競争があるとお話をされました。こういった様相がモンゴル帝国でも現れます。中国でもアラブ系移民と中央アジア系移民の間の競争、限られた地位、官職をめぐる競争する現象、そして漢人と色目人との衝突と対立、競争が見られます。

モンゴル帝国期の人の移動が政治・社会的な秩序に及ぼした影響を見ると、機動性に基づいて生活を営んでいたモンゴル遊牧民が世界帝国を築き上げた後、13～14世紀のユーラシアでは「社会的流動性」が時代の特徴となり、移動性は生活の一形態となります。こういった流動性は14世紀以後の東アジアの民族に対する地殻変動をもたらし、各地に混成文化を形成させます。クビライ時代以降、大カンの直轄領となった「カーンウルス」と呼ばれた元では中央アジアや西アジアから移住してきた多様な種族・集団が定着しており、モンゴル人、漢人以外に30以上と把握される色目人集団が居住していました。彼らの一部は今日、中国内で「回族」と呼ばれる、宗教に基づいた民族の形成に影響を与えました。

このほかにもモンゴル草原で活動していたモンゴル人がその後、モンゴル帝国期を経て、中国南部、西南部の雲南省に定着し居住することにより、民族の地域的分布にも変化をもたらします。文化・制度的な混合の様相も見られます。遊牧文化と農耕、中原地域、中国伝統の制度が融合する現象も現れます。また、民族の移住により西アジアの制度と文化が東アジアの制度・文化と結合し「知識の融合」という現象も起きます。代表的にはアラブの天文学の知識がモンゴル帝国期の中国地域に流入し、中国の暦法と融合します。それ以降、明と朝鮮の暦法にも影響します。モンゴル帝国期の多様な民族間の文化的結合から混血と混成の文化が現れたのが、移住、移動からの変化の様相と言えます。

討論はここまでとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

指定討論 2



中国の歴史における 大規模な人口移動

張 佳

復旦大学

[原文は中国語、翻訳：于 寧（東京大学）]

皆様、こんにちは。復旦大学の張佳です。今回国史対話に参加するのは二回目のことで、大変光栄に思います。私の研究分野は中国古代史で、特に元代以降の歴史を専門としております。そのため、私は主に自分の研究分野の視点から塩出先生が提出した問題に返答していきたいと思います。これからは中国の歴史における大規模な人口移動を阻害する原因及び実際に発生した大規模な人口移動とその背後にある動因について、私の考えを皆さんにシェアさせていただきたいと思います。

中国の歴史において、大規模な人口移動を引き起こした最も重要な原因は戦争です。これは世界各国においても同じだと思います。戦争は暴力によって民族間そして国家間の境界を破り、人口の流動を引き起こします。これは世界各国においてもよくあることです。

中国史専門以外の先生方は詳しくないかもしれませんが、このスライドの画像は「金の界壕」の図です（図1・p24）。これは女真が建立した金朝がモンゴルの騎兵を防御するために中国の東北地域で築いた施設で、堀や壁などから構成されています。これは民族間に存在する一つの境界です。このような境界は戦争の際に脆弱になります。中国の歴史における最も顕著な人口移動は「北族王朝」の建立がもたらした漢民族の南地域への移住です。北族王朝とは、モンゴル高原や東北地域に生活する北方の遊牧民族が建立した北朝や遼、金、元などの王朝のことで、これらの北族王朝の建立と北方民族の南下が原因で、元々中原地域で生活する漢民族は南地域に移住し続けました。それによって、江南地域、つまり私が今生活している上海地域や嶺南地域、つまり現在の広東地域、そして西南地域、すなわち現在の雲南と貴州地域が次第に開発されると同時に、漢民族化されてきました。

先生方は中国前漢時代の司馬遷が書いた『史記』をお読みになればお分かりになるとと思いますが、『史記』が書かれた時代では、私がいる上海地域はまだ荒れた土地でした。東晋の時から、北方の戦乱が原因で、中原地域から多くの人口が

図1：金の界壕



江南地域に移動し、江南地域が徐々に開発されてきました。その背後の推進力は戦争による大規模の人口移動と関連しています。

これらの人口移動は、今日の視点から見ると、中国国内での移動になりますが、当時の歴史的視点から見れば、これは国家間と民族間の人口移動でした。当然、戦争による人口移動の現象は東アジアの中日韓三カ国の間においても発生したことは周知の通りです。例えば、明清易代、つまり明から清へと王朝が交替した時に、多くの人は朝鮮と日本に移民しました。このように、戦争は最も重要な原因です。

二番目の図は皆さんがご存知の通り、中国の有名な万里の長城です（図2）。長城は農耕人口と遊牧人口の間に引かれた人工的な境界線ですが、そこにきちんとした根拠もあります。長城の伸びる方向は400mm等雨量線とほぼ一致しています。農耕社会は遊牧民族の南下を防御するために、長城のような戦略的な防御工事を建造しました。しかし、このような工事は大規模な戦争の発生時にはあまり大きな効果は発揮できませんでした。先ほど、趙阮先生もモンゴル帝国時代に言及しましたが、モンゴルが金を討伐した時に、長城はあまり役に立たなかったようです。

中国の歴史において、第二の大規模な人口移動は政府主導の政策性移民であり、主に明と清の時代に行われました。このような政治性移民或いは政府主導の移民は大昔にすでにありました。例えば、前漢時代に、政府はしばしば各地域の富民、いわゆる金持ちの階層の人を首都に移民させました。これは「実京師」と呼ばれ、首都付近の地域を充実するという意味です。これは比較的小規模にとどまっていたのですが、明と清の時代にはいくつか大規模なものがありました。例えば明朝初期、北方の戦争により、人口が激減したため、政府は山西の南部地域の人口を強制的に中原地域、河北と山東に移民させました。現在の中国北部地域の住民に出身地を尋ねると、その多くは山西、より具体的にいう場合、山西の洪洞県大槐樹と答えます。中国北方地域の各地にいわゆる大槐樹移民伝説が存在します。その背後には明朝初期にあった政府主導の強制的な移民という歴史が反映

図2：長城



されています。

明朝初期から続いたもう一つの人口移動の方向は、中国で人口密度が最も高い江蘇、浙江地域から淮河流域への移民です。淮河流域では、元末期の戦乱と自然災害の多発により、人口が少なかったのです。この移民の規模も比較的大きいです。

また、清朝初期にも民間では「湖広填四川」と呼ばれる大規模の移民がありました。四川地域は明の時代には人口が多かったのですが、農民戦争を発動した張献忠が四川を占拠し、現地に多大な破壊を及ぼしたため、明朝初期に人口が激減しました。それで、政府は湖広地域の人口を四川に移民させました。それが原因で、現在の四川地域の人々の飲食の好みは湖南、江西とあまり変わらないのです。彼らが辛い食べ物を好むのはこの移民の歴史と関係があると多くの研究者が指摘しています。以上は大規模な人口移動を促す政府主導の強制的な移民についての説明でした。

中国の歴史において、第三の大規模な人口移動は経済による人々の自発的な移動です。これは政府主導のものではありません。このような人々の自発的な移動は政府に望まれないもので、禁止されていました。この図は明の時代にあった「戸帖」で、明の時代の「戸口本」（戸籍謄本）です（図3・p26）。韓国と日本には中国のような厳格な戸籍制度がないかもしれませんが、韓国と日本の先生方にとって「戸口本」は聞き馴染みのない言葉かもしれません。中国のこの厳格な戸籍制度は出生地を記載し、居住地を規定します。戸籍制度がこのような自由移動を禁止するように厳格になったのは明朝初期からだと考えられます。「戸帖」によって、出身地や居住地、家族人数、所持の田畑の面積などの情報が政府に提供されます。政府にとって、これらは税金と徭役の徴収を確保するための重要な情報です。つまり、庶民が所持するこれらの豊富な資源をコントロールするために、政府は庶民の移動を望まず、それに厳しい制限をかけます。明朝の法律の規定によると、庶民が商売目的であれ、何であれ、居住地から50キロメートル以上に離れるところに外出する場合は、政府が発行した「路引」、つまりその外出

図3：明代戸帖



目的を証明する専用の証明ドキュメントが必要です。いったん原籍を抜けると、いわゆる「流民」になってしまいます。中国政府はずっと「流民」を警戒してきました。

庶民の自発的な移動を防ごうと政府は非常に注意を払っていましたが、明と清の時代において、人口増加と農耕地の不足の状況がますます深刻になり、庶民がよい生活を求めるために踏み切る自発的な移民を完全に阻止することは不可能でした。例えば、もともと長城は北方のモンゴル人を防御するために横たえられていましたが、明の時代に、長城沿線に生活する多くの住民は長城の北に渡り、開墾可能なモンゴル草原の南周縁辺りで農耕していました。明の時代に、モンゴル地域では「板升農業」、つまり長城の北側に渡った漢民族・農耕民族の住民による農作業が行われていました。

そのほか、もっと知られているのは清朝末期から行われた中国東北地域の開発です。それは「闖関東」と呼ばれ、生活を求めるために東北に渡るということを意味しています。東北に渡った人の殆どは華北地域の漢民族の住民です。これは人々の自発的な移動です。

もちろん、人々の自発的な移動は遥か昔からあった現象で、明と清の時代から出現したわけではありません。さっきふと思い出しましたが、もし理想が実現できないのなら、外の世界に渡ろうという考え方を最初に示したのはおそらく孔子でしょう。『論語』には、「道不行、乗桴浮于海（道行なわれず、桴に乗りて海に浮かばん）」があるように、もし自分の理想が実現できないのなら、船に乗って海外に渡ると孔子は言っています。孔子はこのような自発的な移動の鼻祖とも言えましょう。もちろん、これは冗談です。

以上、中国の歴史における大規模な人口移動を阻害する原因及び実際に発生した大規模な人口移動とその背後にある動因についてお話させていただきました。ご清聴ありがとうございました。



古代および 中世日本の出入国管理

榎本 渉

国際日本文化研究センター

塩出先生のご発表を非常に興味深く拝聴いたしました。私は中世日本の国際関係を研究テーマにしておりますので、塩出先生の問題提起に対するコメントとして、今回は出入国管理の問題についてお話ししようと思います。

ただ、中世の日本は国外に出る人の動きはそれなりにありましたが、分権的な社会だったこともあって、幕府朝廷などの中央政権はもちろん、荘園領主や国主・大名などもこれを制御する能力には乏しく、近代の主権国家と比べると異質すぎるという感もあります。

一方で古代は近代とは同じ原理ではありませんが、国家による出入国の管理が一定程度機能しており、多少とも比較しやすいという面があります。

そこで今回は中世の話の前に古代をかませることで、この問題を見通してみたいと思います。

古代日本の律令制下では、国境の出入りは天皇が管理することが原則とされました。日本から外に出ていく者としては、遣唐使などの国家使節がありますが、これは天皇が任命することによって国外に出ることが許され、天皇の使者であることで行き先の国で受け入れてもらうことができました。

しかし838年の承和度遣唐使のあと、日本から海外に向かう使者は14世紀まで長く途絶えます。代わって国外に出て行ったのが、貿易船に乗って個人で留学する僧侶たちでした。彼らもやはり出国にあたっては天皇の勅許を得る必要がありました。それは制度的には出国者を制限するものでしたが、僧侶本人にとっては国家的な保護を受けることができるということでもありました。

スライド1は、東京国立博物館の所蔵で、853年に天台宗の円珍という人が唐の貿易船で留学したときに発給された文書です。

右側が日本の大宰府（九州に設置されていた役所）の文書、左側が唐の福州都督府の文書で、その両文書の間に福州都督府の印が押されています。

この文書からわかる手続きは、下の囲みにまとめた通りです。すなわち、1.円珍が大宰府に入唐の申請書を提出。2.大宰府が1に捺印し、大宰少監が後ろに

スライド1



唐・福州都督府公驗(853.9) (福州都督府印) 日本・大宰府公驗 (853.7.1.)

1. 円珍が大宰府に入唐の申請書を提出
2. 大宰府が1に捺印、大宰少監が「任為公驗～」を追筆し許可証として円珍に返却
3. 福州に上陸した円珍、唐国内の移動許可を求める申請書を2に張り継ぎ福州に提出
4. 福州が2と3に割印、3に捺印+「印」の押書、福州録事が「任為公驗～」の追筆

一種のパスポートとしての大宰府公驗 唐風の人名・地名表記

「任為公驗～」を追筆して、許可証として円珍に返却。3.福州に上陸した円珍が、唐国内の移動許可を求める申請書を2に張り継いで福州に提出。4.福州の役所が2と3に重ねて割印を押し、3に何か所か捺印したうえで、「印」の押書を行ない、福州録事が先ほどの大宰少監と同様に後ろに「任為公驗～」と追筆して、許可証として円珍に返却という流れです。つまり、円珍は大宰府で得た公驗を日本から公式に出国した証として唐の上陸地の役所に提出し、入国後の移動許可を求めたわけです。

大宰府側も唐で提出されることを前提に公驗を出したようです。文体が福州都督府公驗と似ているんですね。さらに人名や地名なども日本の普通の書き方ではなく、中国風にアレンジして書かれています。これはおそらく中国で見られることが前提だと思われます。円珍にとっては一種の身元証明書であり、パスポートに近いものだといえるのではないかと思います。

このように古代国家が人の出入国を管理できたのは、当時大宰府が貿易船の往来を管理していたので、これに乗り込む人についても一応のチェックが可能だったためであるといえます。

ところが12世紀の終わり、鎌倉時代になると、これが行われなくなります。船も人も勝手に出入りする時代になるわけです。その結果、日中間を往来する僧侶の規模が極めて増え、12世紀の終わりからの2世紀の間に、名前がわかるだけでも600人ぐらいが確認できます。あまり意識されていませんが、これは前近代では日中間の留学のピークということが出来ます。

ただ、国家的な管理がなくなるといことは、よいことばかりではありません。パスポートが公的に出されなくなったということでもあるからです。

そこで、この時代にあらわれた特徴的な文書があります。「度牒」という文書です。これは国家が僧侶の出家得度を許可したことを証明するものです。「度牒」自体は律令時代から作られており、現存する前近代の「度牒」は数十通に及びますが、そのなかで4通ほど変な「度牒」があるのです。鎌倉時代に作られたもので、普通の「度牒」ではない異質な「度牒」です。

これは「早稲田大学所蔵文書」の友山士偲（ゆうざんしさい）という禅僧が

出家したときに与えられた文書です（掲載略）。通常の「度牒」とは全く書式が異なっていますし、書式以外の面でも違いがあります。まず大きさが普通の2倍あって、黄麻紙（おうまし）という日本では普通は使われない良質の紙を使っています。紙面には「太政官印」という印鑑が押されており、本来は朝廷が発給するときに押すものですが、印影を見ると明らかに偽造印、つまり偽物です。また文書中に書かれている官職名や地名は中国風で、日本では使わない表記で書かれています。署名のところにも人名と花押がありますが、これは存在しない架空人名であって、花押も当然偽物です。

この変な文書は何なのか。実はこの文書については、すでに江戸時代に伊藤東涯が、「これは入宋のためにこしらへたるものなるべし」（『制度通』）といっています。つまり中国に行くために偽造したものであると喝破しているわけです。

この友山の「度牒」を含めて、現存する4通の偽造「度牒」はすべてが宋元に渡った僧侶のもので、中国で使うために作成されたと考えれば、確かに理解しやすいです。また元の時代の中国資料を見ますと、日本の僧侶が入国したときに、これらと同内容の「度牒」を確認したという記録があります。だとすると、この偽造「度牒」は中国人に見せることを意識して立派なしつらいにした、書式や地名表記も中国人に受け入れやすくするために工夫して書いた、と考えることができるのではないかと思います。

なぜこんなものを作ったのかといいますと、この時代に中国に渡った僧侶は、国家的な身元の保証を得ることができなかったということが理由として挙げられます。そこで彼らは、身分の証明書である「度牒」を代用品としたと考えられます。その場合、中国人の信用を中国で得ることが目的なわけですから、貧相な実物よりは立派な偽物のほうがよいということになります。ただ、なぜ「度牒」を偽造したのか。どうせ偽造するのだったら先ほどお見せした大宰府起源のパスポートを偽造したほうがいいのではないかという疑問も当然あるわけですが、今日はそこには触れずにおこうと思います。

以上、出入国を国家が管理していた時代としていなかった時代があることをお話ししました。前者の時代には出されていたパスポートが、後者の時代には出されなくなったわけです。そのため、中国に渡る僧侶は自力でその代用品を用意しましたが、ここからは中世日本社会における何でもありのデタラメぶりが際立ちます。しかし渡航先の中国では、少なくとも形式的には官僚機構が機能していましたので、デタラメであっても何らかのパスポート的なものを用意しなければ、入国や入国後の行動に不便が生じる可能性がありました。

このように渡航者が相手の社会に合わせる努力というのも、一種の文化交流なのかなと思います。では、時間となりましたので、お題提供も兼ねたつたないコメントを終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

指定討論 4



近代における韓国人の移動

韓 成敏

世宗大学

[原文は韓国語、翻訳：尹 在彦（一橋大学）]

こんにちは。世宗大学の韓成敏です。塩出先生ご発表ありがとうございます。私は通訳して下さる先生方の実力を信じて、たまに原稿にはないことを申し上げる場合もあります。前回のフィリピンに続き、通訳の皆さまよろしく願いいたします。

私は別途PPTを用意しておりません。ただし関連する写真を何枚か添付した上で発表を進めたいと思います。第6回国史の対話のテーマ、そして塩出先生のご発表に関連し、私は三つに分けてコメントさせていただきます。

第1に、近代における韓国人の移動ですが、これも大きく三つに分けられると考えます。一つ目は、生計のためであれ韓国の独立運動のためであれ、半ば自発的な選択で移住したケースがあります。民間の自発的な動きです。二つ目は国家が政策的に推し進めた移民です。三つめは韓国が植民地になるにつれて起きた日本による強制動員問題です。

最初に、韓国社会において大規模な海外移住の嚆矢となったのは19世紀半ばだったと言えます。同時期の韓国社会の政治的かつ社会的な混乱、相次いだ大飢饉から苦しめられていた、朝鮮半島北部の朝鮮人は現在の中国の東北3省、鴨緑江、豆満江の対岸、当時韓国ではこの地域が「間島」と呼ばれていました。大まかに当時の韓国では二つに分けて見ていました。ここ（掲載略）の地図を見ていただきますと、鴨緑江の対岸、今の遼寧省の一部になるでしょうが、ここを「西間島」と言いました。豆満江の対岸、今の吉林省の一部は「北間島」と呼ばれました。

その後、日本の韓国に対する支配が強化されるにつれ、独立運動に関わっていた人々、そして土地を取り上げられた農民らなど、多くの韓国人が満州、ロシアの沿海州などに移住しました。その結果、この地域では当時、大規模な韓人社会を基にして様々な独立運動団体が組織され活動を展開しました。今も数多くの朝鮮族が居住しながら「延辺朝鮮族自治区」を形成しています。同時期にロシア沿海州へ移動した人々はスターリン政権期に中央アジア地域に強制移住を強いられ

ます。これによりウズベキスタン、カザフスタンなど、中央アジアに韓国人社会が存在しています。およそ一か月前にカザフスタンから（訳注：独立運動家の）洪範圖將軍の遺骨が韓国へ送還され、改めて中央アジアの韓人社会の存在を韓国社会に知らしめました。

第二に、国家主導で行われた海外移住です。1902年ごろから05年ごろまで進められたハワイ移住です。ハワイのサトウキビ農場主の労働者派遣の提案に対し、韓国政府が応じて国策として推進されました。この時期にアメリカもしくはハワイのサトウキビ農場主らが韓国人の移民を提案したのは、先ほど塩出先生が仰ったように、当時のハワイで中国人の労働移民が増加したことを受け、最初は日本人の移民が推進され、また日本人が増えるとその代替案として韓国人移民を提案されたものです。これをきっかけに当時の韓国政府は担当の役所を設立し、近代的なパスポートを発給するなど、近代的な旅行、移民行政が始まりました。当時、大韓帝国が発給したパスポートがこれ（掲載略）です。

先ほど、植民地の朝鮮人に発給されたパスポートを塩出先生のご発表からご覧になったと思います。当時、農場での生活は募集広告と違って非常に悲惨なものでした。ハワイをはじめとしてアメリカ大陸への韓国人移住はアメリカ、メキシコ、キューバなどに拡大しました。これ（掲載略）が当時の「皇城新聞」に掲載された募集広告です。デスラーという人物が経営していた東西開発会社が移民の募集を代行していました。彼らが出した募集広告です。家族帯同も可能で、寒くも暑くもなく、求職も容易で、月給はドル建てで15ドル、当時の円建てでは30円程度になります。韓国の貨幣では57ウォン程度だそうです。非常に大きな金額でした。このように広告は出したものの、実際には広告と違って相当大変な生活でした。以下の写真（掲載略）が当時、ハワイのサトウキビ農場での作業する人々の様子です。

海外移住に関して三つ目、最後の段階は第二次世界大戦時に日本帝国による1940年代の植民地朝鮮人の強制動員です。徴用、徴兵、日本軍慰安婦などで様々な植民地朝鮮人が海外へ強制動員され犠牲になります。生き残った人の中には動員された現地にそのまま定着した人もいました。そのため、海外に居住する韓国人の最も多い国が今でも日本です。この問題は現在の日韓間の深刻な対立の原因になっています。この文書（掲載略）は当時の朝鮮総督府が徴用された朝鮮人に送った手紙です。主な内容としては、戦地の軍人と同じ後方の戦士だから逃れることなく故郷の家族のために産業の戦士として働くことを呼び掛けるものです。1939年に既に動員されて2年契約が満了した労働者に対しては再契約を強く促す内容で、この二つの内容が書いてあります。

このテーマについて私が提起したい問題は2点です。一つ目はトランスナショナルの観点から分析する必要性についてです。塩出先生がお話しされたように国家・民族を基準として人の移動を把握すると、実際に移動した人々の様々な動機と様相は消えてしまい、代表・象徴としての国家と集団としての民族が残ります。「移住者の性格はそれぞれ多様で異なるにもかかわらず、それが一つの集団としてみなされる恐れがある」ということです。従って「国家間、民族間の対立が目立ち、マイノリティ、弱者の犠牲が当然視されるだけでなく、見えなくな

る」と考えるので、近代以来の人の移動に関してはトランスナショナルの観点から捉えた方が良いのではと思います。

国家と民族という基準を抜きにすると、概ね海外移住をする人々はそれが新しいチャンスを掴もうとする能動的な動機であれ、(訳注：国家の)権力の力により強制的に移住させられた被動的な動機であれ、当時、移住したほとんどの人々は本来、自らの生活の場から追いやられた社会的弱者だったことが共通しています。新しいチャンスを掴むために一定期間、留学に行くこととはやや異なると思えます。確かではないにしても帰ってくるのが予定されている人と完全に離れる人とは立場が違うということです。

こういった移動の観点から見ると国家と民族に焦点が当てられるため、国内移住は見えてきません。国内移住の問題は今も問題になっています。「ジェントリフィケーション (gentrification)」のような問題がそれで、常に弱者らが生活基盤を築き上げた後、そこから追いやられる境遇に陥ることが少なくありません。彼らの移動は時々移動の連鎖を促します。日本の余剰の農業人口が韓国に移住した結果、韓国人の満州への移動を触発しました。そして、このような問題について違う観点から検討する機会になればと思います。

最後に、ディアスポラの問題です。例外を除くと、世界的に移住者らは大概その社会では少数で言語と文化が異なります。これは移住した社会で差別の要因になるだけでなく、同化を強要する社会的圧力もあります。それへの対応としては、移住者の立場からすると、言語・文化が同じ、同じ境遇の同族・同国人同士で集まって住むのは自らの保護策と安全な定着のための非常に現実的かつ当然な現象でもあります。ですから、移住した社会での地位は、植民者集団か、生計を立てるために計画なしに移住した弱い立場の集団かに関係なく、集まって住むのが一般的です。これは移住者の間に程度の差こそあれ、時間が経っても相変わらず母国の言語や文化、社会規範を維持しながら生きていくディアスポラの基本的な背景になります。

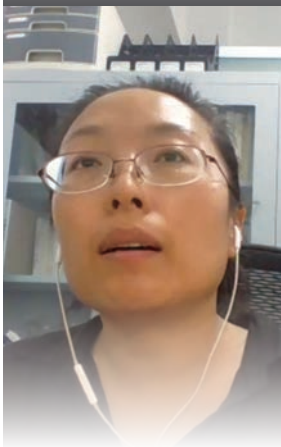
一方でこれはその社会で差別を強化する要素にもなり得ます。民族間の問題、多数と少数の問題で、このようなディアスポラの問題を我々はどういう風に把握すれば良いか、というのが私の問題認識です。特に現代社会の高度化によって人の移動と移住は益々自由になり、広範囲にわたり行われています。しかし、そういった移住者に対して国家という国境の要素は、最後の段階でもあります。前近代時代には自分の居住地域を離れさせないための「民に対する統制」が基本でした。が、今は国内での移動はあまり問題になりません。最後の段階が国境という問題で、正直に国境もだんだんと取り払われており、そうすると残っているのは異質な文化を有する集団間の問題です。

塩出先生のご発表でハワイの日本人社会と中国人社会との対立はある意味、特殊な事例かと思います。マイノリティ間の競争はその社会でそれほど大きくは目立ちません。ハワイは特殊な事例として、東洋系の移住者集団が元々居住していた原住民や米国の白人の数より圧倒的に多かったので、マジョリティの主導権争いと見ることもできます。

二つ目は、最初にご紹介された「沖縄県人会」と「リトルトーキョー」に関す

るものです。両組織が異なる組織なのか、沖縄県人会が独立的に運営され、LAにある日本人会とは関係ない組織なのかが気になりました。特に、この問題に関連しては、2年前に日本の市民団体「ピースボート」のイベントでの経験を述べたいと思います。ピースボートと韓国の「環境財団」（訳注：NGO）が合同で「ピースアンドグリーンボート」というイベントをほぼ毎年開催しています。私はそこにゲストとして招かれたことがあります。自由発表の時、沖縄の青年たちが発表をしました。沖縄の米兵犯罪に関してでしたが、そこで私が非常に困惑し驚いたのは、日本人の大方の質問内容が彼らの「国籍の純粋さ」を問うことでした。「日本人なのか」ということを問い続け、「日本から独立するつもりじゃないか」という質問まで出て、非常に困惑したことがあります。ということで、LAの日本人会と沖縄県人会が相互協力の関係か、それとも関係なく別々に活動する組織なのかが非常に気になります。私のコメントは以上になります。

指定討論 5



中心から辺地へ —「ゾミア」という概念—

秦 方

首都師範大学

[原文は中国語、翻訳：于 寧（東京大学）]

問題提起をしてくださった塩出先生にお礼申し上げます。今回の会議にお招きいただき、たいへん光栄に存じます。わたくしは「移民と国家」のテーマで実証研究を行ったことがあまりありませんから、具体的な研究成果を皆様とともに共有できません。最近読んだジェームズ・C・スコット（James C. Scott）の『The Art of Not Being Governed』（佐藤仁監訳『ゾミア：脱国家の世界史』、みすず書房、2013年）ですが、その内容とここ2年間中国西南地域で実施したフィールドワークの成果を合わせて、簡単に私の感想を述べさせていただきます。この些細な発見が皆さまの討論の種になればと思います。

スコットは「ゾミア（Zomia）」という重要な概念を提示しています。東南アジアの国家論に詳しい学者の方々にはおなじみの概念でしょう。ゾミアとは自らの意思で国家支配から逃れた山地の民衆が占拠した地域のことです。この概念の背後には人口の流れと国家支配の関係が映し出されています。ゾミア現象はとりわけ近代国家が誕生する以前に発生することが多く、特定の人口が戦争や飢饉、疫病などのため、あるいはただ国の支配を受けたくないという理由で、中心から辺地へ、辺地からさらに遠くへ移動します。つまり、初期の国家の支配力が直接届く範囲は私たちが想像するほど大きくなかったし、人口移動の管理における国の態度も思ったよりずっと柔軟だったことをスコットのこの研究は私たちに気付かせてくれたのです。中心と辺地、辺地と辺地よりさらに遠いところは、バランスの形成と崩壊、そして再形成という周期的な変動の中で共存の在り方を探ってきました。このように形成した隙間の中を人々が行き来し、国の支配から逃れ、山の中で無政府な（stateless）状態で暮らせるわけです。この本を通じてスコットは中心が辺地からどんどん人を吸い込むという文明の物語、即ち、農業（のちに工業）、文字、階級を中心とした発展モデルは「文明」と言われ、それに対して辺地の、野蛮や立ち遅れと言われる人々は文明にあこがれ、文明を追い求める道を歩みだすという文明の物語に挑戦しようとしたのでしょうか。そして、このような文明と進歩、発展の歴史過程において、前近代の農業を主体とする帝国も、

工業を主とした近代国家も、中核の役割を演じ、人の流れをけん引し、促進するアナリティカル・カテゴリー（the analytical category）と研究対象になっています。

現代の私たちは国家単位で思考し、辺境や税関、国籍、旅券など現代的な国家管理手段で人口の出入国を把握します。塩出先生の文章、「国籍はいかに人の国際移動を左右するか」においても、現在新型コロナウイルスが世界的に感染が拡大する中、このような国籍で人の流れを管理する方法の複雑さをご指摘になりましたが、わたくしも深く同感します。

近代国家はますます精密化していく人的移動の管理手段を誇る一方、コントロールからはみ出た者に対する抑圧もどんどん深刻化してきています。その問題の中心は、人口管理をする時、国家として「人」、「人口」というキーワードをどのように定義するかということです。国籍で決めるか、それとも実際の滞在状況で決めるか、あるいは種族や民族、宗教で人を分けるべきでしょうか。それと同様、「流れ」とは何か、ある方向への人的移動がより人々に信頼され、自由だと考えられる一方、もう一つの方向への移動は好ましくないと考えられ、厳しい規制が必要だとされるのはなぜでしょうか。さらに、移動の中で利用される交通機関もある特定の人的移動に関するステレオタイプなイメージが蘇ってしまいます。近代国家の人的移動の管理体制はかなり厳格で、しかもどんどん厳格化していくでしょうが、その中にはまだ様々な問題が存在します。そのスケールの大きな今発生中の国際的な事例は現実の中でたくさん見られるから、ここでは省略して、わたくし自身が行ったフィールドワークについて皆さんと共有したいと思います。

わたくしは今フィールドワークをしています。実は最初から人的移動という課題に関心を持ったわけではなかったし、国境を跨ぐ人口移動などにも注目しませんでした。しかし、調査の中で、このことは地元のインフォーマントの口から繰り返して聞いてきたため、地元の人々にとって、これこそ他所からの者に知ってほしいことではないかと意識させられました。彼らにとって、人の越境は少なくとも新型コロナウイルスの前、非常に日常的なことでした。それにもかかわらず、私のような外来者に話す甲斐のある事だと考えています。その理由は何か、それを答えるには更なる情報が必要とされると思われますので、今も最後の答えを見出せずに考えています。

日常的な行動というのは、彼等から見れば、向こうの国の人々との交流が非常に盛んだからです。その中で経済上の要素が非常に重要な役割を果たし、双方の行き来が方向が決まったわけです。経済がいいほうへみんなが行く、仕事に、結婚に、友人や親戚に会いに、あるいは休日を過ごすために行きます。バイク一台で山一つ越え、川一つ渡れば行き来できます。その際に発生する移動のコストは無いに等しく、通行証を発行してもらおうような簡単な手続きを行えば済む話です。もちろん、それは後で知ったことですが、向こうの国は青壮年労働人口と女性の流出を防ぐために、出入証明の手続きを非常に複雑にして、高い料金を取るようにしたということですが、つまり時間的行政的コストを引き上げることによって特定の人口の移動を阻止しようとしたわけです。

しかし、このような日常的な存在は彼らが国家の存在を否定していることを意味するわけではありません。正にその逆です。両方の人々がはっきりと国家の発展がいかに彼らのいる辺境の地に影響を与えているかを意識しています。それを池に投げた石だとたとえて、中心から周りへと波紋を広げていくうちに、最終的に自分のところまで及んでしまうと言ってくれました。それゆえ、自分たちの生活の変化及び近隣国との交流状況について、彼らは逆に喜んで国家枠組みを肯定しています。とりわけ、昔は自分たちが向こうの国に渡っていたが、今は向こうの人々が自分たちの方に来るようになったことを楽しく話しています。

フィールドワークを行った時間はまだ短くて、このような人的移動が現地の人口や家庭、職業の構成にどのようなマイナスな影響を及ぼすかまだ断定できません。引き続き観察していかなければならないと思います。しかし、今までの調査でいえることは、これらの人たちが中心と辺地という権力関係を積極的に認め、受け入れ、それに挑戦するどころか、逆に国家という中心の力を後ろ盾にして、辺境の地で新しい中心と辺地の関係を築きなおしたうえで、自分たちをこの新しい「中心」の受益者にしているわけです。

さて、移民、国家と権力の関係をどう理解すべきでしょうか。確かに、国家は実在し、そして、現地の人間にとって、権力に対する認識と想像としても存在しています。しかし、中心から離れているという辺境の性質から、逆に柔軟なやり方が許される空間ができました。このことから、最初のスコットの観点を振り返ってみれば、中心に身を置いて中心と辺地の関係を考える際の自明さを反省すべきではないでしょうか。辺地の人間からして、今はその多くはゾミアのような逃れ者にはなれませんが、中心から遠ざかることによりかえって利益を得られることはあるのです。

わたくしの発言は以上となります。先生方からコメントをいただけたら嬉しいです。どうもありがとうございます。

指定討論 6



帝国・人権・南洋

—政治思想の視座から—

大久保健晴

慶應義塾大学

本日は、貴重な指定討論の機会を与えてくださり、誠にありがとうございます。

「人の移動」や「国境」、「民族」に注目するこの「第6回国史たちの対話」は、従来の一国中心的な歴史叙述を見直しながら、主権国家概念の再検討を図る、きわめて意義深い会議であると考えます。近年、ヒトやモノの移動に注目するグローバル・ヒストリー研究の興隆を通じて、従来の西洋の帝国を中心とした世界史や文明史、ならびにそれに対抗する形で発展してきたそれぞれの国民国家の多様な歴史に光を当てる国史研究の見直しが進んでいます。

本日の塩出先生の問題提起は、こうした研究動向と密接な関係を持っています。以上の問題意識のもと、私からは政治思想の立場から大きく三つの話題について議論いたします。

第1点目は、「技術の移転と帝国の歴史」です。19世紀後半以降、日本をはじめ東アジア諸国は、自国の近代化のために、文明国とりわけ西洋から「お雇い外国人」と呼ばれる学者や技術者を受け入れました。ここで「人の移動」というテーマをめぐって、彼らお雇い外国人と、いわゆる移民の人々との比較を簡単に行います。

例えば、日本では19世紀後半、明治国家の成立とともに、オランダからエッセル（George Arnold Escher）やデ・レーケ（Johannis de Rijke）ら多くの土木技術者を招き入れました。興味深いことに、彼らの多くはオランダで専門技術を修得しながら、しかし本国では十分な仕事がない技師たちでした。彼らは仕事と生活費を求めて、ジャワや上海、日本など、本国オランダと関係の深い植民地や居留地を渡り歩く「帝国の技師」であったのです。

今回の塩出先生の問題提起では、日本から南洋諸島や満州に移り住んだ日系の移民が取り上げられていました。「お雇い外国人」が政府の側＝統治の側に立つのに対して、彼ら移民は被統治者の側にあるように見えます。この点で、一見すると両者は異なります。しかし本国の植民地政策のもと、海外に派遣され、その地に技術を移転し労働力を提供した点では、実は両者は共通性も持っています。

そしてこの比較から浮かび上がるのが、次の大きな問題点です。すなわち、「人の移動」に光を当てるグローバル・ヒストリー研究は、技術の移転や労働市場に注目してみると、結局のところ、帝国中心の覇権と収奪をめぐる歴史研究に接近するのではないのでしょうか。先述のように、西洋の帝国主義による世界史研究を批判する形で、多様な国民国家の在り方を探る国史研究が発展してきました。今日、そうした国民国家の枠組みを超える新しい試みとして、移民など「人の移動」の研究がなされています。しかしそれは実際には、最終的に新しい形で帝国中心の歴史研究へと回収されてしまうのではないのでしょうか。もしそれが単なる帝国史の研究でないとするならば、私はそうであると信じていますが、それは歴史研究としてどのような新しい可能性を持つのか、ぜひとも塩出先生にお聞きしたいと思います。

この問題に関連して第2の論点としたいのが、「主権」と「人権」との関係についてです。ここで議論したいのは人の移動と、主権国家からこぼれ落ちる存在である「難民」についての問題です。政治思想家ハンナ・アーレント(Hannah Arendt)は、1951年から発表した『全体主義の起源(*The Origins of Totalitarianism*)』のなかで、難民となったユダヤ人の迫害に触れながら、次のように指摘をしました。その主張を要約してみます。

アーレントによれば、人々は誰にも奪われない権利として普遍的な人権が存在すると唱える。人権とは政府、主権国家から独立してすべての人間に平等に存在すると考えられている。もし政府の独裁政治や内戦などによって国家の保護を失い、市民権を剥奪され、難民や無国籍者になった場合、人々が頼ることができるのは、生まれながらに持つ人権だけである。しかしそうなったとき、果たして誰がこの人々の普遍的な人権を守ってくれるのだろうか。現代社会ではいかなる国家も国際機関も、そうした人々の人権を保護する準備がないのではないのか。

むろん1948年に「世界人権宣言」が定められ、その後1967年には「難民の地位に対する議定書」が策定されました。しかしなお、21世紀の現代においてさえ、無国籍者や難民の人々の人権をめぐる問題は、世界的な課題として残っています。これは本日の塩出先生が提示された議論とも深く連関します。私たちは「人権とは主権国家を超える普遍的な価値である」と考えます。しかし、果たして主権国家なしに人権は存在するのでしょうか。主権国家がなければ人権は存在しないのではないのでしょうか。そうである場合、それではその主権国家に迫害された人々の人権はどうなるのでしょうか。これは人の移動について分析する歴史研究が決して忘れてはならない、批判的で政治哲学的な課題であると私は考えます。この点について、塩出先生はじめみなさんの考えをお聞かせください。

最後に、第3点目は、「南洋」を中心とした先住民への眼差しです。塩出先生の報告では、国家や地域をまたぐ「越境する民族」として、特にハワイに住む白人との対抗関係を背景とした、中国系住民と日系住民との微妙な関係が検討されました。しかし、果たしてそれでは、彼ら中国系や日系の住民は、ハワイの先住民のことを、どのように見ていたのでしょうか。ちなみに、1860年、咸臨丸(船名)で太平洋を横断し、アメリカのサンフランシスコに渡った福沢諭吉は、その途上で訪れたハワイの先住民について、「蛮民」であり「その土人の風俗は汚い

有様」と記しています。

この問題は、近代日本における「南洋」の認識とも深くかかわります。日本では19世紀後半、明治国家の成立とともに、ミクロネシアやメラネシア、ならびに東南アジアへの関心が高まり、竹越与三郎や志賀重昂、田口卯吉ら多くの人々が南洋論を展開しました。さらに第一次世界大戦後、大日本帝国は国際連盟より南洋諸島の委任統治を託されました。東京帝国大学教授の矢内原忠雄ら多くの学者が、南洋における植民地統治について論じています。彼らの南洋論や南進論は多岐にわたりますが、しかし南洋諸島の先住民を、動物的で遅れた存在と捉える点で共通しています。そして20世紀の大日本帝国は一方で北進論を唱え、朝鮮、満州、北方へと進出しました。それと同時に、南進論も主張し、東南アジアをはじめとした南方へと領土拡大を試みました。その帰結がアジア太平洋戦争となります。

確かに日本は中国や朝鮮の人々との間で、国境を越えて多くの民族的対立を引き起こしてきました。しかし同時にそこには、「同文同種」という言葉に象徴されるように、北東アジアは同じ文化圏にあるという認識も存在しました。本日の塩出先生の報告の中にも「愛種之心」という言葉が使われていました。それに対して、「南洋」はそうした文化圏の外に位置付けられてきました。この観念は、近代の産物である以上に、それ以前のアジアにおける歴史にも深く根差していると考えられます。

2020年1月、「第4回国史たちの対話」はフィリピンのマニラで開催されました。その会議では私たちは、「アジア」の範囲について、中国・韓国・日本という北東地域に限定せずに、東南アジアを含めた広い領域のなかで捉える必要があると議論しました。

果たして中国・韓国・日本それぞれにとって、「南洋」とはどのような存在でしょうか。「越境する民族」という観点から、この「南洋」とアジア認識をめぐる歴史的な問題をどのように考えればよいのでしょうか。塩出先生をはじめ、皆様と議論できれば幸いです。

私からの指定討論は以上です。ありがとうございました。

指定討論者への応答

塩出浩之 京都大学



まず韓国の趙先生、中国の張先生のご報告はいずれもモンゴル帝国の話題を中心に話してくださって、大変興味深いことを教えていただきました。とくにモンゴル帝国の中での移動という点を重視されていたのが大変興味深かったです。お二人のご報告のなかで私がとくに関心を持ったのが、私は自分の問題提起のなかで「自由」と「不自由」という言葉を重視したのですが、お二人の先生はむしろ「自発」と「強制」ということを中心にお話しくくださった。つまり必ずしも自由はないというか、国家は自由な移動をあまり認めていない場合もあるわけですが、にもかかわらず自発的な移動はするということですね。つまり国家の管理とかかわらず、人々の移動はあるということを指摘されていて、その点で自発と強制ということが、移動において重要であったということを指摘されていた点は非常にこれから議論の話題になるんじゃないかと思いました。

日本のことについては、前近代の移動ということを榎本先生がお話しくされました。けれども、ここではむしろ、中世の日本は管理がなくなったという点を重視されていましたけれども、できれば先ほどのモンゴルの話題などとも関連して、自発と強制という点からどう位置づけられるのかということについて、とくに比較の視点から考えて、もう少し広げていただくことができたかと思いました。

それから、時間の都合で急ぎますが、韓先生からいくつか重要なご指摘をいただきました。これについて少し詳しくお答えしますと、国家と民族という視点で人の移動をとらえると、個人、個々人が非常に多様な動機で移動しているということが見えにくくなるのではないかというご指摘があって、これについては私は同感です。非常に同じように思っています。とくに国家という枠組みで人の移動をとらえるのは、非常に限界があると思っています。ただ、なぜ民族という言葉をとくに重視したのかというと、私は民族をネイションではなくて、エスニックグループという意味で使っていますけれども、そういうエスニックグループというのは、まさに韓先生がおっしゃるようなトランスナショナルな存在である。ということが、私がとくに言いたかったことです。それからさらに付け加えると、確かに個々人はさまざまな動機や事情があって移動するのですが、ただ、移動を左右するものとして国家権力が存在するというのもやはり否定できない。それから先ほどの民族、エスニックグループに戻りますが、民族というのは、さまざまな事情で移動した人々にとって、よりどころになるわけですね。経済的にもそれに援助されることもあるし、さっきの北米沖縄県人会のように、アイデンティティの再確認をする機会にもなる。そういうようなところについて、考えたかったということです。

それから、北米沖縄県人会と今の沖縄の独立論とか、米軍との問題との関係はどうかということですが、これはいろいろあるのですが、戦前に沖縄からアメリカに移住した人と、戦後に沖縄からアメリカに移住した人とでちょっと考え方が違うようです。戦後に移住した人はかなり米軍に批判的です。それ以上は時間の都合で省略します。

それから秦先生のご報告は大変興味深くて、これは今の韓先生のお話と非常に重なる点があるのですが、とくに中国の西南地域の人たちがおそらく東南アジア諸国に行ったり来たりしているというお話だったと思います。そこでむしろ国家を利用できる存在としてとらえているという点が、大変興味深いと思います。つまり国境を越える移動というのは、まさしく国家を利用することで日常生活に影響を及ぼしているということで、そのような点は確かにあるのだらうと思います。つまり個人がさまざまな理由で移住するということですが、そもそもパスポートを手に入れること自体ある意味で国家を利用するというわけですね。もちろんそういう形で国家の側は人の移動を管理するわけで、人々はそれに左右されるわけですが、逆にそれを利用するという相互の働きかけがある点が私も重要だというふうに思いました。

最後の久保先生のご指摘もこれに非常にかかわるところがありまして、人の移動は、結局その帝国の歴史になるのでは意味が無いのではないかというご指摘で、まったくその通りなんです。ただ私は必ずしもそういう帝国の歴史に回収されるとは思っていません。というのは、先ほどから言っていることですが、国家の側と社会の側というのが、緊張関係にあるというのが私の捉え方で、人々が移住していくというのは、社会経済的な動機がある。ところがその際に、国家がそれを管理しようとする、それに対して人々はこれを利用しようとする。このような相互作用において捉えるべきだと思っていますので、そもそも従来の帝国史というのが、国家と社会の緊張関係を見落としてきたのではないかというのが私の考えです。

それからハワイの先住民に対する蔑視の話も、全くそのとおりだと思います。これは先ほどの韓先生のご指摘ともかかわるのですが、マジョリティになった移民というのは例外的ではないかというお話があったのですが、私は必ずしもそうは思っていません。なぜかという、人類史的にとらえると、ほとんどの人は移動してそこにいるので、マイノリティになるのはあとから移動したからそう見えているだけなんです。アメリカにおける白人なんかは、明らかに後からやってきてマジョリティになっているわけですから、そういうふうに考えると、ハワイにおけるアジア系の移民というのが、実はあとから入ってきたのに今はマジョリティになっているというようなことは、もちろんどちらかというところでは珍しいけど、まったく不思議なことではないわけですね。そういった人々が先住民を蔑視していたというのもまったく事実だと思いますし、そういう国家の支配とは別の形で、人々の間にそういう民族間の上下関係が生まれるというのは、私が今回の報告で課題にしたことにも含まれると思っています。

第2セッション

自由討論1

司会：南 基正（ソウル大学）

パネリスト：講師と指定討論者

[発言は母国語]



南基正

はい、ありがとうございました。ということで、7名の指定討論者と問題提起者の全てのご発言をいただきました。第1セッションで指定討論をしてくださった方々もカメラをオンにして参加していただきますようお願いいたします。それでは、第1セッションと第2セッションでご発表いただいたそれぞれ3名の方々と塩出先生、この7名の方々の間で、まずお話を絞っていただきます。第3、4セッションで自由討論をされる方々には機会はありませんが、ぜひ何か一言付け加えたい、という方がいらっしゃった場合にはチャットでお話してください。

皆さんのお話を伺いながら、非常に興味津々でした。縦横無尽に展開されるお話が興味深かったです。時期的にも中世から現在に至るまで、日中韓の東北アジアだけでなく、東南アジア、時には太平洋を渡り、モンゴル帝国を念頭に置きユーラシアを舞台にした移動のお話を聞く中で多くの話題が出てきたと思います。それに加え、政治思想的な問題としての移動という問題提起もありました。自由討論に入りながら、このテーマを設定したきっかけについて申し上げたいと思います。

先ほど、お話がありましたが、我々は第4回目の大会の時にマニラで東アジアをテーマとして話し合いました。そうした中で、第5回大会を準備するときにコロナパンデミックを受け、パンデミック下で「感染症の流行」というテーマでオ

ンライン会議を一度開催しました。移動が制限されていることを肌で感じながら「東アジアにおける移動の問題」を取り上げることを考えました。本来、自由であるべき人間の移動が自由でなくなっている状況で「人間の移動とは何ぞや」ということを問い直すためです。他方で、コロナパンデミック以前から既に東アジアで移動の自由が制約されている地域も存在します。このようなことを前提にして、この会が誕生したということも念頭に置いていただきながら、問題提起を続けていきたいと思えます。

時間が限られているため、自己主張よりは対話を続けることをまず考えてください。30分程度の時間ではありますが、1～2回ほどお話しされると考えてください。可能な限り一度のご発言は2分以内にまとめてお話しください。ご発言の際には母国語をお願いします。また7名の方々は既に所属が明らかであるので、誰に質問しているかは最初に明かしてください。固有名詞や専門用語はチャットに書いていただくか、このように画面に紙で提示していただくとありがたいです。また、通訳のため、少しお時間をおいてから、私の方から質問があってからご発言をお願いします。どなたが最初でしょうか。それでは私の方から指名させていただきます。

まず、最後に指定討論をしてくださった大久保先生のご質問に対し塩出先生からご答弁があったようです。それに続き、非常に重要な問題提起をされた大久保先生の方からもう一度ご意見を伺います。その上で、大久保先生から他の方に対してご質問をいただきます。

■ 大久保 ありがとうございます。塩出先生のご返答は、とても説得力を持つものでした。司会の南先生からご指摘がありましたように、やはり今日我々はこうしてオンラインでお会いできているとはいえ、行動が制限されています。人の移動が制限されたことによって、本来であれば直接会って、討論することによって生まれる化学反応が、今失われつつあります。塩出先生のご研究は、そうした人の移動が国家を超えて何をもたらすのか、ということに光を当てられました。それは従来の帝国史の研究を超える可能性を持っているというご指摘に、私は感銘を受けています。

その上で私から、とくに第一セッションで発言された、趙先生、張先生、榎本先生に一つ質問をさせていただきます。

本日の議論では、近世から近代に至る過程において、主権国家の成立を通じてパスポートの制度が確立したことにより、国境を超える人々の移動が管理された、という指摘がなされました。果たしてそのとき、近世社会から近代への移行というものを、どう考えたら良いでしょうか。

すなわち、それは連続的なものであったのか、それともそこには大きな断絶が存在するのか。例えば日本の場合で考えると、いわゆる「鎖国」「海禁」から「開国」「開港」へ、という19世紀中葉の変化をどう捉えることができるでしょうか。たしかにそれは、「明治革命」へとつながる歴史の大きな転換点でした。しかし、本日議論されたような、行政や統治の観点からみると、近世期より「海禁」という形で人の移動を規制してきたからこそ、開港後も西洋のパスポート制

度を導入しながら、国境を超える人の移動を管理できたのではないか。そこには連続性もあるように考えられます。この点について、専門的な見地からご見解をお聞かせいただけると幸いです。

南基正

はい、ありがとうございます。誰かを特定した質問ではありませんでした。先ほど、浅野先生からの問題提起があったのですが、今チャットで問題提起とその韓国語訳が出ています。簡単に申しますとこういう質問でした。「モンゴル帝国と日本帝国を、近世と近代を区分するアジアの帝国として念頭に置いて議論をすると、古代・中世・近代が見えてくると思う」という問題提起、コメントでした¹。これについてチャットでのやり取りがありました。

画面の中で本日の六つの問題提起とそれに関する議論をもう少し続けていきたいと思います。今、浅野先生の問題提起を含め、ご意見のある方は質問をしてください。先ほど佐藤先生も手を挙げてくださったのですが、関連した質問もしくはコメントでしょうか。はい、わかりました。今から議論を続けていきたいです。張佳先生ですか？ お願いいたします。

張佳

先ほど質問してくださった大久保先生にお礼申し上げます。まず大久保先生の質問にお答えします。国境を跨ぐ人的移動に対して、古代中国と近代中国の理解は全く異なります²。古代中国では、このような国境を跨ぐ移動をほぼ合法ではない、あるいは政府が提唱しない行為と見なしました。当然、政府が関連の管理規定を設けていて、例えば中国沿岸部の住民は貿易するために高麗や日本に渡ることがあるが、事前に政府に報告する必要があると規定されていました。報告せずに民間同士での勝手な往来はあまり政府に提唱されなかったです。この考えは古代中国人の世界に対する観念に関連しています。古代中国ではいわゆる「天下観念」がありました。中国はなぜ「中国」と呼ばれるかという、古代中国人の想像の中では、自分の文化が最上級だと自ら思ったからであり、それゆえ庶民は中国に定住すべきで、外へ行くべきではないと考えられていました。外へ行くことは、中国の昔の言葉でいうと、「自外于王化」、即ち「自ら文明社会を離脱し、野蛮な社会に行く」ということだと見なされていました。それゆえ、いろいろ面白い歴史現象があったのです。例えば、17世紀の初期に、多くの中国東南沿岸部の住民はフィリピンに渡って、生計を立てようとしていました。後に西洋から渡って

1 浅野豊美氏（早稲田大学）からのチャットコメント（加筆修正して掲載）：ぜひ、モンゴル帝国と日本帝国の比較を、東西交通が盛んとなる近世や、産業革命が世界に広がる近代という新しい時代と共に（その先駆けとして）登場したアジアの帝国として念頭において議論いただけないでしょうか。そうすると、古代・中世・近代という時代の区分をアジアでまた世界との関係の中でいかに行って行ったらいいのかが見えてくると思います。『融合と新文化の生成』対『ナショナリズムの勃興』という軸が作れるでしょうし、塩出先生がコメントした国家と社会の関係を全体として捉える視点から、歴史全体を見直すこともできるでしょう。つまり、近代特有の主権と人権を、両方ともに不可欠なものとして議論するための糸口が見つかると思います。ついでに、半島をめぐる島と大陸との地政学的な比較も焦点にできるでしょう。かつてモンゴルの時代には、高麗王朝をモンゴルが吸収した延長に、大陸から海に帝国が伸びようとして、東南アジアのシュリービジャヤと日本遠征でつまづいたのに対して、近代の時代には朝鮮半島を併合して大陸でロシア帝国と衝突し、海洋を渡ってきたアメリカとも中国問題で衝突し、その挙句に東南アジアを占領して自壊した日本帝国との地政学的な比較も軸とできるでしょう。モンゴルとウクライナのある種の融合として登場したとも言えるかもしれないロシア帝国や、西洋の勃興、それが生み出した主権国家も、長い歴史の中で考えることができるとおもわれます。

2 中国の学界では、近代以前、アヘン戦争以前の時代を「古代」と呼んでいる。

きたヨーロッパの植民者はフィリピンの中国系住民と衝突し、有名なマニラ中国人大虐殺事件が発生し、当時のスペイン人はフィリピンにいる中国系住民を大量に虐殺しました。現地の中国系住民は明朝政府に報告し、スペインと干渉するように求めました。しかし、報告を受けた明朝政府は、勝手にマニラに渡った人は「自外于王化」であるため、虐められたのが自業自得で、政府からの保護はしないというスタンスを示しました。ここから当時の古代の政府が持っていた庶民の海外渡航に対する基本的な態度が読み取れます。

中国の近代に入ってから、中国人の世界観念はもともとの「天下観」から「万国観」へと大きく変化し、世界の文明は一つだけでなく、中国は世界の中心でもなくて、各国の中の一つであることを意識できるようになりました。この状況の中、国を跨ぐ移動は合理的で、合法的な活動と見なされました。これは漸次変化ではなく、激変なのです。以上は大久保先生への返答です。

また、趙阮先生に一つ質問があります。趙先生は元の歴史の専門家で、私の研究にも一部が元朝の歴史と関連しています。回族という中国の一つの民族の形成について趙先生が言及しましたが、回族はムスリム群体で、その形成は元のモンゴル帝国と関係しています。朝鮮半島の歴史に詳しくないので、質問させてください。元の時代、朝鮮半島において、当時の高麗は半独立のステータスを持ち、ほぼモンゴル帝国の一部でもあったため、中東やアラブから相当の数の「色目人」も朝鮮半島に渡りました。元朝が減んだ後に、これらの色目人は朝鮮半島で独自の信仰を持つムスリム群体を形成したのでしょうか。中国では元朝の遺産として回族が形成されました。朝鮮半島では、色目人の子孫が一つのムスリム群体を形成したかどうかを聞きたいです。色目人だけではなく、モンゴル人の状況も知りたいです。中国本土では、数百年の中で漢民族と同じように同化されながら、祖先は元朝のモンゴル人だという歴史記憶を持つ人口集団が存在しますが、韓国ではこのような状況はあるのでしょうか。これは私が非常に関心のある問題です。

最後に塩出先生に一つ小さな質問があります。塩出先生はパワーポイントで『檀華新報』という新聞の1926年の記事を引用しました。そのタイトルには「勁敵」という言葉があり、その理解に関してですが、恐らくはそれを「エネミー」という意味での「敵」を理解してはいけなくて、1926年の文脈においては、この「勁敵」が指し示しているのは強力なライバルの方が近いかもしれません。これは塩出先生が後に引用した日中戦争が苛烈になった1938年の資料に使われた言葉とは意味が異なるかもしれません。これは私の小さな疑問です。私の発言は以上となります。先生方、どうもありがとうございます。

■ 南基正 はい、ありがとうございました。移動の境界としての天下の領域についてお話ししてくださいました。「天下観」から「万国観」への移行に関してでした。趙阮先生と塩出先生に対するご質問がありました。まず趙阮先生の方からご答弁いただいた後、質問を続けてください。

■ 趙阮 趙阮です。張佳先生のご質問にまず答えさせていただきます。モンゴル帝国と

関連して、様々なご質問とコメントがあって、浅野先生と大久保先生の問題提起に対し私の方から三つの答弁をさせていただきます。

まず、張佳先生から「色目人、回族に関連して、高麗・朝鮮半島で何か発見されたものがあるのか」という興味深いご質問をいただきました。結論から申しますと、色目人、ムスリムコミュニティが朝鮮時代以降史料上で発見された記録はありません。高麗史には高麗文集や史料に「回回」といった存在が登場します。このような人々が商業活動を行い交流したという記録はありますが、民族コミュニティを形成したという歴史的証拠や研究はまだ見たことはありません。モンゴル帝国期以前、即ち唐・宋時代以前からムスリムの移住があったと思われます。このように時期や規模の側面から見ると、朝鮮半島への移住は小規模で個人個人の移住だったため、コミュニティを形成するほどではなかったと考えます。関連する研究は進んでいないようですが、これから史料を調べてみます。

大久保先生のご質問について申し上げます。連続性、非連続性、即ち同じ帝国として、前近代のモンゴル帝国にも近代帝国の戸籍、管理、規制、旅券のようなものが存在していたかについてです。指定討論時に自由な移動を強調しましたが、実際にモンゴルは統治下で戸籍制度、戸口制度を厳格に実施し、管理していました。また、ユーラシアの駅制度において、駅を利用できる人に対しては「牌子」を通じて、移住・移動への資格を与えました。そういった点から管理システムが存在していたように思われます。それでも商業的な交流や人の移動がもっと自由だったのは相対的に国家権力の統制が緩かったからでしょう。モンゴルが目指したのは商業帝国だったため、一層自由な交流を鼓舞・刺激した雰囲気の中で、他の時代と比べ、厳格に統制してはいなかったと思います。ということで、連続性・管理はあった一方で、モンゴル帝国の特殊性もありました。

チャットで浅野先生がモンゴル帝国と大日本帝国時代の比較についてお話しされましたが、私は日本帝国の専門家ではないので、明確な比較は難しいです。ただ、申し上げられるのはモンゴルが帝国として以後の帝国に相当な影響を与えた点です。モンゴル帝国以後の政治秩序の影響を見ると、二つの様相が確認できます。一つはナショナル、つまり民族主義的な側面です。各地域に新政権が誕生するわけですが、中国の明朝の中華主義的な秩序というナショナリズムが強化される傾向が現れたことはよく知られています。ヨーロッパでは大航海時代が始まります。それもモンゴル帝国の影響と考えられます。そういった大航海時代から始まって帝国主義につながり、その産物の一つが日本帝国ではないかということです。もちろん、単純な比較は難しいですが、軍事体制に基づいた軍事経済の膨張の時代といった点からモンゴル帝国の有する帝國的特徴があると考えます。移住、移民においても似通った様相が見られると思います。

■ 南基正 はい、ありがとうございました。先ほど張佳先生から二つ目のご質問をいただきました。塩出先生への質問と覚えています、よろしいでしょうか。はい、ご答弁の方、お願いします。

■ 塩出 ごく簡単にお答えしますが、「勁敵」という言葉がライバルの意味ではないか

というのは全くその通りで、私もそのように理解しています。

張佳 塩出先生の返答をお聞きました。「勁敵」の意味について、その「敵」の意味は日中戦争勃発後の「敵」と違いがある可能性を、塩出先生に提示させていただきました。

南基正 はい、わかりました。ありがとうございました。それでは質問から出されたテーマを引き続き議論していきたいと思います。はい、韓成敏先生、ありがとうございます。

韓成敏 韓成敏です。議論の中で移動と移住が混在して使われているのではと思いました。私には2点が異なっているように考えられます。先ほど申しましたが、帰ってくるのが予定されている移動、言い換えると旅行なり、違う目的の出張なりがあるでしょうが、近代以降の旅行は非常にレジャー化しているところもあります。長期的に行くとしても帰ってくるのが予定されているというのは、他に頼れるところがあるということです。完全に移住すること、即ち移住と移動は区別すべきではと思いました。

次に、移住して定着したという時に、先ほど塩出先生は「ネーション」ではなく「エスニック」の観点から見ると仰いました。にもかかわらず、母国というのが大きな力になるということを否定するつもりはありません。韓国ではこのようにいわれています。「家から出ると苦勞する」、そして「海外に行くと皆愛国者になる（訳注：海外では国が恋しくなる）」、こういった表現が日常的に使われています。ところで、果たして力になるとはいえ、そういった国家が全ての移住グループに対しそのように恩恵を与えるのか。国家の立場からすると、多様な目的があるだろうが、基本的に移住民と居住する国家との関係、重要性によって移住民グループへの待遇も異なるということです。「10本の指を噛んで痛くない指はない（訳注：韓国のことわざで子息を平等に接するということ）だろうが、もっと痛い指もあれば、それほど痛くない指もある」ということです。

そういった国家権力が移住と移動において国内での移住や移動を自由に行うことは近代国家以降における統治力の自信の表れではないかと思います。広範囲な地域に対する権力作用に自信を持っているからこそ可能であって、国境を超えると統制不能になります。ですから、ある程度の統制はできるでしょうが、その線を超えた人に対して国家が果たして最後まで責任を負うのか、私は懐疑的です。ここについてはどういう風にお考えでしょうか。1次的には塩出先生にお尋ねします。そして、近代に関してコメントくださった大久保先生や秦方先生にもお伺いします。

南基正 移動と移住を区分してみよう、という問題意識からのご質問でした。まずそれでは塩出先生から簡単にご答弁をお願いいたします。

塩出 ご質問ありがとうございます。移動と移住の違いというのは、大きな論点なん

ですが、私の考えは少し韓先生とは違って、実は移動と移住というのははっきり分けられないというものです。というのは、帰るところがあるかないかというお話だったんですが、たとえば日本からハワイやアメリカに移住した人が、帰るところがなかったのかというそうじゃないんですね。実は最初は日本に帰るつもりだったんですね、ほとんどの人は。実際に帰った人もいます。帰ったので、今は日本に子孫がいるという人もたくさんいますが、残った人が日系人と言われているだけなんです。だから最初から帰るつもりがなかったのではなくて、最初は帰るつもりがあったし、あるいは行ったり来たりするのが一番都合がいい、これが世界中のほとんどの移民の姿だと思います。現在もそうです。つまり最初から帰らないつもりで移住したのは、難民とかごくわずかな人であって、実際には行ったり来たりするというのがほとんどですね。実際には片道だったとしても、いずれは帰るつもりだったということのほうが一般的だと思います。そのなかでたまたま残った人が移民といわれているだけじゃないか。厳密にはその線引きは難しい。あるいは結果としてしかわからないというふうに私は考えています。

南基正 はい、ありがとうございます。大久保先生、ご意見いかがですか。

大久保 ただ今の韓先生のご質問にかかわる形で問題を提起したいのですが、本日、塩出先生は、「ネーションを超える形でエスニック・グループが動く」というお話しをされました。しかし、「ネーション・ステイト」が一つのフィクションであると同様に、「エスニック・グループ」という概念もまた、一つのフィクションであると考えます。第一部で検討があった中世から近世の時代には、おそらく「エスニック・グループ」の観念はなかったのではないかと思います。なぜ塩出先生は、移民を考えるとときに「エスニック・グループ」を最小の範囲と考えるのか。それはいつごろ成立したのか。古代から存在していたと考えられるのか。教えていただきたいと存じます。

南基正 質問が相次いでいる中で、簡単にお答えできるようでしたら、お願いします。はい、塩出先生。

塩出 ごく簡単に答えると、エスニック・グループというのが古代からあるものだというふうには考えておりません。似たようなものはありますが、現在存在するようなエスニック・グループとか、あるいはそういうエスニックなアイデンティティというものは、19世紀以降に、要するに近代国家のなかでおこった移動の結果生まれた帰属意識の結果であると思っています。それがあつた種のフィクションではないかと言われれば、そうなのですが、ただ民族意識とかアイデンティティというのは、あいまいな意識なんですけど、私は曖昧な意識もリアルなものだと思います。それはフィクションといわれればその通りですが、しかし人間の虚偽意識はある程度リアルなものだというのが私の考えです。

南基正 はい、ありがとうございました。予定の時間が迫ってきております。それで

も、6人の指定討論者の中でまだご発言されていない方がお二方いらっしゃいます。お二方に対し簡単にこれまでのお話をご自身の研究領域からどのように捉えられるかについてまとめてお話しいただきます。最初は秦方先生に一言お願いします。

■ 秦方 ありがとうございます。先生方の発言をずっと聞いていました。最後に議論になったのはネーション及び民族、ナショナリティという概念をどう理解するかという問題で、これはとても重要だと私は思います。先生各位の議論について、それは各自の実証研究から得た概念なので、それぞれ一理があると私は思います。皆さんがより議論する余地のあるスペースを形成したいのならば、まず私たちがどのような共同の土台に立ち、あるいはどのような共通の知識体制においてこれらの概念を明確化するかを確認する必要があります。こうすると、議論がより有効になると私は思います。小さなコメントになりますが、以上です。ありがとうございます。

■ 南基正 はい、ありがとうございました。次は榎本先生に簡単にこれまでの議論をまとめていただきます。

■ 榎本 移住、移民に関して考えるときに、近代には国家が必ず背後に控えています。前近代の場合は逆に、国家が絡む形で移民が行われることは、あり得ないだろうと思います。まず国と国の間に必ずしも合意があるわけではない。お互い国交がある場合のほうが少ないですし、合意がある場合であっても、その場合は外交や貿易のために一時的に人の移動があつて、その場合はお互いに連絡を取り合う文書などが出されるわけですが、そのときにうちの国民をそっちの国に住まわしてくれと伝えることは、まずあり得ないと思います。たとえば、これからお前のところに軍隊を駐屯させるぞという場合、これはモンゴルが高麗に対してやっていたわけですが、そういう場合を除いては、普通はない。だから逆にいえば前近代の人の移動は、国家が介在するとできない性格のものであつて、だからこそ、商人とか、難民とか、そういうふうな人々による自発的な動きでもってのはじめて人が移動できるようになると思います。前近代でいえば、日本人町などが一番いい例でしょう。

お互いの国同士の合意のもとで、人の移動を認める世界が生まれたのが近代であつて、それができなかったのが前近代ではないかなということを、なんとなく思っています。以上です。

■ 南基正 はい、ありがとうございます。簡単に整理できないというのが第2セッションまでの結論かと思います。私も深くは考えていなかったせいか、非常に理解が平面的だったと思います。歴史の文脈や地域から離れて理解してはいけないと改めて思いました。

移動という行為が結局、境界を可視化させます。境界があつたとはいえそれが一つだけの存在を前提にするわけではなく、境界があつたからこそ他者がおり、

自我があり、それが共存しているということも我々が考えるべきだという問題提起がありました。そして、ナショナル・ヒストリー、トランスナショナル・ヒストリー、グローバル・ヒストリーのようなお話がたくさん出ました。聞いている限り、これまで「インターナショナル・ヒストリー」というのは出ていないようです。ですから、「移動の問題とインターナショナル・ヒストリーとは何か」ということも、国際政治学を研究する人間として、もう一つの質問を抱えるようになりました。また、近代の民族国家と帝国のような様々な、いわゆるグローバル・ヒストリーからのアクターの問題も出ました。

問題をたくさん掘り起こして、第2セッションを終了させているようで、申し訳ありませんが、第3セッションでは劉傑先生がより明確に問題提起を整理し、次の議論を続けてくださると信じています。皆さま、第3セッションはご食事の後、13時半から開始します。昼休みが若干短くなりましたが、13時30分に再度お集まりいただき、午後のセッションを続けていきたいと思います。お疲れさまでした。ありがとうございました。

第3セッション

自由討論2

司会：彭 浩（大阪市立大学）

論点整理：劉 傑（早稲田大学）

パネリスト（国史対話プロジェクト参加者）：

市川智生（沖縄国際大学）、大川 真（中央大学）、佐藤雄基（立教大学）、平山 昇（神奈川大学）、浅野豊美（早稲田大学）、沈 哲基（延世大学）、南 基玄（韓国独立記念館）、金キョンテ（全南大学）、王 耀振（天津外国語大学）、孫 継強（蘇州大学）

[発言は母国語]



彭浩 皆さん、こんにちは。今は日本時間午後1時半になりました。私は第3セッションの司会を担当させていただく大阪市立大学教員の彭浩です。これから午後の自由討論は二部構成になっており、前半は主に私が司会を担当し、後半は高麗大学の鄭先生が司会を担当していただきます。私の今の発言は聞こえるのでしょうか。大丈夫でしょうか。これからはまず劉傑先生に論点整理をしていただきます。午前中の研究会に参加しなかった先生がいるかもしれないので、その前にいくつか注意事項を言わせてください。午前中にも説明しましたが、同時通訳に関する注意事項をもう一回言います。これから自由討論のセッションでは、発言する前にまず挙手して、司会者の確認を得てから発言してください。発言する時は、ビデオをオンにして、母国語を使ってください。最初に発言者の名前と所属を皆さんに伝え、通訳のために、使用言語も言ってください。また、発言のスピードをできるだけ落としてください。午前中は議論の時間が厳しかったようで、皆さんは喋るスピードがどんどん速くなったことがありました。固有名詞や人の名前、地名などがありましたら、午前中と同じように紙に書いて、ビデオを通じて皆さんに見せるようにしてください。チャット欄にコメントを書き込むことも可能です。一般参加者はチャット欄でしかコメントできませんが、後半に時間の余裕があれば、皆さんがお書きになった質問をまとめ、先生方に回答しても

らうことがあるかもしれません。それでは、劉先生に論点整理をお願い致します。

論点整理

劉 傑

彭浩先生、どうもありがとうございます。今日の午前中にテーマ報告をしてくださった塩出先生、及び素晴らしい発言と討論を行った先生方に感謝の意を表したいと思います。先生方の発言の中で取り上げられた問題は様々な方面と視点が含まれているため、その全ての内容を整理して纏める能力を私は持っていません。論点整理を担当する機会をお借りして、自分が先生方の報告及びコメントを聞いた感想やいくつかの個人的な考えを述べさせていただきます。



中国と日本、韓国の歴史は、せんじ詰めれば、三国の間における人の移動と交流の歴史でもあります。人の移動という歴史なしでは、中国と日本、韓国という三カ国の歴史、特に近代史は書けないかもしれません。周知のように、近代中国の革命や近代中国文化の形成には、多くの中国人が日本に移動したという事実なしではできなかったのです。中国と日本の戦争史においても、多くの日本人による中国の東北（当時の「満州」）と中国大陆への移動がなければ成立しなかったのです。現在の日韓関係に影響する要因には、当然植民地時代における日本の韓国に対する統治と人の移動が含まれます。しかし、このような重要な問題は各国の歴史教科書においては正面から書かれていません。これは一つ大きな欠落であり、「国史たちの対話」でこの問題を議論するのは非常に意義のあることだと言えます。

ここからは塩出先生が提出した三つの問題を中心に、いくつかの具体的な問題を整理していきます。今画面に映しているのは私が作成したメモです（掲載略）。塩出先生が提出した最初の問題は「何が人の移動を規定するのか」、「人の移動を規定するものは何か」です。三つの視点からこの問題を考えることができると思います。まずは移動者、移動する人の考えや意思の視点から考えることです。これについて、先ほど趙阮先生が言及した自発的移動や、非自発的移動があり、移動者の移動は自身の意思によるものと自身の意思によらないものと二種類に分けることができます。

人の移動は自身の意思だけで決められるのではなく、様々な外部条件にも影響されます。外部条件と人の意思が共同作用で人の移動を引き起こしたのです。外部条件にはどのようなものが含まれるのでしょうか。これについてもいくつかの視点から分析することができます。一つは国家の政策です。もう一つは政策に関連する、あるいは政策に影響を及ぼす一連の要因で、戦乱や災害、貧困などが含まれます。戦乱と災害は一時的な要因である可能性があるのに対して、貧困は長期的な問題であるかもしれません。そのほか、疫病もあり、これらは人々がもとの生息地を離れて移動することを引き起こす外部条件です。

移動した後に彼らはどのような活動に従事するのでしょうか。よくある活動を以下のように分類することができます。一つ目は労働に従事することで、二つ目は留学です。近代以降大きな比重を占めたのは留学で、留学からもまた様々な関連問題が引き起こされます。労働と留学以外、様々な交流活動もあります。また、個人の視点からいうと、家族や婚姻などのための移動も行われています。もう一つは難民という形での移動です。特定の目的をもってその移動先の国に移動するのではなく、ただ避難のために一つの場所にたどり着くだけということです。「人の移動がどのような制限を受けているか」という問題を考える際に、これらの要因を考えに入れる必要があります。

塩出先生が提出した二番目の問題は「人の移動によって何がもたらされるのか」という大きな問題です。これについてもいくつかの視点から考えることができると私は思います。まずは国家と社会の関係の変化についてです。先ほど秦方先生は周縁化の問題に言及しましたが、こうして母国と「移民」との関係という変化を引き起こしました。同時に別の問題も生まれたのです。それは移動先の人びとと「渡来人」の関係という問題です。また移民そのものにも注目すべきです。移動先において「移民」の間にもグループ化という変化も発生します。それぞれのステータスや経済状況などにより連合や対立などの変化が生まれ、これも注目すべき問題の一つです。例えば、特に中国の移民の間では各地域において同郷会という組織が創設されています。このような同郷会という組織の移民への影響も注目に値します。そして本国との関係はより複雑な問題となります。例えば、歴史において、日本に移動した人に革命派になった人が多くいたと同時に、現地社会とうまく融合した人も多くいました。そのほか、現在アメリカに移動した中国人も多様な活動を行っており、アメリカ政府の顧問となった人もいます。人の移動によって「移民」と母国そして移動先の国という異なる国家間における複雑な関係が生まれ、この視点も無視してはなりません。

塩出先生が提出した三番目の問題は「各国の国史教育が移動の問題を如何に扱っているのか」という問題です。中国の教科書に関しては、私は詳しいわけではありませんし、人の移動という視点から書かれていないかもしれませんが、海外へ移動した中国人が取り上げられている部分はあります。しかし、その際は、愛国あるいは革命の視点、または民間の友好関係や現地への貢献などの視点に限ります。外に移動した一部の人が言及されますが、これら海外へ移動した中国人の活動は上述の範囲にとどまらず、遥かにそれを超えています。日本の教科書には遣唐使や遣隋使などのような歴史上の人の移動が見られるかもしれませんが。近代では、アメリカと日本の間に発生した「排日移民法」などの問題があります。これらの問題は異なる時期の歴史ナラティブにおいて言及されますが、移動した人々の集団としての生活状況は注目されてこなかったのです。

最後に、四番目として「今日我々が人の移動を歴史から考えることの意味」という問題について話したいと思います。特に近代以降、人の移動の原因や状況、そしてその影響が国家と国家間関係に何をもたらしたのかというのは一つ我々が注目すべき問題です。または国家と国民（近代以降なら国民）あるいは移動する人との関係という問題です。特にグローバル時代において、「国家」や「国境」、

「民族」などの概念について人々はどのような異なる認識を持っているのでしょうか。先ほど塩出先生が日本語の「民族」という概念を使ったが、中国語の「民族」の概念の意味と異なるかもしれないと述べました。塩出先生が言ったのは ethnic group とのこと、自信はあまりないのですが、それは中国語では「民族」ではなく「族裔」という概念に当たるかもしれません。「民族」という概念について、近代以降中国は対外関係において中国で生活する人の集団に言及する際に「民族」を使うことが多いのです。特に民族の危機に遭った際になおそうなります。それゆえ、近代以降の中国は普通は中国の対外危機を「民族の危機」と称します。これが中国での「民族」という概念の意味であり、「国家」とはもちろん異なる意味を持ちます。この意味で、先ほど塩出先生の発言に言及された「民族」は「族裔」という概念に近いと私は考えています。

そのほか、もう一つ注目すべき問題は久保先生が言及した人権と主権の関係に関する問題です。人の移動から生じた人権の問題に今人々が比較的関心を持っているかもしれません。

または多様化社会の構築という問題です。現在は何の国でも移民、あるいは流動してきた人が多く存在します。このような社会において、どうすればこれら多様な族裔が一つ調和のとれた社会を形成できるかについて、我々は歴史から答えを見つけることはできるでしょう。ある意味で、本日先ほど先生方は「移民」や「移動」そして「流動」という概念の問題を議論してきました。グローバル化の発展、特に「近代化」と「民主化」の推進に伴い、移動は流動の方向に向かって発展するかもしれません。「移動」とは、人は到着後、一定の時期においてそこに定着しますが、「流動」とは常に変化するプロセスに存在します。「流動」という常に変化するような移動の方式は未来の主流になるかもしれません。

今日我々が考えているこの問題は国家と国民の関係や人権問題、社会の多様化問題など私たちが現在関心を持っている問題と関連しています。歴史において、特に近代史において、我々はすでにこれらの問題に触れました。うまく対応できた時があれば、全然できなかった時期もありました。私たちは対話を通じて、過去の歴史に対するよりはっきりした理解ができ、今日に人の移動を考えることに有益な参照を提供することができましょう。

午後の討論では、もし以上のこれらの視点からより具体的な議論ができたら、私たちの今回の対話が非常に有意義になるでしょう。ここで発言を終わらせたいと思います。どうもありがとうございます。

自由討論

彭浩

劉先生、どうもありがとうございます。劉先生は今回の対話の意義をもう一度述べてくださいました。また塩出先生が提出した問題を補足し、追加説明も行い、これから議論する話題も多く提供してくださいました。今までの自由討論では、参加者全員順番で発言をしてもらうようにしてきましたが、今回は異なる形式を取りたいと思います。平山先生や大川先生も準備した原稿を今チャット欄にアップしてくださいましたが、申し訳ございません。今回は主題ごとにくつか

のセッションに分けて議論を進めたいと思いますが、発言する際には、主題に沿って論点を述べていただけるようお願いしたいです。

主題とセッションに関しては、塩出先生が提出してくださった問題と先ほど劉傑先生が整理してくださった論点に基づいて分けることができると思います。一つ目の主題を人の移動を規定する要因にしたいと思います。例えば、東アジアにおいて、ほかに注目に値する大規模な人口移動はあるかどうか、なぜ移動するかなどの問題があります。移動の要因について、先ほど先生方も政治や経済、宗教などの方面から言及しました。また、どこへ移動し、移動先でどんな活動を行い、これらは自由選択なのか、言い換えれば、強制なのか、自発のかななどの問題もあります。三カ国に何か共通点、同じトレンドやリズムを持ち、あるいは何か異なる特徴やお互いに制約する要因などがあるかどうかについても議論できると思います。例えば、近代化の過程において差が生じました。日本は急激な近代化によって、いわゆる帝国が形成されたため、移動においては中国と韓国に大きな影響を及ぼしました。

一つ目の主題とセッションにおいて、これらの問題と先ほど劉傑先生が発言の最初の部分に述べたいくつかの具体的な話題をめぐって討論できたらと思います。発言したい先生は挙手機能を使って、直接挙手してください。もう挙手者が確認できました。ありがとうございます。私が見た順番で、まずは平山先生をお願いします。

平山 神奈川大学の平山昇です。私が事前に用意したコメントは二つあるのですが、そのうちの2点目が今、司会者に言っていたポイントだと思いますので、これをお話することで司会者のリクエストにお応えしたいと思います。

人の移動を考えるとときに、これは近現代に限らず、国や地域に限らず、人類の普遍的な問題として宗教に着目したほうがいいんじゃないかなということです。

張佳先生は、中国近世史の大規模な移動の大きな要因を「政治」と「経済」に分けて説明されましたが、今司会者がおっしゃったように「宗教」についても考えると面白いと思います。

たとえば、榎本先生の報告からは、中世の日本から大陸への移動の動機として仏教が最重要だったと教えられました。

また、韓成敏先生はトランスナショナリズム、ディアスポラについて指摘されましたが、いずれも「宗教」が重要な approach となります。なぜなら宗教は「国家」「民族」とは異なる「交流と分断」をもたらすからです。たとえば、日本の事例でいうと、同じ日本人でも江戸時代の潜伏キリシタンへは過酷な弾圧がなされましたが、潜伏キリシタンへの差別はつい最近、1990年代まで続いていました。移民排斥の問題でも、真珠湾攻撃以降に強制収容されたアメリカの日系移民を援助し続けたのはユダヤ系アメリカ人の仏教徒でした。また、大久保先生が言及された難民についても、非政府組織として常に最前線に立ってきたのは宗教者たちです。

ここでみなさんにお伝えしておきたいのは、実は、宗教研究者たちは国をこえた研究交流を相当盛んにおこなっています。残念ながら、宗教を専門としない研

究者は、宗教を重視しない、あるいはまるで無視するかのような傾向があるように思います。宗教を専門としていなくても宗教を視野に入れるということが、移動・移住の歴史を考える際には不可欠であると思います。私はこういうコメントを用意しておりました。以上です。

■ 彭浩 平山先生、どうもありがとうございます。平山先生は宗教や難民に関する重要な要因について補足してくれました。大川先生も挙手しています。大川先生、発言どうぞ。

■ 大川 日本の中央大学の大川です。事前に用意した私のコメントペーパーについては、タイミングがあればお話ししたいのですが、まずは議論を進める上で注意したいことをお話ししたいと思います。おそらく今日のパネリストのなかで、哲学科の教員は私だけだと思います。哲学の観点からいうと、彭浩先生が挙げた一番目の観点で述べられた自発的か非自発的かという区分は重要だとは思いますが、簡単には分けられないだろうと思うんですね。すなわち自発的か非自発的かというのは、あまり実はそういう分け方というのは意味がないことがあるんですね。今、政治哲学のなかで「中動態」という概念が多く説かれます。簡単に説明すると、薬物中毒患者は自分が好きでやっているように他人からは見えますが、そうせざるを得ないようないろいろな状況がある。つまり一見自発的であるように見えるかもしれないけれど、周りからの他動的な、他からの要因によって、そうせざるを得ないような状態、これを「中動態」といいます。「移動」に関して言うと、国家命令で動くということもありますが、多くは、例えば日本ではなかなか生活できないから、他の東南アジアとか中国とか朝鮮半島に渡って生活をする。こういう状態を自発的と非自発的に簡単には分けられないと思います。私は、仮にその人が喜び勇んで行ったとしても、自発的ということはなかなかいえないのではないかと思います。すなわち国家が経済政策とか福祉厚生を十分に実行できていた環境ならば、自発的といえますが、そういった状況がないなかで移動していくことを、簡単に自発的とはいえないと思います。以上です。

■ 彭浩 大川先生、発言は以上でよろしいでしょうか。ほかに補足ありますか。大丈夫ですね。どうもありがとうございます。大川先生の発言も非常に啓発的です。今日の討論者には政治史の専門家が多くて、議論が偏ってしまうのではないかとこの心配がありましたが、大川先生は哲学の専門家で、私たちにいくつか重要な視点を提示してくれました。先ほど大川先生は多くの日本人が生計を立てるために南洋あるいは満州とモンゴル地域に渡ったと言及し、経済という要因にも注目すべきだと私は思うようになりました。私は今経済史も教えていますので、例えば18世紀後半、東アジア各地域において人口が増え、就職が問題になりました。清朝中期以降、大量の人口が南洋に移動する傾向が現れました。南洋への移民現象はそれより早い時期にすでにありましたが、清朝中期以降は特に顕著になりました。近代になってからも中国と日本、韓国に同じ傾向がありました。東アジア地域の移民を議論する際に、私たちが最初に思いつくのが大体マイグレーション

ン、この海外への移住という傾向で、これは私たちの共通のリズムです。浅野先生と劉先生が今挙手しています。まずは浅野先生にお願いしてもよろしいでしょうか。

■ 浅野 ありがとうございます。こちらはボストンのケンブリッジで、今は夜の1時です。今日は本当に深く考える機会を与えていただいて、大変感謝申し上げます。

セッション2の討論の際にチャットにも書いたことなのですが、帝国という存在が人の移動をどういうふうにご利用してきたのかという観点で、近代以前と近代以後の異なる性格の帝国に、ある種の共通性を論じることができると思います。モンゴル帝国は色目人を利用し、それを商業の活性化や交通ルートの開発に使いましたが、これに対して、日本帝国の場合というのは、お雇い外国人を雇い、西洋の技術を学び、留学生を派遣し、また近代化にとって、最初の対象となる農村の合理化によって余った労働力を移民に送り出すことをしました。総力戦の時代には、朝鮮のエリートたちを協力者として把握することで、朝鮮社会のなかでさらに疎外されていた村にまで国家権力を及ぼし、いわゆる強制連行という形で、人の移動を人工的に引き起こした、そういう構造が見えてくると思います。これはいわゆる、塩出先生がいわれた、強制された人の移動という側面ですけれど、確かに国家に政策があれば、民衆には（その政策に対応する）自発的な対策があるといえるでしょう。これは中国の人がよく言う言葉（「上有政策、下有対策」）ですけれど、やはり、明らかに国家の政策に呼应しながら、全然別なことをする下からの民衆の動きというのがあって、その中間地帯に大川先生のいわれた中動態という、どこまで意識的に動いたのかわからない自発なのか強制なのかわからない人の移動があるのだと思います。これは30年代、満州国以降、少し労働力が不足してきたような日本社会に、官の斡旋という形で朝鮮から労働者が流入した現象とか、そのあたりかなと思われます。ともかく、我々近代に生きている人間は、国民や民族というのが古代からあったという前提で考えてしまう傾向が染みついてしまっていますが、そうした意識がまだ成熟していない、もしくは未成立であるという前提で人の移動という現象に注目する必要があると思うのです。人の移動というのは、ある程度客観的に把握できる部分が多いので、もちろん中動態という概念に象徴されるように、人間の意識までは把握できないですけれど、どういう階層の人間がどこに移動したのかということはある程度客観的に把握できる材料です。それを使うことで、今までのグローバル・ヒストリーに、国民形成のダイナミクスの抽出というような新しいテーマを提供できると思うのです。今までは、常に疫病だとか、わかりやすいコレラとか、わかりやすいものを対象をもとにしてグローバル・ヒストリーが描かれてきたと思うんですが、人の移動を軸にしてグローバル・ヒストリーを描くというのが今回の試みで、それは逆にいうと、我々の眼に近代というフィルターがかかっていることで、見えないようなものが見えてくる糸口に、人の移動という現象はなるのではないかというのが、最も言いたいところです。

モンゴル帝国がいかに、東西交流の活発化という観点から近世の先駆けとしての役割を果たしたのか。また日本帝国がいかに西洋の文明・産業力を留学生やお

雇外国人を利用して、東アジアにおける内発的な近代の先駆けをなしたのかというような観点から、国家対社会という、塩出先生が出されたフレームワークの中で、近代国家や近代的な社会ではないものに、我々がイマジネーションを及ぼし、またある種、近代的に汚染されてしまっているような我々の視覚をもっとそぎ落としていくことができるのではないかと考えるんです。

付け加えますと、平山先生が出されている宗教の機能というの、大きく近世以前と、中世の時代と近代は大きく変わっていて、その中間に近世があるということは確実だと思いますし、宗教の機能という観点からも近代をマクロの歴史の中で相対化していくことができると思うのです。

ですから私が言いたいことを簡単にまとめると、今回のテーマであるところの、人の移動をいかに国家が管理したのか、あるいは国家の管理をすり抜けて、人がいかに移動したのかという実証的な問題を事実として検証すること、を通じて、我々が歴史家としてただその事実を楽しむのみならず、古代・中世・近世・近代の国家や社会というものを、一般社会にも伝わりやすい形で、より客観的に議論できる土台にできると思いますし、また、近代というのがいかに特殊な時代なのか、安易に歴史の教訓なるものを現代的イデオロギーや近代の特殊性を意識することなく使ってしまうという過ちを戒める材料ともできるのではないかと。自尊であれ、自虐であれ、心理的な土台となっているものに、具体的な数字から迫ることができるんじゃないかと思うのです。

また、中国の秦方先生がきちんとした概念を土台として議論しないと、何を議論しているのかわからなくなってしまうという問題を立てられたと思うんですけど、私も深く共鳴するところがありました。それに対しても、同じ角度からちょっと問題を提起してみたいと思います。グローバル・ヒストリーで必ず問題になるであろう問題として、琉球王朝や沖縄の人々をどう見るのかという問題があると思います。

「沖縄」の人々は「大和」の人々と民族的に近代を通じて融合したと私は考えますがけれど、この問題をともに議論しようとする、その先生は頭がおかしいんじゃないか、変な学者だなとおそらく見られるかもしれません。それは我々の感情の中に、そういう発言をする人はおかしい先生だという価値判断や常識・モラルがすり込まれている証拠です。しかし、そうしたものが研究の上にある種のタブーを作って議論の対象とするのが難しいという現象が起きています。同様に台湾問題を中国の方が議論するのがなかなか難しいように、いろいろなタブーによって国民という社会が成り立っていることがわかると思います。しかし、そういう研究者自身の内面でも働いているところの、いろいろなタブーや感情自体を歴史の産物として超えながら、議論し対話していくための共通の土台の一つを、我々は人の移動と国家という関係を考えることで構築できるんじゃないかと考えるんです。ですから色目人コミュニティがあって、新しいコミュニティが生まれていたといった張先生のお話やモンゴル帝国の話が、私には非常に面白かったんですけど、こうしたコミュニティーの形成・変容は近代にもあてはまるとおもうのです。

近代の日本帝国の場合には、支配に反発する人間たちが、日本とは異なる中国

や朝鮮の国民というものを作ろうという努力をし、独立運動をし、帝国を分裂させていったわけですね。ですから人の移動によって、人はあるときには新しいコミュニティをつくり、国民を含めた大きな新しい集団を作るのに対して、別なときには独立運動を起こし分裂させていく、何がそのダイナミズムを決めていくのかという問題も、ぜひモンゴル帝国をやっている先生方にお話しをうかがいたいと思います。

例えば、高麗朝以前の新羅の時代に、色目人たちと接触したことを示す中央アジア的な顔立ちの人物の銅像が残っています。新羅の昔の都の慶州というところに私自身が観光に行った際に、その銅像が展示されているのをみました。それを材料に、現代の韓国ドラマの「善徳女王」の中では、7世紀の中頃にいた女王が韓国ドラマの主人公になるのですが、色目人たちと、中央アジアまで出かけて接するシーンがドラマに出てきますが、案外作り話ではないということが銅像からわかるのですが、古代における人の交流というのも相当活発で、それが古代の王朝の攻防と関わっていることも確実であろうと思うのです。

近代をやっている人間にはわからない古代中世の魅力というものも、今回のセミナーでは感じる事ができて、そういう古代や中世の専門家の方々のお知恵を借りながら、我々がいかに近代的なものに毒されてしまっているのか、見えるべきはずのものが見えなくなってしまうのか、それが議論できれば一番いいんじゃないかなと思うのです。いかがでしょうか。ありがとうございました。

■ 彭浩 浅野先生、どうもありがとうございます。浅野先生はさらにいろいろな話題を提示してくださり、特に帝国及び近代化の問題に言及し、国家管理などについて先ほどの問題を答えてくださいました。浅野先生の発言には、日本帝国とモンゴル帝国の比較問題も言及され、これはとても大きい問題で、次の主題とセッションに関連していると思います。ただ今の一つ目のセッションにおいて、どこへ移動し、移動先でどんな活動を行ったかについて、モンゴル帝国史研究の先生方には何か補足はあるでしょうか。張佳先生あるいは趙阮先生、もし何かございましたら、ご意見をいただけないでしょうか。張佳先生はいかがでしょう。

■ 張佳 はい、元朝の歴史を専門としていますので、私から簡単に補足させていただきます。元は少数民族が漢民族の中原地域に最も多く移住した歴史時期だと言えます。北方の草原民族や、東北からの民族だけではなく、中央アジアや西アジア、ヨーロッパからも多くの集団移民がありました。中国の歴史書に記載された「色目人」を細かく分類するならば、およそ50の集団に分けることができるので、その規模はとても大きかったです。

これらの人々が中国に渡ったのには主に二つの要因があります。一つ目は戦争の影響です。モンゴル人は西征の過程では大量の他民族の捕虜を捕まえ、彼らがモンゴル軍隊に加入し、モンゴルが南宋と戦争した際に続々と中国本土に渡りました。二つ目の要因はビジネスです。先ほど趙阮先生や他の先生方も言及したように、多くの色目人は中国で斡脱（Ortäg／オルトク）の商人として活動していました。最も有名なのはマルコ・ポーロであり、先生方もご存知だと思います。

が、彼の『東方見聞録』はかつてヨーロッパで大きな反響を呼びました。マルコ・ポーロはイタリアから中国に渡った商人で、多くの研究者の推測によると、彼はモンゴル皇室に雇われ、皇帝のために商売をしていました。そのほか、午後の討論において先生方が指摘したように、元の時代において、宗教という要因によって中国へ渡り、または中国を出るような人口移動もありました。例えば、当時ヨーロッパのカトリック教会の教皇は元政府と関係を結ぶために、宣教師の使節団を派遣し、中国での布教活動が行われました。また、聖地を巡礼するために中国から離れるイスラム教徒もいました。これらの移動は宗教の交流に関係しています。

概して、元の時代には政府の人の移動に対するコントロールはそこまで厳しくなかったようです。先ほど趙阮先生は元の駅伝制に言及しました。駅伝とは政府が設立した旅行のために馬や宿、食事を提供する施設ですが、その利用者は特定の政府関係者に限定されており、普通は庶民向けではありませんでした。庶民は別の方法を利用しており、例えば自ら馬を用意したり、宿泊は旅館にしたりしていました。それにしても、元の政府は人口移動に対する制限はそれほど厳しくなかったようです。

明は元と異なります。実際の状況は別かもしれませんが、制度面では、明朝は人口移動に対して非常に厳しく管理し、それは中国における厳格な戸籍制度の始まりとも言えましょう。現在の中国では戸籍制度が徐々に緩んできましたが、もともとの厳格な戸籍制度を遡るならば、明朝に辿り着くでしょう。現代中国語には「籍貫」という言葉があり、今でも使われています。中国では多くの個人情報関係の記入用紙には「籍貫」という項目が設けられています。これは明朝からの言葉です。「籍」はもともと職業の種類を指す言葉で、この概念は元から継承されたものです。日本も似ているかもしれませんが、元朝では庶民の職業に関する等級制度が実施されていました。例えば、「軍戸」の場合、家族から代々軍人を送り出さなければならず、「匠戸」であるなら手工業に従事し、「儒戸」なら学問の道を歩くと決められました。明朝は特に「貫」を強調し、「貫」は「籍」と異なる意味を持ち、出身地と居住地を指します。これは例えば、科举制度など多くの制度と関連しております。明朝の科举制度では、「本貫」以外の地域での受験を禁止しており、例えば、山東の学生は山東での受験しか認められず、河北あるいは北京での受験は許されなかったのです。今の中国でもこの制度がまだ実施されています。現在の中国では「大学受験移民」という言葉があり、それは政府に禁止される行為です。本籍地での受験が決められており、それは資源配分に関連しています。明と清の時代において、制度面では人の移動に対する制限は比較的厳しかったのです。

しかし、政府の管理が厳しかったにも関わらず、生計を立てるために、いわゆる先ほど彭先生が言及した経済の圧力を解消するために、実際は明朝から多くの中国人が海外に渡っていました。福建地域は人口が多いわりに山地が多くて、平原が少なく、農耕が難しかったため、人口移動が最も活発に行われていました。明朝末には中央政府に海禁の中止を求め、福建からの人口移動を支持する現地の役人もいました。しかし、当時中国の世界観は依然と天下観であり、皇帝はこの

要求を受け入れなかったのです。中国を出る人は中央政府の管理から逃れた存在として朝廷に認識されたため、海外で被害に遭った時には当然朝廷からの支持が得られませんでした。長くなってしまいましたが、私の発言は以上となります。どうもありがとうございます。

■ 彭浩 張佳先生、どうもありがとうございます。張佳先生が提示した多くの問題は今までの議論と緊密に関連しています。張佳先生の発言では戸籍制度が何度も言及されましたが、それはとても重要な指摘だと思います。戸籍は現在の中国における人口移動に関連しており、広い意味では日本と韓国にも大きな影響を与えたと思います。討論者には古代史の研究者が少なく、皆さんは近代史に対する関心が多いと思いますが、私には戸籍制度に関する質問があります。知識に不備があるかもしれませんが、先ほど張佳先生は戸籍制度が明朝から始まったと述べましたが、私の知る限りでは、秦と漢の時代、特に商鞅変法以降、人の移動を厳しく管理するようになったと思います。当時の言い方が分かりませんが、籍を制定することを通じて、人の移動に制限をかけており、それに関連して、連座制や保甲制度も実施されました。これから先生方と議論する通行証を含めて、明朝の戸籍制度と関連するこれらのいくつかの制度は秦の時代からすでに実施されていたという印象を持っていますが、それは正しいかどうか張佳先生にご意見を伺えたらと思います。

■ 張佳 その通りです。確かに秦と漢の時代から庶民の移動に対してある程度の制限がかけられました。ただし、厳格な制限の実施は一般的には朱元璋からだと言えます。朱元璋は社会管理を非常に厳密に行った人でした。私が確認できた資料によると、古代（近代以前）の庶民は居住地から50キロメートルという比較的遠くない距離を離れるところで外出する場合は、政府が発行した「路引」という特別な証明ドキュメントが必要でした。政府に外出の理由を説明した上で、印鑑が押された証明書類を発行してもらわなければならなかったのです。資料によれば、それまではこんなに厳しい制度はありませんでしたが、明朝からは実施されるようになりました。もちろんその前にすでに長い歴史があり、商鞅の時代から徐々に庶民に対する管理を強化するようになったのかもしれませんが。庶民の移動を制限することは政府が賦役の源を確保することに関連しており、もし庶民に対する管理ができなかったら、国家への兵役と徭役の提供も確保できなくなります。以上を答えとさせていただきます。

■ 彭浩 張先生、どうもありがとうございます。先ほど述べたように、これからはこれに関する具体的な議論が行われると思います。張佳先生は先ほど何度も「路引」を言及しましたが、私を含めて、多くの先生が通行許可証、パスポートに関心を持っています。第一セッションが終わってから、第二セッションにおいて具体的な議論ができたかと存じます。浅野先生は何かレスポンスがあるようで、また挙手しています。浅野先生、発言どうぞ。

浅野 張佳先生、彭浩先生、本当にありがとうございました。私も近代の日本の帝国というのが、戸籍を通じて人の移動を管理してきたということで、博士論文を書きました。戸籍の種類を分けて、法域というものに従って、内地、外地と分け、外地を委任立法制度を総督という行政官を中心に作ることで台湾・南樺太・朝鮮というふうに領域的に定義し、その委任立法に依る朝鮮戸籍と、内地の帝国議会による戸籍法を分離することで、ある種、合法的に差別を導入したわけです。私法の上での差別を利用しながら、公務員給与等の公法にも波及させつつ、経済面や教育面（手段は異なる）では、同じ日本人だといって同化する。矛盾した側面があったのですが、なぜそれができたのかということを私の論文で論じたつもりです（『帝国日本の植民地法制：法域統合と帝国秩序』（名古屋大学出版会））。

また、もう一つ面白いと思ったのは、私は三谷博先生のゼミに出させていたでいて、江戸時代というのにはある種、旗本や通常の大名の国替えとそれに伴う官僚化した侍達によって構成される「お家」単位での人の移動を、幕府という国家が命令できるのが通常であったこと、しかし、どうしても動かせなかった藩というドメインが20個ぐらいあったと三谷先生がコメントされたことが今でも印象に残っています。島津なり、長州なり、やがて明治維新で活躍する大きな藩を除いては、江戸の幕府というものはすべて、あたかも役人が自分の任地、任官する場所を変えていくように、侍達は幕府の命令によって移動せざるを得なかったという時代が近世だというわけです。ですから私は逆に、張佳先生や趙阮先生に質問したいんです。明というのは漢族のいわゆるナショナリズム的な動機によって作られたとよく言われます。実際、漢族のナショナリズムの存在を示すものとして、明ができたこと、先ほどもコメントされたと思うんですけど、モンゴル帝国の非常に洗練されたシステムのなかで、なぜにして朱元璋を中心にして、漢族が反乱を起こしてしまったのでしょうか。それは人の移動の制限や差別、朱元璋がやったような厳しい制限が、モンゴル帝国の末期に存在したといえるのでしょうか。日本の教科書では、モンゴル帝国の中に存在した、色目人、漢人という区別や階層が出てきたりするのですが、人の移動の制度的な制限と、明の登場・勃興とは関係があるのか。そんな疑問が浮かんできました。詳しい議論というものは、もちろんちょっとここではできないと思いますが、人の移動が人間の意識に大きく働きかけるのは間違いないと思います。差別だというふうに怒りを感じる、それも制度としての人の移動の制限があるからこそ出てくるのだと思いますし、また我々の国民それぞれに記憶された記憶の中で、異なる形で歴史に出てくるものを、お互いに擦り合わせていくためにも、移動の制限と感情を結びつけることで、抽象的な感情ではなく、もっと具体的なものを材料に、お互いの国民の歴史認識の違いを議論できるのではないかと考えました。ありがとうございました。

彭浩 浅野先生、どうもありがとうございます。浅野先生は元の歴史を専門する先生方にいくつかの質問を提示し、国家が移動に対する管理や、人口に対する把握などの状況についても言及しました。第一セッションの討論にすでに長く時間を取りました。第二セッションでもまた同じ話題に言及すると思います。

第二セッションの主題については、国家が移動に対する管理、特に移民政策や出入国管理制度というより具体的な問題に設定したいと思います。すでに述べましたが、私自身を含めて、特に前近代を研究する多くの先生が通行許可証の研究にとっても関心を持っています。通行許可証をめぐる、中国古代比較的早い時期に出現した人口移動を制限する政策から私が専門する明と清という近世の政策まで、簡単に整理していきたいと思います。今回の会議に参加するにあたって、私は人口移動に対する関心が高まり、事前に歴史関係のドキュメンタリーを見ました。出土した秦の竹簡には、秦朝は商鞅変法以降、人の移動に対する管理がますます厳しくなり、「伝」という比較的早い時期の通行許可証が発行されたという記載がありました。その記載は非常に簡略であるため、その具体的な制度に関しては、まだ解明されていません。漢朝にはこのような通行許可証がより多く発行されていたようで、比較的多くの資料が確認できたのは唐朝でした。唐朝には「過書」や「過所」という通行許可証がありました。これについて、古代史を専門する鄭淳一先生はより詳しいと思いますので、鄭淳一先生に補足していただけたら幸いです。鄭先生、聞こえましたでしょうか。

鄭 淳一

はい、彭浩先生、ご指名いただきありがとうございます。渡航証明書と言いますか、古代において出入国管理制度の中で使用された通行証の問題に触れたため、私が普段から学部生の授業の際に使用してきたスライドを何枚か紹介しながらお話ししたいと思います（掲載略）。

画面共有します。ハングルと漢字が混ざっていますが、簡単な内容です。例えば、古代の場合、先ほど榎本先生の討論の際、日本と唐、即ち中国と日本を往来する際の通行証のお話がありました。「公驗」というのが出ましたが、古代韓日関係においての通行証はどんな形で史料に出てくるか簡単に申し上げます。まず1からです。『続日本後紀』を見ると、新羅人が日本に行った時「文符」というものを携行しているか否かが問われました。次に「牒狀」という文書の携行が確認されます。

（画面の）2で言っているのは日本人が唐に行くとき、即ち中国に移動する時の事例です。これは榎本先生がお話しなさったように、当時は「太宰府公驗」というのを持って行ったらしく、先ほどチャットで三谷先生からもご言及があったのですが、ちょうどお話が出たため少し述べさせていただきます。この公驗という文書の中には身分証明書的な内容、現在のパスポートのような内容もあれば、人員のリストもありました。即ち一人に対するものではなく、集団、船に乗った人の公驗の可能性が高いと考えられます。船にどのような人々が乗っているかを示すリストが添えられています。船に載せられた品物のリストもあります。次に彭浩先生がお話しなさった「過所」という文書が通行証の機能を果たしたようです。最後に3になります。日本人が新羅、即ち韓国に行く時には「公牒」というのを持参しなければならなかったように思われます。画面の絵は『新羅国執事省牒』という文書の筆写です。「高柳本」、「谷森本」、江戸時代の「慶長本」などとして残っています。これを翻刻するとこのように文章を完成できます。例えば、タイトルの「執事省」というのは、外交文書を担当する重要な役所を指します。

「執事省が日本の太政官に牒を送る」とあります。この文書で重要視されるのが先ほど申しました「公牒」です。

ところで、興味深いのはこの公牒が本物か偽物かを判断するとき、押されたハンコ・印鑑を見る点です。ここ（画面）を見ていただくと、太政官のハンコがはっきりしているか否か、本物か偽物かを見分けられます。これが「太政官印」です。この絵は古代の太政官印が復元された物です。このようなハンコに刻まれた文字がはっきりしているか否かが新羅で確認されたわけです。より興味深いところは文書の携行が求められたため、日本から韓国への出航が認められなかった人々はこの官印、ハンコの作り方を秘密裏に習い、「偽公牒」を作り出したことです。偽造の渡航文書を作り、海外渡航をした事例も確認されます。他の先生方が類似した事例をご紹介してくださると思いますので、私はここまでとさせていただきます。

■ 彭浩 鄭先生、詳しいご説明どうもありがとうございます。もう中世に入りましたね。中世について、先ほど榎本先生がすでに紹介してくれましたが、ほかに補足はあるでしょうか。例えば、日本国内や、あるいは中国国内での通行に使用される通行許可証について、榎本先生に何か補足はあるでしょうか。榎本先生、聞えますか。先ほど榎本先生はすでに「公驗」について紹介してくださいましたが、中世の日本国内での通行許可証、あるいは中国に渡ってから、中国国内での通行許可証に関する補足情報がありましたら、ぜひ教えてください。

■ 榎本 日本国内に関しては、「過所」というのは日本の中でもありまして、それを持っていると、関所を通るときのお金を免除されるというようなものがありました。

三谷先生から僕のほうにコメントが来ていたので、先にそちらに触れたいと思います。「国家の管理の出入国証明書や身分証明書を提供したという観点は大事だと思いましたが、僧侶のようなエリートではない人、たとえば水手（船の漕ぎ手）たちの権利はどのように保証されたのか」というご質問です。この点は、日本からの出国の手続きと関わります。日本から出ていく人への身元保証は遣唐使や遣明使のような国家使節に関しては必ず行ないますが、個別の人員に対して一人一人名前などを証明するのかというと、それは正直わからないところがあります。もしかしたら、その使節の幹部の人が相手国に行ったときにそういう書類を作るかもしれませんが、普通の資料の中では何人来たぐらいしか書かれていません。人数は把握していても、個別の人員について把握していたかどうかは、僕は怪しいと思っています。おそらくそこまで管理する機能は前近代の国家にはなかったんじゃないかと僕は思っています。

では、遣唐使や遣明使のような国家使節以外に関してはどうかというと、さきほど触れた大宰府公驗に関しては、船に乗っている人員の名前が書かれています。年齢まで書かれているのですが、それは、中国に行くお坊さんとその従者だけです。船乗りに関しては何も触れていないんですね。理由は簡単で、この時代の船乗りはすべてあちらの人間だからです。日本と外国を結ぶ船はすべて外国の

船であって、日本の貿易船は存在しません。外国の船が日本に来て帰るだけなので、船乗りに関して日本政府は何も保証することはない。このあと日本人も船員として船に乗り込む時代が鎌倉時代に來ますが、その頃の日本は全く外国との往來を管理する気がなく、完全に放置します。ですので、要するに船乗りの管理などはしていません。日本の船乗りたちは外国では自力でなんとかするしかないというのがこの時代、宋元の時代の実態であろうと思います。

中国国内での移動については、一般に貿易船の船乗りたちは港の周辺しか動かないので、それほど問題にはならなかったはずですが。遣唐使や遣明使の本隊は中国国内を移動しますので、上陸したあとでどこまで行くのかちゃんと把握される必要がありますが、彼らを運んだ船乗りは港に泊まれば良いのでそれはあまりいわれなかったと思います。前近代において中国国内を移動する日本人は、原則として遣唐使・遣明使以外は僧侶しかいませんでした。私が今回の報告で取り上げたように、中国国内を移動する必要のあった僧侶たちは中国国内の移動を認めてもらうための身分証明書類が必要となりました。しかし中世になると日本の国家はそんなものを全く作る気がなかったので、僧侶は自分たちで勝手に偽造して作ったのだというのが先ほどのお話です。

もう少しあとの時代、17世紀になると朱印船貿易というのが始まりまして、江戸幕府が、東南アジアに行きたい商人に対して発行します。それを持った人たちだけが海外に行けました。しかしこれは別に渡航先に見せるわけではありません。ただ幕府が許可したということを示す、日本を出るための許可証にすぎないので、相手に見せるという機能はなかったと思います。それは日本に来ていた中国商人も同じです。宋の時代には宋の商人が、中国で発行された出航許可証を持って日本に來ますが、それは日本に見せるためではなくて、商人が中国から出発するためにつくられたものです。

要するに外国人の出入国や国内移動に当たって、複数の国家がお互いに人の身元の保証をしあうというのは、遣唐使・遣明使などの国家使節以外はなかったと思います。日本と朝鮮に関してはいろいろな細かい規定がありましたが、それはちょっと省略します。

■ 彭浩 榎本先生、まだいろいろシェアしたいことがあると思いますが、時間の問題で申し訳ございません。まだ発言できていない先生が多くいます。

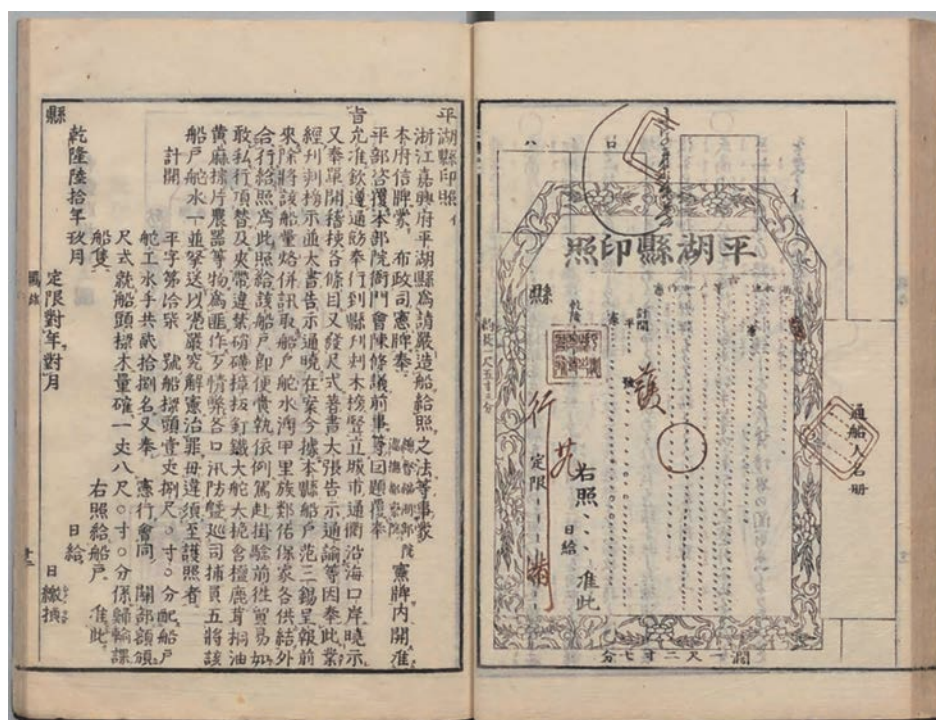
このセッションでは中世に入ったので、明と清という時代について、私から簡単に紹介させていただきたいと思います。私は近世の東アジアでの国際貿易を研究しているため、この問題に関係しています。早い時期にすでに通行証があって、明と清の時代にはより多く存在しました。多くの先生がご存知のように、中国の明朝には厳しい海禁はありましたが、明朝後期から海禁が緩和され、商人が東南アジアへの貿易が許可されるようになりました。当時の商人は中国の福建にある漳州というところから東南アジアに渡航し、貿易することが可能でした。当時は商人に「文引」という通行証が発行されていました。それは一種の渡航証明書であり、文引がなければ貿易のために海外への渡航はできませんでした。文引は張佳先生が言及した国内で使われた路引の延長線に生まれたものかもしれません。

ん。海禁が実施される前に多くの通行証が存在しましたが、海禁が実施された期間中には商人の海外渡航は禁止されたため、合法の通行証はありませんでした。海禁が緩和されてから、文引という通行証がまた発行されるようになりました。残念なことに、明朝後期に発行された文引の実物はいまだ発見されていません。

清朝になってから、この制度はより複雑になりました。私が行った研究によると、清朝の商人が日本に渡って貿易をするために、清朝政府は様々な証明書を彼らに発行しました。例えば、画面の右上にある「平湖県印照」を見てみましょう（図1）。船が完成したら、まず船の名前を登録します。この書類には「通船人名冊」、いわゆる人名リストが記載されていて、雇用された船員の名前を登録する必要があります。さらに、税関からの証明書も発行してもらう必要があります。また、日本での貿易には特許の証明書が必要であるため、商人の特許証明書も発行してもらいます。清朝政府が中日貿易を支持した一つ大きな目的は、銅銭の原材料になる銅を日本から輸入することで、その貿易にも特許の証明書が必要です。この証明書があれば、一般の海外渡航では禁止されるシルクなどの商品を持ち出すことが許可されます。これらの船が日本に渡るには、日本政府が発行した「信牌」という証明書も必要です。信牌は中国国内での一つの公文書の形式ですが、日本は中国船の貿易、特に密輸貿易を管理するため、中国商人を対象に信牌というものを発行したのです。ほかの先生も言及なさったように、当時は偽の文書もありましたが、この公文書には割り印や控えなどがあり、それで本物かどうかを確認することができます。

中日貿易のほか、広州での貿易もありました。西洋商人はマカオでの長期滞在は可能でしたが、広州での長期滞在は許可されず、通行証を持っていれば、貿易シーズン期間中にだけ広州への通行が許されたのです。左の図はマカオから広州への通行証になります（掲載略）。西洋船が中国で貿易するには税金を払う義務

図1：
「平湖県印照」の写し
(中川忠英編『清俗紀聞』、
国立公文書館蔵)



があり、右の図は納税完了の証明書です（掲載略）。この船が中国のほかの地域に渡り、現地の税関から税金の納付が求められる場合、この証明書を提出することで、すでに納税したことを証明することができます。

清朝には様々な公文書があったものの、現在中国で保存されている資料は非常に少ないです。先ほどお見せした日本の資料は原文ではなく、抄写です。遭難した船が日本に辿り着いた後、現地の学者がその公文書が面白いと思ったか、それを抄写したのです。後にこの資料が日本で刊行され、今は多くの図書館に所蔵されている『清俗紀聞』から見るすることができます。この二つのような証明書は今多く発見されています。この二つの公文書（マカオから広州への通行証と納税完了の証明書）はポルトガル・トンボ塔国立文書館に所蔵されているもので、もし皆さん興味があれば、文書館のホームページで閲覧することができます¹。

第二セッションの時間はもうあまりないですが、最後に私から第二セッションと関連し、まだ議論する余地のある問題を提示したいと思います。まず、ジェンダー史や女性史の視点からの議論がまだ行われていないことは残念に思います。とても興味深いと思いながらも、国史たちの対話ではあまり議論されてこなかったのですが、マニラでの会議で、女性史の専門家として、秦方先生が女性の問題を提示してくださいました。女性問題は人の移動にも深く関わっています。私の知る限りでは、先ほど言及した広州での貿易を例にすると、私が専門する明と清という時代に、貿易のために広州に行く西洋商人が女性を連れて行くことが禁止されていました。女性はマカオで滞在することは可能でしたが、広州への同行は許可されなかったのです。皆さんが周知のように、日本の長崎での貿易にも同じような規定がありました。また、国内での通行について、中国の場合、先ほど張佳先生は路引が必要だと述べてくださいました。中国の状況についてまだ調べていないので、あまり自信がないのですが、皆さんがご存知のように、日本では、中世は比較的自由だったものの、近世以降には「往来手形」という非常に有名な通行証が生まれ、これがなければ当時では移動が難しかったのです。女性の場合、更なる条件が課され、往来手形以外、ほかの通行証も申請しなければ通行ができなかったのです。後半の部分では、秦方先生は女性史の専門家として、女性の視点から補足していただけたらと思います。

最後に、このセッションに疫病という問題を入れたいと思います。劉傑先生が論点整理した際にも言及してくださいました。前回の会議でも感染症について多く議論しましたが、感染症は私たち現在の移動に大きな影響を及ぼしました。ちょうど専門家の市川先生がいらっしゃるので、これからの部分で市川先生からコメントいただけたら幸いです。私自身は通行証に関心を持っているので、関連資料を調べてみました。中世後期のヨーロッパではペストが蔓延した際に、人の移動を制限し始め、隔離という最初の検疫政策を実施し始めました。しかし、現在のように感染症が蔓延する中、隔離だけでは問題が解決されないため、後に、現在のワクチンパスポートと同じような発想で、ヘルス・パス（health pass）

1 トンボ塔国立文書館 (Arquivo Nacional Torre do Tombo)
Arquivo Nacional da Torre do Tombo - DigitArq (arquivos.pt)
<<https://digitarq.arquivos.pt/>>

という健康証明書が現れました。これは1630年にイタリアのジェノヴァで発行されたヘルス・パスで、イタリアのプラート出身の商人が所持するものです（図2）。中には彼の出身地や見た目の特徴、年齢などの情報が付記されています。この商人が所持するもう一枚の通行証があり、これはボローニャというところに行き、そこの衛生局より発行してもらった通行証です（図3）。感染症が蔓延する際に隔離は一つ重要な手段になるものの、隔離だけではすべての問題を解決することはできません。感染拡大をできる限り防いであうで、いかに人々の移動を秩序正しくするのかを考えなければなりません。これについて、後半のセッションでは、市川先生に補足していただけたらと思います。前半はもう時間になりました。前半は2時45分に終了予定でしたが、すでに2時46分になりました。これからは5分間の休憩を取りたいと思います。鄭先生、日本時間の2時50分に再開しても大丈夫ですよね。前半は終わりにします。皆さん、少し休んでからまた再開します。どうもありがとうございます。

図2：
ジェノヴァのヘルス・パス



図3：
ボローニャのヘルスパス



第4セッション

自由討論3

司会：鄭 淳一（高麗大学）

パネリスト（国史対話プロジェクト参加者）：

市川智生（沖縄国際大学）、大川 真（中央大学）、佐藤雄基（立教大学）、平山 昇（神奈川大学）、浅野豊美（早稲田大学）、沈 哲基（延世大学）、南 基玄（韓国独立記念館）、金キョンテ（全南大学）、王 耀振（天津外国語大学）、孫 継強（蘇州大学）

総括：宋 志勇（南開大学）、三谷 博（東京大学名誉教授）

閉会挨拶：趙 珧（高麗大学名誉教授）

[発言は母国語]



鄭 淳一 予定された14時50分になりましたので、最後の第4セッションを始めさせていただきます。私は司会を担当させていただきます、高麗大学歴史教育科の鄭淳一と申します。第3セッションでは司会の彭浩先生からミニレクチャーと言いますか、多くの詳細かつ興味深いお話がありましたので、第4セッションでは私の方より、本日ご参加いただいたパネリストの方々のお話をもう少し伺いしたいと思います。

第3セッションで彭浩先生からかなり多くの課題を第4セッションに渡されました。ジェンダー、女性史、感染症、ヘルスパスポート、健康証明書など多くの課題を渡されましたが、第4セッションでそのすべてを取り上げることは難しいため、これまで議論されてきた問題意識を基に、本日のパネリストの先生の中で発言されなかった場合、もしくは短くされた先生方に優先的に機会をもうけた上で、進めさせていただきます。

先ほど、市川先生と佐藤先生が前もって上げてくださった資料があります。平山先生の資料も100%取り上げることはできませんでした。いかがでしょうか。順序を司会者が決めてしまって申し訳ございませんが、佐藤先生からご発言の方、お願いいたします。それから、その次に発言を希望される方は画面に挙手でお願いいたします。ご発言の先生方は短い場合は2分、長い場合でも5分以内に

まとめていただくとありがたいです。対話のためです。大川先生が最初、佐藤先生が二番目をお願いいたします。

大川 日本中央大学の大川真です。今回のテーマ「人の移動と境界・権力・民族」に関して、私が好きな一つの映画を題材にコメントしたいと思います。なお私の専門は、日本政治思想史研究で、映画史の研究者ではありません。念のため申しておきます。

その映画は、林芙美子の原作、1955年公開の成瀬巳喜男監督作品『浮雲』です。成瀬巳喜男の作品はすべて好きなのですが、この作品では高峰秀子の演技に圧倒されます。さてこの『浮雲』は、前半では、農林省のタイピストであった主人公のゆき子が、新生活を求めて「仏印」（ベトナム・ラオス・カンボジアを合わせた地域）に1943年に渡り、農林省の技官であった富岡に惹かれ不倫していきます。「仏印」は当時の日本人に人気の高かった移住地の一つです。作品でもサイゴンとプノンペン、「オアシス」と表現されています。その背景には、日本本土での失業問題があり、また低賃金で生活が困難であった日本人は、帝国主義的な膨張の思惑とマッチして、より質の高い生活を求めて海外に移動します。しかし進出していく民間の日本人には国家主義、民族主義的な意識がほとんど見られず、前菜とメインがセットになっている料理、冷たいビール、ワイン、コーヒーを思うがままに嗜もうとする欲望が常に表面化しています。こうしたよりよい衣食住を求める素朴な願望こそが、意図せざるとはいえ、帝国主義的な海外侵略を下支えすることは注意すべきでしょう。これは午前中でも議論された国家的目的と個人の動機との関係論の解明にも繋がります。

また今回は議論されなかったジェンダー的な問題も考えるべきでしょう。『浮雲』では、寡黙な富岡は、本土で待つ妻・邦子のことを思いながら、ゆき子と関係を持ち、さらに現地の女中のニウとも関係を持ち、ニウを妊娠させます。しかしニウは恨み言も言わず黙って田舎に帰っていきます。ここに帝国主義の問題が端的に表れていますが、帝国とその植民地・占領地との著しい非対称性（asymmetry）は、妻子を本土に残して帝国から移動してきた男性が、植民地・占領地で現地の女性を愛人化して、混血児を残していくという事例は日本に限らず数多くあります。セクシャリティをめぐる男性と女性の非対称性（asymmetry）は、帝国とその植民地・占領地との相似的な幾何学的問題（geometrical problems）として考える必要があります。私の話は以上です。

鄭淳一 はい、大川先生、コメントありがとうございました。それでは佐藤先生のお話をお伺いします。

佐藤 日本の立教大学の佐藤雄基と申します。今日は大変刺激的な議論に参加させていただきまして、どうもありがとうございました。私からのコメントは3点です。

まず1点目。人の移動を考える場合、現代でも労働力の移転という点が重要だと思いますが、前近代だとそれが奴隷交易という形態をとる場合があります。近

現代の労働移転に関しても先ほども「中動態」の問題で、本当に自発的なのか、あるいは自発か強制かという二者択一の限界ということが議論されていましたが、現代の労働力の移転も、実質は人身売買として問題視されるケースが多いです。

前近代に話を戻しますと、日本の場合、豊臣秀吉のバテレン追放令（1587年）のなかで、秀吉は日本は神の国であると延べ、キリスト教宣教師たちが日本人を奴隷として海外に連れて行っていることを問題にしています。ここで奴隷を問題視しているのは、人権意識というよりも、国の体面を意識してのことだと思いますが、誰を奴隷にするのか、どういう人たちなら奴隷にしていいいのか、あるいは奴隷的な身分の人たちをどのようにして救済・解放するのか、そのありかたには、その時代なりの民族意識や宗教の問題（異教徒か否かなどの線引きを含む）がかかわっているように思います。

人権と主権国家との関係が論点になっていましたが、奴隷労働をめぐって「自分たち」と「それ以外」の意識がどのように形成されていたのか、前近代（あるいは現在でも）の国家意識・民族意識を考えるとときに重要だと思いました。おそらく現在にもつながる問題ではないかと思いますので、この奴隷の問題に関してどうお考えなのか、議論してみたいと思っています。

次に2点目です。今回のお話では、日系移民や中国系移民など、移住先でアイデンティティを守っているケースが多く議論されていたと思いますが、人類史上、人の移住は常に存在していました。移住先の社会に同化するか、移住先で新たなアイデンティティを形成する場合も多かったのではないかと思います（「国史」の中における過去の移住の「忘却」という平山さんのご指摘と関わりそうです）。

今回のお話の中では、移住先で異なるエスニック同士の婚姻が行われた場合はどうだったのかというお話はなかったと思いますが、いろいろな移住先で他のエスニックグループの人と結婚し、ハーフの子どもが生まれていくというあり方も多かったと思います。むしろ、同化・融合がなされず、単一のエスニックグループとしてアイデンティティを持ち続けることは当たり前のことではない（むしろ少ない）のではないかと感じられました。移住先での社会構造（移住者への差別など）によるやむを得ないものなのか、あるいは日系移民だとか中国系移民だというアイデンティティを維持し続けることによって、何か主体的なメリットがあったのかどうか、このあたりはどのように議論されているのか、教えていただきたいと思いました。

3点目は宗教の問題です。前近代では奴隷とともに宗教的な動機による移動が史料上よく残っていると思います（巡礼記など）。人々の巡礼や移動先での定住を支える信仰者のネットワーク、そうした宗教の役割を考えると、キリスト教や仏教のような普遍的なメッセージを持つ世界宗教がしばしば問題にされています。そのようなグローバルな宗教の動きに対して、神道とかローカルな宗教が、人々がアイデンティティを形成したり、あるいは文化融合をするときに、どういう役割を果たすのかということが気になっています。

日本の前近代だと、中国大陆から渡ってきた仏教と神道を「習合」（融合）さ

せた「神仏習合」という事象がありました。人々の宗教意識は重層的で、必ずしも普遍的な宗教と土着の宗教が矛盾する、対立するわけではないと思うんですね。信仰というものをもう少し広く捉えたうえで、そこから人々の移動の様相や、どのようにアイデンティティが保たれているのか、あるいはアイデンティティが変容していくのが見えてくるのではないかと感じました。

あとはセッション2で議論になっていたパスポートの問題。これも気になる議論ですが、また機会があれば発言させていただきたいと思います。以上です。

■ 鄭 淳一 はい、佐藤先生、ありがとうございます。後ほど、佐藤先生にパスポート、通行証の問題に関して手短にお伺いいたします。ちょうど佐藤先生がおっしゃった三つの中で最後が宗教の問題でもありまして、先ほど同様のコメントがありましたが、平山先生にマイクをお渡しして、追加のコメントをお願いいたします。

■ 平山 先ほど宗教に関してコメントしたのですが、もう一つ別のコメントを用意していましたので、読ませていただきます。

私が用意していたもう一つのコメントは、「国史（ナショナル・ヒストリー）は人の移動をどう考えればいいのか？」という塩出先生からのきわめて重大な問いかけについてです。

私は、「国史」のなかで忘れられた「移住・移動」の歴史について考えることも重要ではないかと考えます。

趙阮先生と張佳先生が紹介されたモンゴル帝国や明代の強制移動と同じように、実は「日本」の中でも、時代をさかのぼれば中央政権が周辺の人々を強制的に移住・移動させた歴史があります。たとえば、東京都八王子市で約1200年前の遺跡が発掘された際に、そこで発見された土器は、東京から遠く離れた東北地方と同じ特徴のものでした。当時の中央政府は東北に住んでいた「蝦夷（エミシ）」たちを武力で征服し、各地に強制移住させたのですが、この土器は彼らがつくったものだったと考えられています。この歴史はすっかり忘れ去られていますが、実は、この地域には現在でも東北地方の方言とそっくりな言葉が残っていますが、東北地方からやってきた人々が驚くことがあります。

まだ生存者がいる近現代史のなかにも、すっかり忘れ去られた「移住」の歴史があります。戦前の日本では満蒙開拓民として大陸へ渡った人々がいました。彼らは敗戦によって内地へ引揚げ、政府の緊急開拓事業で与えられた貧しい土地で再度開拓にチャレンジしましたが、その多くはうまくいかず、原発（原子力発電所）建設を進める政府に土地を買収されて再び土地を手放した人々もいました。このような土地は本当は日本中にあるにもかかわらず、現代の日本社会の中で忘れ去られており、学校の授業でも取り上げられません。

以上をふまえて私が言いたいのは、以下の三つです。

第一に、現代の我々が「同じ国」と思っている範囲の中ですら、前近代まで視野を広げて歴史を遡れば、様々な「移住・移動」の歴史が見えてくる、ということです。

第二は、「移動の歴史の忘却」について考える必要があると思います。「移動が

あった」という専門家の歴史の語りだけでなく、「移動があった・・・のに忘れ去られてしまったのはなぜか？」という歴史の語り方もするべきではないかと考えます。

第三に、上記二つについてわれわれ研究者だけでなく一般の人々とも共有することで、「自分の先祖たちも、ひょっとしたら……？」と当事者としての想像力をもてるようになるのではないかと思います。

第三の点について補足すると、韓成敏先生がおっしゃったように、帝国日本による強制動員については日韓両国の深刻な葛藤をもたらしていますが、そこには「自分や、自分の大切な家族が同じような立場になったら？」という想像力が欠如していることが珍しくありません。そこで、「自分の国」の歴史のなかにも「望まない移動」を強いられた人たちがたくさんいたということを知り、ひょっとしたら自分の祖先もそのなかで苦難を味わっていたかもしれないという想像力を社会で広く共有できれば、少しは葛藤をほぐすことができないでしょうか？というふうに考えました。

以上が私が用意していたもう一つのコメントですが、もう1点だけ。宗教に関してです。仏教について私が最近気づいたことですが、日本が対外的な危機に陥ったとき、外国との対立が深まったときに仏教が攻撃されるということが、幕末（江戸時代末期）と昭和時代との2度起こりました。ふだんは日本の宗教としてすっかり土着化しているように見えるのですが、外国との対立が深まって、ナショナルなエモーションが盛り上がると、突然思い出したかのように、「そういえば仏教というのは、インドや中国から来た外国の宗教ではないか」という議論が噴出します。仏教はアジア全体に広がっている宗教なのに、いざとなるとナショナルな対立に巻き込まれてしまうということに関して、また少し考えてみるというのかなと思いました。私のコメントは以上です。

■ 鄭淳一 はい、平山先生、ありがとうございます。最後にお話しされた宗教の問題は、その前の佐藤先生の三つ目の問題意識と結びついていると思います。二つ目のコメントは強制動員問題と言いますか、日本帝国主義による強制動員問題は先ほど、佐藤先生の一つ目の問題、奴隷貿易、望まなかった人々の移動の問題とつながります。先ほど指定討論者の韓先生がお話しされた、いわゆる「強制動員」など様々な問題と結びついていると思われます。これに関しては前近代の場合、金先生が研究される壬辰倭亂・戦争（訳注：文禄・慶長の役）時に、日本に連れていかれた、移動させられた被虜人の問題が想定されそうですが、後ほど金先生のコメントを伺います。まず南基玄先生にコメントをお願いいたします。

■ 南基玄 こんにちは。南基玄です。韓国語で申し上げます。塩出先生と他の先生方のお話を伺って、人の移動が様々な規範と連関していることを知りました。特に、塩出先生がお話しされたハワイの日系住民、中国系住民の複雑な関係は非常に印象深かったです。

私が考えたのは、前のセッションで劉傑先生がお話しされたことと関連しています。移住民のように、人々が移動した後、現地との関係、役割、対立、矛盾、

このような様相が重なっていることについて考えるべきだと思います。例えば、植民地になった前後において、韓国人が日本へ移住した状況は韓先生が詳しく説明してくださいました。その反対の様相もありました。日本人が植民地朝鮮に渡ってきたのです。朝鮮総督府や日本政府の政策により行われた結果です。農場を建設したり、総督府の官吏として赴任したりする人が多かったのです。

ところで、最初にこういった人々が韓国で日本人として暮らしている中で、注目すべき点は韓国人と接触して形成される現象です。国籍と民族が日本人であるにも関わらず、植民地朝鮮に居住している中で、日本政府の政策と相反する利害関係に立つ様相が見られます。特に、こういった場合、移住者の次の世代からより区別される現象が現れます。植民地朝鮮に居住していた日本人2世たちの国家と民族に対する思いが、その前世代とは歴然と異なってきます。こういった国家と民族の居住の過程で、生活で現れる様相に対しどのように考えれば良いか、移住した人々、移動した人々の子孫、2世代は果たして移住民と呼べるのか、それとも移民と言って良いだろうか、彼らに果たして国家、民族とはどういう意味を持つか、このようなことが気になりました。以上です。

■ 鄭 淳一 南先生、ありがとうございました。最後の部分は、例えば、在日コリアンの問題や日系ブラジル人の問題ともリンクしていると思われます。それから、司会者の権限で、中国の国史ではこういった移動の問題がどうなっているかについて、お伺いしたいのですが、ちょうど近現代のお話が出たので、王輝振先生か孫継強先生、いらっしゃいますか。王先生、聞こえますでしょうか。これまでの議論と関連し、コメントをお願いいたします。

■ 王 耀振 先生方、こんにちは。天津外国語大学の王耀振と申します。本日の会議のテーマは移民と人の移動で、私が今まで行ってきた研究と関連していますので、会議に参加させていただきました。私の博士論文のテーマは日本製品不買運動で、今の研究課題は近代日本の商業会議所が中国で行った経済調査に関するものです。本日は主に自分が今取り込んでいるこの二つの研究課題が近代日中間の人の交流や人の移動との関連性について、お話しさせていただきたいと思います。

まず、近代日本の商業会議所の中国に対する経済調査についてです。なぜこのような調査があったかという、日清戦争と日露戦争の後、通商と貿易のために、大量の日本人が中国に移動したという背景から近代日本の商業会議所による中国に対する経済調査の需要が生まれたからです。今日の会議は私が今従事している研究に一つのヒントを与えてくれました。それは人の移動や人の交流という視点から日本の商業会議所が中国で行った経済調査活動を問い直すことです。近代日本から中国への移民について、先ほどの議論で満州開拓民が言及されました。事実上それ以前、即ち日清戦争以降はすでに日本からの移民は中国に渡っていました。博士論文で引用したデータを皆さんにシェアしたいと思います。日清戦争後の1898年に天津にいる日本の居留民は合計52人でしたが、1926年には5664人、1930年には6642人に増加しました。上海でも、居留民は1935年に27299人までに増加し、人数は増える一方でした。人の移動、つまり日本からの

移民が大量に中国に渡ったからこそ日本の商業会議所による中国に対する調査活動の実際の需要が生まれたのです。これは今日の会議が私に与えてくれた一つのヒントです。

次に、午前中の問題提起の講演において、日本製品不買運動という話題が言及されました。「日貨（日本製品）」はまるで近代中日間人の交流における一つのキーワードになり、人と人の交流の一つの媒体にもなったと言えましょう。人の移動には国境や種族、主権などの制約から逃れることはできません。そこから以下のことを連想できました。日貨は商品としてすでにある種の属性を帯びており、中日の民間関係の象徴や、民間闘争、即ち中国民衆が日本に対抗する対象物にもなっていました。日貨は中国にいる日本人のアイデンティティを示すラベルにもなり、あるいは日本という国家のシンボルの延長や、中国に移住した日本人という移民集団を示す記号的な存在にもなったと言えるでしょう。そこから日本製品不買運動という問題を考える際に、日貨と中国に移住した日本人という移民集団との関係という視点から問い直すことができると思うようになりました。これは今日の会議が私に与えてくれたもう一つのヒントです。

最後に、近代に中国に移住した日本人の中国での活動について、今までの研究は主に彼らの中国に対する経済侵略を中心に行われていますが、ほかにも議論すべき側面があると思います。中国に移住してきた日本人はある程度近代中日間の経済交流を促進し、彼らが中国で従事した経済活動は中国民間人の経済交流に参加する意識を高めたと言えます。例えば、中国の商人団体は1926年に日本への視察を行いました。これは日本人移民の影響及び日本製品が中国への大量流入の刺激を受けたから行った行動とも言えます。要するに、中国民間人が海外との経済交流に参加する意識を高めたことは、近代に中国に移住した日本人が中国で行った活動が中国にもたらしたもう一つの意義です。私の発言は以上です。どうもありがとうございます。

■ 鄭 淳一 王先生、ありがとうございました。データを基に中国で展開された日本居留民の活動、影響についてのお話をいただきました。それでは、引き続き孫先生にお願いいたします。

■ 孫 継 強 先生方、こんにちは。本日の会議のテーマは人の移動ですが、今コロナの影響で私たちの移動が困難になっている状況の中で、このような議論を行うことは非常に意義があると思います。午前中に先生方の発言からいろいろ勉強になりました。東北への移民について、多くの先生が議論しましたが、それが自発か強制かについて、強制だと述べた先生もいました。しかし、東北への移民を単純に強制だと決めつけることはできないと私は思います。当然、全体として、それには強制性を帯びていますが、同時に一定の自発性もあります。皆さんがご存知のように、1936年に日本で開かれた東北移民会議では、満州農業移民百万戸移住計画が制定されました。国策として、この計画の推進は、完全なる強制を通じて国民を参加させるのではなく、国家政府と地方政府の呼びかけやメディアの宣伝など、動員という形式で行われました。もちろん、これらの動員の背景にはメディ

アにおける多くの虚偽がありました。しかし、移民本人の自らの決断及びその背後にある利潤がらみの衝動の方が、決定的だと思います。それゆえ、満州移民には強制性と自発性の両方があります。また、満州への移民たち自身は満州の移民政策あるいは日本が東北で推進した植民政策の参与者、もしくは執行者です。本人の意志かどうかに関わらず、移民活動に参加したプロセスの中にはイデオロギーの持ち込みも伴いました。この意味からいうと、満州への移民たちは日本が打ち出した満州植民政策と結んだため、主動と受動の両方から満州移民の性質を定義したほうがより合理的だと私は思います。以上は私の考えになります。どうもありがとうございます。

■ 鄭 淳一 孫先生、ありがとうございました。引き続き議論されている移動の自発性、非自発性の問題に関して、満州への移民と関連してお話しされたと思います。それでは先ほどお願いした金先生のコメントに移りたいと思います。お願いいたします。

■ 金キョンテ 韓国の全南大学の金キョンテです。韓国語で申し上げます。私は壬辰倭亂（訳注：慶長・文禄の役）を研究しています。

戦争は多くの人々の移動の原因になり得ます。戦争が終わった後に捕まった人々を自国に取り戻そうとする試みも行われます。彼らは捕虜であったり残留民であったりします。そのように試みた国もあれば、そうではない国もありました。他方で、帰ってくる人に対しては強い国家意識が求められることもあります。「愛国者か否か」が検証されるわけです。これもまた国家主義、民族主義の表れなのか、どう評価すればよいか考えさせられます。

このようなことは現代だけでなく、前近代にもありました。先ほど鄭先生がお話しした、壬辰倭亂、豊臣秀吉の朝鮮侵略の当時も多くの朝鮮人が日本に連れていかれ、その朝鮮人が陶磁器や儒教文化に寄与したことが韓国の教科書で取り上げられています。それだけでなく、連れていかれた人々を朝鮮に取り戻そうとする事業も行われます。朝鮮は江戸幕府と交渉して多くの人を送還させます。

ところで、これは近代的な国家主義によるものではありませんでした。「百姓（訳注：朝鮮の民）らは皆、国王の子息と同じだ」という儒教的な理念下で行われたことで、韓国史でも重視しています。朝鮮がこのように朝鮮半島に連れてきた人々に対し、どのような生活を保障したかについてはあまり気にしていなかった、と批判する方もいるようです。私は、前近代の事例で戦争以降、自国民を取り戻そうとする試みが他にもあったのか、もしあったならばどのような側面から試みられたのか、考えていただきたいということで、他の先生方にお伺いしたいです。以上です。

■ 鄭 淳一 金先生、ありがとうございました。様々なご質問が出ておりますが、全て本日に解決できないということもご存知でしょう。間もなく宋志勇先生と三谷先生の総括コメントがあると思いますが、その際にコメントもお願いいたします。それでは市川先生、お願いいたします。

市川 沖縄国際大学の市川智生と申します。私は前回の会議で感染症の歴史に関して報告させていただきました。現在皆さんよくご存知だと思いますけれども、人の移動と感染症の問題は非常に密接にかかわっている問題です。この点に関して2点お話をさせていただきます。

1点目は先ほど平山先生がお話をしてくださった仏教の排斥の話なんですけれども、私自身は日本の近代史の研究をしています、大学の講義では考古、古代から現代まで教える機会がありまして、実は古代の日本の古い文献の病気の記述を学生に紹介することがあります。よくいわれるのが仏教の日本への伝来と天然痘の日本での流行が関連していたということですね。それは別に宗教を日本に普及させたら感染症が流行ったということではなくて、おそらく大量の人の移動であるとか、それに付随する知識や技術の移動というものが背景にはあったのだと思います。実は『日本書紀』のなかに、天然痘が日本で流行したのは仏教を入れたからだといって、お寺と仏像を全部焼き払ったという記述が欽明天皇13年（西暦552年）に出てくるんですね。そのあと仏教の力で天然痘を鎮めようと、まったく逆の発想に切り替わるところが、私は面白いと思っている、という話が1点目です。平山先生、これは非常に興味深いですね。

それから2点目はもう少し私の専門に引きつけてなんですが、塩出先生がおっしゃっていた人の移動は何をもたらすんだろうかというお話です。現代、我々は移動が感染症の拡散をもたらすということは経験的に知るようになりました。とくに今の私のように沖縄にいと、島社会ですので、移動と感染症はセットなのということをもう認識せざるを得ない環境です。

たとえば沖縄では、かつては戦争とマラリアの問題であるとか、あるいは現在では観光産業とコロナの対策が議論されているわけです。そうなってくると感染症対策というのは、人の移動をどう制限するのかということとセットなのだろうなと思います。

前回の会議で私が報告させていただいた海港検疫ですね。その問題というのがまさに、人の移動制限をどのように国家が行うのかという側面なんだろうと思います。現在コロナの問題を見ると、非常に歴史性というのでしょうか、歴史的に同じようなことがあったなということを非常に多く感じさせられます。

ひとつだけ事例をお話すると、2020年の1月に、まだ中国の武漢にコロナウイルスが限局されているという段階で、武漢にいる日本人を飛行機で、日本政府は日本に帰国させましたよね。私はそれをちょっと驚きの感情を持ってニュースを見ていました。というのも、歴史的に、ある感染症が流行ったからといって、その地域の自分の国民だけ自国に帰すということをやったことがあるかという、ちょっと私は思い当たらなかったからです。それは感染症の予防よりも、自分の国の国民の保護を優先させたように私には見えました。それはある種、災害時の緊急援助に近い形に見えました。これはおそらく何十年か前の、あるいは私が調べている明治期の日本と現在では、国家による人の移動の制限に関する考え方とか価値観が変わったんだろうなと考えざるを得ない事例でした。

実はこの問題は日本だけではなく、ここに参加している皆さんそれぞれの国によって考え方がだいぶ違ったり、あるいは日本と同じようなことを想定して実行

した国もあると思うんですね。その背景にあるような自分の国民をどう扱うのかということと移動ということを、少し考えてみるきっかけになったかなと思っています。以上です。

■ 鄭 淳一 市川先生、お話ありがとうございました。現在、残り13分ほどあります。先ほど、佐藤先生が通行証と関連してお話しされるとのことでした。それを1～2分程度でお願いできますでしょうか。

■ 佐 藤 先ほど榎本さんのコメントで、関所の通行免除証が中世日本の国内で発給されたことが紹介されていました。「国内」といっても免許証を出す政権が関所を管理していたわけではありません。「権威」として通用したようです。中世の天皇が遍歴する職人などに通行免許状を出していましたが、ここから中世の天皇が国内を統治していたと実態視することは難しいと思います。網野善彦さんが紹介していますが、日本中世の職人のなかには「異朝の証文」つまり外国の政権の文書を持って移動の自由を主張していた人もいたようです。また、タイの山岳民には、南宋の皇帝から山岳移動の自由を保障されたという由緒（おそらく歴史的事実ではない）を主張する文書（「評皇券牒」）をもつ人々もいます。中世日本もタイの山岳部も「国家」支配の強固ではない地域（最近「ゾミア」として注目されている）ではありますが、むしろ国家管理の強固な地域・時代のほうが普遍的ではないと考えれば、前近代の移動のあり方を考えるとき、「国家」の枠をこえた宗教あるいは何らかの権威を利用した移動保障の仕組みのありかたも考える必要があるかもしれません。

■ 鄭 淳一 佐藤先生、ありがとうございました。先ほど、議論がありましたが、ジェンダー問題に関して何人かの先生方がお話しされました。中国側ではジェンダーと人の移動についてどのように見られているか、秦方先生、突然ですが、手短かにコメントをお願いできますでしょうか。2分ほどでお願いいたします。

■ 秦 方 こちらのネット状況がよくないので、ビデオオフのままで発言させていただきます。近代の移動において、ジェンダーは大きな役割を果たしたと私は思います。これについては二つの方面から考えることができると思います。世界における植民地化のプロセスを想像してみてください。例えば、イギリスからインドへの植民地化において、イギリスの女性がまだインドに来る前には、イギリス男性と現地の女性の間の関係性が顕著でした。現地の女性は代役としての役割を果たしていました。これは一つ目です。後に白人女性も徐々に自分の国を出ることができるようになり、白人男性と同じように植民や占領された地域に渡った時に、同様に彼女たちは現地の女性及び現地の男性との間に非常に複雑な関係性が形成されました。これは二つ目です。それゆえ、近代における国家や移民の分析においてジェンダーは欠かせない視点だと考えており、しかも現地の具体的な文脈においてジェンダーに対する分析を行う必要があると思います。以上簡単にコメントさせていただきます。ありがとうございます。

■ 鄭 淳一 秦先生、ありがとうございました。現在、10分ほど残っております。これまでの議論と関連し、30秒もしくは1分程度でお願いいたします。大川先生が待っていていらっしゃるの、まずお話を頂いた後、塩出先生にお願いいたします。

■ 大川 宗教の問題は非常に大事で、仏教の問題も出ましたが、一方でたとえば対華二十一か条を考えると、移住した日本人の宗教生活を保障するために、その締結にむけて仏教界が積極的に政府に働きかけたという面があります。ですのでやはり宗教と政治と居住者の安心との関係論というか、その生活というのはかなり立体的に考えていかないといけないのかと思います。以上です。

■ 鄭 淳一 大川先生、ありがとうございました。それでは塩出先生、お願いいたします。

■ 塩出 質問なんですが、とくに韓先生か、韓国史・朝鮮史をやっている方に伺いたいことがあります。朝鮮半島から中国への移住が、近世から18世紀の前半ぐらいから盛んになると思うのですが、これに対してひとつは朝鮮の王権はこれをどう処理しようとしたのか。もう一つは国境管理ですね。清韓国境はどのように管理されていて、中国側はこれをどうしたのか。この点について、近年の朝鮮における移動の自由・不自由について伺いたい。

■ 鄭 淳一 韓先生、お答えとお話ししたいことに関してコメントをお願いいたします。

■ 韓 成敏 私が焦点を当てたのは自発的か非自発的かの問題ではありません。その状況で「一体どんな人々が移住したか」の問題です。その大方の人々は弱者だったわけです。植民統治を受ける立場からの移住であれ、植民統治を行う立場からの移住であれ、その移住を大規模に促す状況は国家利益の最先端にある地域で、食いつなぐために故郷から離れる人々が大半でした。問題はそこで弱者間の対立が激しくなりかねないということです。

1920年代後半からは韓国と日本で「満州移住ブーム」が起きます。当時の満州は夢のあるロマンチックな地域として描かれていましたが、実際に行ってみるとそうではありませんでした。そうした中で、生存のために戦い、その社会で弱者だった人々が犠牲になります。相対的な優位で支配しようとする、このような問題を民族、国家から離れて考える時、対立の解決ができるか、というのが私の問題提起でした。

次に間島の問題は私よりも金先生の方が詳しいかもしれませんが、当時の間島は清朝の「封禁地域」でした。清朝の発祥の地だったからです。朝鮮では大飢饉が続いて、鴨緑江と豆満江の向こう側は相対的に潤っていました。この人々がそちらに渡って農業を始めました。当時、関心を示さなかった大韓帝国政府は態度を転換し、突然関心を表明し始めます。その理由は帝国を宣言したためです。帝国というのは基本的に国々を統合するという意味を内包しているわけですから、当時は大義名分が不足していました。それで遠い新羅時代の韓国統一を引き合いに出して「三韓統一の大韓帝国」と表現していました。このように帝国の体系を

整えるために、間島開拓、間島の領土化を試みたのです。

その根拠の一つが、韓国社会でたまに問題になるのですが、白頭山にある中国と韓国の領土を区分する「定界碑」に示されている「土門江」の位置です。それが未だに定かでない状況で、中国とも議論しているようです。そういった問題が絡み合っており、間島問題になりました。過去に概ね一般人は自分の地域社会を大きくは離れることはできませんでした。戸牌を確認されたからです。このような問題は私より金先生の方が詳しいかと思いますが。

鄭 淳一 韓先生、ありがとうございました。塩出先生、お願いいたします。

塩 出 もう一つ質問なんですが、国史のなかでどう人の移動が扱われているかについて、中国については劉傑先生から説明があったんですが、韓国についてはどうなのか、どなたでも結構ですので教えてください。

鄭 淳一 金先生が歴史教育科所属ですから、韓国の歴史教科書、即ち自国史教科書で人の国際移動、人々の移動がどのように記されているか、それが国史で取り上げられているか否か、可能な限りの範囲内でお願いいたします。

金キョンテ 正確にすべてを把握しているわけではありません。古代史は鄭先生の方がより詳しいと思います。実際には、移動している人に注目するよりは、近世、中世以後は国史の立場でしょうか、韓国人が歴史の中で他国に行ってどんな影響を与えたのか、もしくはどんな文化を持ち込んだかの方により注目しているように思われます。

鄭 淳一 私からもう少し付け加えますと、韓国の国史教科書では海外から韓国に来た移民に対し、韓国が人々と文化を主体的に受け入れた点が強調され、韓国人が海外に行った場合には韓国人が海外で自らのアイデンティティを保ちながら文化を保存して暮らしていた、こういった部分が強調されている点が、個人的には非常に興味深かったです。以上です。

恐らく他の先生方からもたくさん様々なお話があると思いますが、いつの間にか予定された自由討論の時間が終わりました。それでは宋志勇先生、三谷先生の順で総括コメントを10分程度でお願いいたします。

総 括

■ 宋 志 勇

本日第六回、日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性の「人の移動と境界・権力・民族」をテーマとした会議は成功に終わったと思います。前回と比べると、今回のテーマはより鮮明で、絞られています。これからはいくつかの感想を述べさせていただきます。



第一に、今回の会議の主題はとても重要で、意義があると同時に、非常に複雑でもあります。人の移動と境界・権力・民族の関係は、各国国内における人口移動だけではなく、国際間での人口移動においても発生します。これは学術的にも、現実的にも重要な意義を持つ問題です。今日の会議はなぜこのような形式を取ったのか、今私たちは移動できないからです。私たちの移動を制限する要因は何かについて議論することはとても意義があります。今日は先生方が古代から現代に至って、幅広い議論を行いました。理論問題があれば、具体的な史実の検証もありました。近世から近代にかけて、国境を越えた人口移動と鎖国及び開国という国家政策との関係や、人口移動と人権の問題、戸籍制度や古代の通行証及び近代のパスポートなどと人口移動との関係、自発移民と植民地移民を代表とする強制移民との関係、また人や国家、国民、帝国、近代化などの要素と人口移動との関係などが取り上げられてきました。これらの問題は歴史学や政治学、法学などの分野を横断し、学際的な議論として重要な学術意義を持っています。

第二に、皆さんの報告と討論から分かるように、人口移動は東アジア三国において発生しているが、似ているところがあれば異なるところもあり、それぞれ独自の特徴が示されています。皆さんの発言が明らかにしたように、戦争と権力（政治）、経済は人口が移動する最も重要な要因になりますが、文化と宗教の要因も重要です。これらの要因は三国の国内だけではなく、三国の間においても体现されています。皆さんが紹介した様々な事例のように、これは古代や近代にだけではなく、今日までにも発生しています。

第三に、人口移動の結果とその影響について言及した先生もいましたが、その議論はまだ不十分です。移民が現地にもたらした影響は、経済や政治、文化など多くの側面に及ぼしていると思います。また、移民はその故郷、祖国にも影響を与えています。中国を例にすれば、中国の華僑は1980年代以来の中国における改革開放という国策の制定及び経済発展において多大な役割を果たしました。政治面では、中国の対外開放に影響し、経済面では、国内に対する投資を大量に導入し、教育面では、大量の留学生の出国を促進しました。これらの影響は非常に大きなもので、華僑による国内に対するこのような影響がなければ、中国の改革開放政策は今日の成果が得られなかったと言っても過言ではないでしょう。移民と祖国の関係、彼らの祖国意識、移民が原籍との関係及びその原籍意識も重視すべき問題だと言及した先生もいました。塩出先生もハワイで原籍である沖縄を単位に行った日本人の移民活動、及び海外でのこれらの活動が沖縄に与えた影響に

ついて述べてくださいました。大久保健晴教授も日中韓三国が南洋に対する共同認識に言及し、南洋移民観に対する比較研究もとても意義があります。

第四に、中国の一つの事例を簡単に紹介したいと思います。中国の移民状況について、復旦大学の張佳先生はすでにいろいろ紹介してくださいました。中国の移民の事例についていえば、中国東南地域の中国人の南洋（東南アジア）への移民と山東から東北への移民が最も代表的です。山東から東北への人口移動は東北の開発に重要な役割を果たしたと同時に、山東の人口過剰問題も解決しました。山東からの移民は「闖関東」と呼ばれ、中国ではよく知られています。その規模はとても大きく、清朝から中華民国時代にかけておおよそ二千万人以上が東北に渡ったと言われます。戦時中の日本の「国策移民」は東北への移民に大きな影響をもたらしたものの、それは戦時中に限定されたもので、規模も限定的でした。中国内地から東北への移民の方の影響は非常に大きいのです。先ほども言及したように、清朝から民国までだけでも二千万人規模でした。中華人民共和国が建国してからも、東北への移民はずっと続いていました。例えば、戦後の政策移民で、朝鮮戦争後、朝鮮戦争に参加した中国志願軍の多くは東北に残り、東北の開発に従事しました。また、文化大革命期間中に、上山下郷運動を通じて、多くの知識青年が東北に渡って、開発活動を行いました。これらの政治移民は東北の発展に重要な役割を果たしました。しかし今は新しい現象が生じています。昔は内地、山東などの地域から東北へ移民していましたが、今は大きな変化が発生しました。1980年代に改革開放して以来、中国内地の経済は急速な発展を遂げたが、東北の経済発展に遅れが発生し、大量の東北人口が内地へと流動するようになりました。この中、昔は山東から東北へと移民していましたが、現在はその多くはまた東北から山東に戻るようになりました。山東の経済情勢と生活水準は東北よりはるかに上回ったため、「逆戻り」という現象が発生しました。これは人口移動の研究にとってとてもいい事例だと思い、これからの研究にも役立つでしょう。以上と感想を述べさせていただきました。皆さん、どうもありがとうございます。

鄭 淳一 宋先生、ありがとうございました。それでは三谷先生にも総括コメントをお願いいたします。

三谷 皆さんお疲れ様でした。朝早くからとても充実した発表と討論が続いて、実をいうと私はかなりくたびれています。しかし、成果はあったと思います。

今のような厳しい国際環境、これはコロナのせいばかりではなくて、東アジアの三国がかなりお互いににらみ合っている。国内だけを見ていると、この三国の人々はお互い敵同士ではないかと、そういうふうに世界の人々が見かねない。そういうまっただ中で、こういうきわめて学術的で、しかも三国全体にわたる会議が開けた、立派にやってのけたというのは、大変な成果だと思います。おそらく今まで我々がやってきた数次の成果がここにも生かされているのだらうと思ひまして、これがもっと大きく広がっていけばいい



いなと期待しています。

今日いくつも重要な話題が取り上げられましたが、最初の頃に取り上げられた「移動の原因」問題。これに私はまず感心しました。移動の原因には、強制的なものもあれば、自発的なものもある。政治的な原因、経済的原因、そして中間的なものもあるというご指摘もありました。日本史をやっている立場からしますと、強制的なものがはたしてあったかなと、どう思い返しても思い出せない。江戸時代の始めに大名が移動させられたのは、会社が移動したようなものでして、そこに住んでいる住民は移動していません。ですから強制的な移動というのは、近い時代の日本史をやっていると思ひ浮かばなかったんですね。むしろ日本が支配していた時代に朝鮮半島から強制的に日本に移動させられた人もいましたけれども、それは日本人の間での話ではなかった。だけれども、今日の最後のあたりでは、古代のエミシ、北方の人々が関東地方に移住させられたことが考古学的にわかってきたという話を聞いて、「ああ、そうか」と。日本にも外国と似たようなそういう時代があったんだなと思った次第です。これが第一の収穫。

第二は通行証の問題について詳しい議論が披露されました。これは国境の管理という点で見ますと、今日の主題のなかでも非常に重要な問題になります。それが古くからあって、それがどう変わってきたかということが、丁寧に何人もの先生方によって語られました。それは学問的にいったら大きな収穫だったと思います。ただし、不満もありました。じゃあ、我々が今従っているパスポートがいったいいつごろ作られて、世界人類全体がこれに規制されるようになったんだと。たぶんこれはヨーロッパから始まった制度だと思いますが、いわば半分強制のような格好で全世界の人が従わされて、さてそれはいつごろ起きたのだろう。たぶんこれほど強制している以上、何かの条約があるのでしょうか、このへんもやっぱり、通行証の問題に関心のある人は研究していただきたいと思います。私が昔かじった知識でいえば、カール・マルクスは1848年の革命騒動でヨーロッパから追われたときにイギリスに逃げ込んだ。当時パスポートの制度がなかったので、こんな危険な人物をイギリスは受け入れたわけですね。彼は堂々と大英博物館で学問を積んで、巨大な著作をいくつもモノしました。そんな牧歌的な時代がヨーロッパにもあったんですね。東アジアはどうもそうではなかった、昔から。そういう違いもみなさん気をつけてください。東アジアに関しては皆さんすばらしい研究をなさっていて、世界に向けて自信を持って語れるんですが、東アジアだけで語ってしまうのはちょっともったいないのではないかと私は思います。同じくアジアのなかでもやはりロシアのこと、たとえば朝鮮半島からロシアへの移住が19世紀の前半には起きています。かなりの人が行っている。もちろんそれよりずっと前から、今日もちょっと語られたけれども、東南アジアへの中国からの移住者もいた。東アジア三国だけでなく、もう少し拡げてみたほうがいいのではないかと、そう思います。

しかしながら、もっと大事なことがあります。こうした問題はきっちりと研究すると、それなりの成果があがるので、できれば共同論文集みたいなものを、いずれ出版していただければと思います。

それから、聞いていた方からすると、今日はあまり取り上げてもらえなかった

と思う大事な問題もありました。これは劉傑先生がおっしゃったことと重なるのですが、二つあります。

第一は文化的なハイブリッドの問題です。これはマイナスにばかりとられがちなのですが、実際は逆なことが起きています。今有名なGAFA（ガーファ）とマイクロソフトのうち、二つのトップはインド系アメリカ移民です。こういうふうに経営の世界でも、ハイブリッドな人が非常に重要な働きをしている。ましてや学問の世界はそうであり、スポーツの世界もそうだと思うんですね。つまり生まれがあまりものをいわないで、腕で勝負できる世界では、移民が果たす役割が非常に大きくて、その人たちは必然的にハイブリッドだからこそうまくやれているのだろうと思うんです。そこは真剣に研究する価値があると思います。ハイブリッドというと、すぐにいじめにあったとか暗い話が多くて、それはもちろんちゃんと研究しなければならないけれども、メリットの面も含め、両方ちゃんとみたほうがいいだろうと思いました。これはこれからの大きな課題として、皆さんが研究してくださることを期待しています。

それからもう一つはやはり、移住に伴って起こる摩擦の問題があまり十分に取上げられませんでした。最後の局面では何人かの方が、その面を指摘なさって、それは重要な指摘だったと思いますが、今の東アジア三国の政治情勢からいって、皆さんお互いに触れなくなかったのかな。必要最小限のことを指摘して、それ以上議論しないで終わりました。これは仕方がない面もあると思いますが、しかしながらやはり研究として、あるいはそれぞれの社会に向かって語る場合に、どうしても抜きにできない問題ですので、今後も気をつけていただきたいと思います。世間にはたくさんこの問題を取り上げた本が刊行されていますが、今回の会議では少し薄かったかと、そういう印象を持ちました。

全体として、とても充実した会議でした。私みたいな年寄りからいうと、次の世代は立派だなあと。我々の世代ではとても思いつかなかったテーマを取り上げて、きっちりと資料を見ながら研究し、発表なさっている。ですから、東アジアの歴史学界の将来は明るいなと思いました。

それからこういう会議で一番困るのは、みんなが勝手なことをしゃべり、終わったら何をやってたか全然思い出せないということなんですが、今日は司会とかオーガナイザーの方々がずいぶん努力してくださって、きわめてうまくやってくれました。この点、司会の先生方に心から敬意を表したいと思います。ありがとうございました。

それから一番みなさんにお願いしたいことは、せっかくこれだけいい会議ができて、いい友達が発見できたんですから、今後もぜひ国境を超えて共同研究を続けていただきたい。共同の論文集が出せると最高ですけど、そういうイニシアチブをとっていただきたい。それが我々年配の者の願いです。よろしくお願いします。

最後になりましたが、いつもながら同時通訳の方々には大変お世話になりました。ありがとうございました。皆さんとともに感謝いたします。そして今西さんや三宅さんをはじめ、渥美財団の皆さんに心から感謝申し上げます。以上が私の感想です。

- 鄭 淳一 三谷先生、誠にありがとうございました。総括コメント、その通りでした。
お待たせいたしました。趙珖先生より閉会のご挨拶がございます。それでは最後に趙珖先生にマイクをお渡しします。

閉会挨拶

■ 趙 玠 こんにちは。趙玠です。渥美財団は「知の共有空間」もしくは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる知恵を東アジアに供給するという趣旨で、5年前の2016年9月より国史たちの対話を開始しました。2020年の初めごろ、フィリピンで開かれた第4回以降の「国史たちの対話」は、新型コロナウイルスが流行する感染症の時代に、感染症の歴史を振り返る過程でした。今年我々は感染症からまだ自由ではなく、感染症により移動が極めて制限されている状況で「人の移動と境界・権力・民族」の関係について模索してきました。



特に、我々は「移動」が自由でない今日の状況を克服し、新しい媒体を通じて壁を越えて話し合える機会を作り出しました。ということで、我々はオンライン会議という方法より地域に関係なく皆がそれぞれの場所で同じ時間に、共通の関心事に関して対話を行うことができました。今回の第6回大会では一人の発表に対し二人の討論者を割り当てた結果、濃密な議論が進められたと思います。

今大会のテーマは「移動」でした。トルコ出身のイギリス人学者、モリス・ファーマー（Moris Farhi）は2006年に発表した論文で「全ての歴史は移動・移住の歴史である（All History is the History of Migration）」と言いました。移動を本格的に歴史的テーマとして取り上げ始めたのは20世紀半ばのフランスの「アナール学派」の研究者たちです。「全ての歴史は階級闘争の歴史」という19世紀後半のマルクスとエンゲルスの表現を書き換えたファーマーの表現は衝撃でもありました。

ファーマーはこれまでの歴史記述を二つに区分しました。一つは「御用」もしくは「党派的」歴史です。この歴史は戦争と征服、植民を美化すると同時に、被占領者たちの文化を周辺化し、低級とされる人々の死に歓声を上げましたが、彼はこれを「間違った歴史だ」と主張しました。そして、もう一つは「真実の歴史（true history）」です。これは野蛮な弾圧と屈辱に向き合って人間の尊厳を築き上げていった数多くの無名のイエス・キリストの歴史だとファーマーは話しました。東アジアの歴史でもこういった無名のイエス、無名の仏陀、無名の預言者らが、貧困と苦境により別の地域に移った「亡命者であり、難民であり、追放者であり、異邦人」でもありました。即ち「ホモ・ミグランス（Homo Migrans）」と表現できる、真実の歴史の主人公です。

こういった今日の歴史学界の流れを考えると、第6回国史たちの対話が標榜した共通のテーマは極めて時宜を得た選択だったと考えます。今回の発表を通じて確認されたように、東アジアにおいて「移動」は古代から現代に至るまで、全時代にわたって存在していました。本日行われた各セッションの論文と討論の中に隠された内容の核は「多様な原因から惹起された移動は文化と人種の出会いを通じて相互変化をもたらした」ということかと思います。

これは東アジアでも同様で、移動は時には衝突を起こしました。しかし、いつ

の間に融合がなされ、より広いかつ深い網で編まれた共同体として再び紡がれました。もちろん、こういった人間の移動には様々な植物や動物の移動も伴います。一例を申し上げますと、19世紀末から進められた朝鮮人の間島移住を通じて、稲と稲作の限界線が北側に移りました。植物も移動しその範囲が広まったのです。人間の移動を通じて新たに形成された共同体が新たな生態系も作り出したということです。

私は本日の対話から純粋に単一の遺伝子を有する民族や個人、そして文化は存在せず、個別のものに既に世界が組み込まれていることを改めて確認させられました。しかし今日、全世界では歴史的後退を示しているような対立が深化しています。このような対立は人類の平和に大きな障害になっています。この対立の克服は個別のもの、即ち個々人や国、文化など、中に溶け込んでいる様々な「あなた」という遺伝子が共鳴しなければ可能でないはずです。「我」と「非我」の区別を超え、個別のもののアイデンティティが保たれる中でも、「共同善」からその個別の存在が一つになる、「地球規模の知性の活動」が完全に展開できるからです。この知性は各自の立ち位置からその固有性を保ち、良心と感性、知性と倫理に敏感になり、地球共同体が直面した危機を賢明に解決できる道を示してくれるはずです。我々はこういった共鳴と変化の可能性を本日のフォーラムから確認することができました。その可能性を示してくださった本日の発表者、討論者の皆さんに感謝申し上げます。

人類の歴史を振り返ると、技術の発展は地理的移動を促しました。最近、同様の理由からコロナの迅速な拡散と移動に影響を与えました。現在のコロナ問題は東アジア社会だけでなく、地球上の全人類が否定できない「一つの運命共同体」であることを認識させます。他方でコロナはこの運命共同体が単なる人間だけのものではなく、生態共同体であることも示しています。コロナの原因がコウモリであるというのは、ある意味、生態共同体の意味合いを示す事件でもあるでしょう。

ということで、今回のフォーラムから人間と文化、自然と宇宙の網（訳注：ネットワーク）に光を当ててくださった発表者並びに討論者の皆様に改めて感謝申し上げます。今日我々は独立した個別のものとして、お互い異なる物理的な座標軸の上に立っています。しかし、我々は同じ地球共同体の共同善と平和を志向する一つの心を持ち、常に一つであることを確認させられます。

次に開催される第7回国史たちの対話では「ウィズ・コロナ（with Corona）」を超えて「ウィズアウト・コロナ（without Corona）」の中で、美しい地球、より美しい台湾で、お互いに移動の自由を満喫しながら、面と向かって元気に会えることをお祈りします。国史たちの対話を支えてくださる渥美財団の今西常務をはじめとする関係者の皆様、オンライン会議を準備していただき、ありがとうございました。ここにいらっしゃる皆さんにも感謝申し上げます。

講師略歴

■塩出 浩之／SHIODE Hiroyuki

京都大学大学院文学研究科教授。専攻は日本近現代史、日本政治史。2004年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士（学術）。琉球大学法文学部准教授、同教授、京都大学大学院文学研究科准教授を経て現職。

主な著作：『越境者の政治史：アジア太平洋における日本人の移民と植民』（名古屋大学出版会、2015年）など。

■趙 阮／CHO Won

漢陽大学史学科卒業。中国の中央民族大学で16世紀モンゴル研究をテーマに修士学位を取得。北京大学歴史学科に進学し、「蒙元帝国期におけるダルガチ制度の研究」で博士学位を取る。ソウル大学歴史研究所で博士後研究課程（Postdoc）の研究「17～20世紀蒙元史研究に表れる清の知識人のモンゴル帝国認識」を進めた。漢陽大学比較歴史文化研究所のHK研究教授を歴任。現在、釜山大学副教授（2019年～）。元帝国期の統治制度や周辺地域との文化交流に関する研究を進めてきた。最近はモンゴル統治の東アジア的遺産について研究している。

主な著作：「元朝後期の『經世大典』の編纂と六典禮制」（『東洋史学研究』141、2017年）、「大元帝国法制と高麗の受容の様相」（『梨花史学研究』54、2017年）、「朝鮮で出会った元帝国の法律文書」（韓国学中央研究院出版部、2021年）など。

■張 佳／ZHANG Jia

山東省高密生まれ。北京大学中文系古典文献学学士（2004年）、清華大学歴史系歴史文献学修士（2007年）、復旦大学歴史系専門史博士（2011年）。現在は復旦大学文史研究院副研究員。専門分野は元明の社会文化史。

主な著作：『新天下之化：明初礼俗改革研究』（復旦大学出版社、2014）。論文は「元済寧路景教世家考論」、「再叙彝伦：洪武時期的婚喪礼俗改革」、「別華夷與正名分：明初的日常雜礼規範」、「衣冠與認同：麗末鮮初朝鮮半島襲用「大明衣冠」历程初探」、「明初の漢族元遺民」等十数編。

■榎本 渉／ENOMOTO Wataru

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位修得退学。東京大学東洋文化研究所助手を経て、現在、国際日本文化研究センター准教授。博士（文学）。専攻は日本中世史。

主な著作：『東アジア海域と日中交流 九～一四世紀』（吉川弘文館、2007年）、『僧侶と海商たちの東シナ海』（講談社選書メチエ、2010年／講談社学術文庫、2020年）、『南宋・元代日中渡航僧伝記集成 附 江戸時代における僧伝集積過程の研究』（勉誠出版、2013年）。

■ 韓 成 敏 / HAN Sungmin

現職：世宗大学国際学部責任研究員・大田大学講師。

学歴：東国大学校史学科学士。東国大学校一般大学院史学科修士。東国大学校一般大学院史学科博士。

経歴：2006年3月～2014年12月、東国大学校講師。2009年9月～現在、大田大学校講師、講義専担教授。2009年2月～2014年2月、東国大学校対外交流研究院研究員。2012年1月～2013年8月、韓国外国語大学校講師。

主な著作：「乙巳條約以後、韓清間における治外法権研究（1906～1910）」『韓国近現代史研究』第46号、2008年9月、「日本政府の安重根裁判介入とその不法性」『史学研究』第96号、2009年12月、「倉知鐵吉の「韓国併合」計画立案と活動」『韓国近現代史研究』第54号、2010年9月、「皇室特派留学生の同盟退校運動に対する日本の対応」『歴史と現実』第93号、2014年9月、「第2回ハーグ万国平和会議の特使に対する日本の対応」『韓日関係史研究』第51号、2015年8月、「乙巳條約以後、日本の「韓国併合」の過程研究」博士学位論文、2016年8月、「日本政府の「韓国併合」実行計画の樹立過程：「倉知案」と「秋山案」の比較を中心に」『日本歴史研究』第47号 2018年6月、「亡命者・金玉均に対する日本政府の処遇と朝鮮政策（1884～1890）」『歴史と現実』第109号、2018年9月、「1907年体制の成立過程における日本の韓国政策と韓国社会の対応」『日本歴史研究』第49号、2019年9月、『20のテーマから見た韓日の歴史争点』（共著）、2019年など。

■ 秦 方 / QIN Fang

首都師範大学歴史学院准教授。ミネソタ大学博士。主な研究関心は中国近現代社会文化史と女性史。

主な著作：『女界之興起：晚清天津女子教育与女性形象建構』（中華書局、2019年）及びその他中国語、英語論文数十本。

■ 大久保 健晴 / OKUBO Takeharu

慶應義塾大学法学部教授。博士（政治学）。専門は、東洋政治思想史・比較政治思想。特に、18-19世紀のオランダと日本との交流に光を当てながら、初期近代から近代へと至る西洋と東アジアの外交、経済、学術、法を巡る交渉史を、文化横断的な視座から解明している。東京都立大学大学院社会科学研究科で博士号を取得した後、明治大学政治経済学部専任准教授、オランダ・ライデン・International Institute for Asian Studies客員研究員、慶應義塾大学法学部准教授など経て、2019年より現職。

主な著作：『近代日本の政治構想とオランダ』（東京大学出版会、2010年）、The Quest for Civilization—Encounters with Dutch Jurisprudence, Political Economy and Statistics at the Dawn of Modern Japan—(translated by David Noble, Brill, 2014)がある。

第6回国史たちの対話 『人の移動と境界・権力・民族』 レポート

金 キョンテ 全南大学

今回の第6回「国史たちの対話」は、2021年1月に続き7ヶ月ぶりだった。近くになった距離はそう遠くならない。しかし、より頻繁に会えば会うほど親密さが増すことは言うまでもない。今回は皆が見慣れた顔であいさつを交わすことができた。

今回は一つの共通のテーマに対して一人の発表者が問題提起をし、複数の人がそれに対して討論をする方式だった。テーマは皆が話せる「人の移動」。これは一般的な意味でも学術的な意味でも議論が燃えるテーマだ。

円滑なオンライン会議の進行のために尽力してくださった事務局と通訳の皆さんに「ご苦労様でした」と、真っ先にお礼を申し上げたい。9月11日午前10時ちょうど、李恩民先生の開会挨拶から「対話」が始まった。村和明先生は6回目を迎える会議の経緯と趣旨を説明した。討論の時間が足りず、毎回心残りがあった経験から、今回は討論に重点を置く方式を選んだという。ただ、この実験的な試みがうまくできるかどうかは参加者にかかっているとの懸念があった。結果的に実験は成功だったと思う。

塩出浩之先生の問題提起は「人の移動から見る近代日本：国境・国籍・民族」というタイトルだった。歴史の研究は長い間、国と民族の影響を受けてきた。その枠から抜け出そうとする試みは多かったが、歴史研究の主流になるのは難しい。多くの見解を包容する方法論が必要な時代。塩出先生が多様な角度から紹介してくれた事例は、これまで思いもよらなかったことを想起させた。

移動の自由というのは一体何か、何が人の移動を規定するか。先生は「大日本帝国」時代の朝鮮人と沖縄人の移動事例を挙げた。また、人の移動が何をもたらすか、何を作るかに主眼を置き、ハワイにおける中国、日本の移民者間の関係も紹介した。要するに、国が人の移動に及ぼす強い影響力についての悩みを投げかける発表であり、中国や韓国の研究者に、国史の中で人の移動をどのように扱っているのかを問う問題提起でもあった。生々しい写真を通じて蘇った人々の人生で一つの映画を見ているような感じだった。

これに対して、韓中日各国から2人ずつの指定討論者がコメントした。趙阮先生は経済的、政治的要因によるモンゴル帝国時代の移動を紹介。人々の移動が活発になる中で、帝国の中で異文化圏から来た人々の競争もあったということ、そしてこれらの移動がその後の歴史に与えた影響を指摘した。

張佳先生も同様に、中国史の移動を例に挙げた。戦争がもたらした移動とともに、政府主導の強制移動と政府が介入しない経済的移動との比較を行った。そして人々が様々な規制にもかかわらず、自発的に移動を続け、暮らしを続けた姿を見せてくれた。

榎本渉先生は古代と中世日本の具体的な事例を紹介した。古代日本は出入りの管理を厳密に行っていたのに比べ中世は国家の管理がなく、このため移動しようとする人が直接パスポートの役割を果たす文書を準備したという。国家が人の移動に介入しようとする試みの時間的・空間的多様性をうかがわせた討論だった。今のパンデミックの状況の中で見ると、移動の停止がオンラインでより活発な接触を引き出したような気もする。

韓成敏先生は近代韓国人の移動を3つに分けた。第1に生計のための半自発的な移動、第2に国家政策的移民、第3に植民地化以後の強制動員だ。さらに、弱者に対する愛情を盛り込んだ「トランスナショナル」観点の導入を提案し、移住先に住まなければならないなかったディアスポラ（民族離散）の問題を勘案すると、移住者集団間の競争は特殊なものかも知れないという意見を提示した。

秦方先生はジェームズ・スコットの「ゾミア」（日本語訳では「脱国家の世界史」）を紹介しながら、中心と辺境、辺境と境界外のバランス、そしてその間を行き交った人々に対する関心の必要性を提起した。移動に対する国の管理とともにその裏面の姿も同時に見なければならないだろう。先生は自分のフィールド研究を簡単に紹介し、パンデミック以後変化したり、あるいは変化していなかったりする境界にいる人々の話を聞かせてくれた。

大久保健晴先生は、人の移動を別の視点から眺めた。近代化を推進していた国に雇用された外国人、南洋群島に行った日本人の原住民認識の事例だった。人々の移動であるだけに、様々な事例、反対の例を調べることがとても重要だろう。主権国家から離れていく難民はどう見えるかも重要な問題であることを確認した。一方、東アジアを越えて他の地域に対する見解も共有しようという意見を提起された。

以上の指定討論を通じて異なる時代、異なる地域で人の移動がもたらされる政治、経済的理由を探ることができた。歴史において国家の管理方式と理由、それでもそれを越えようとする人々の躍動的な姿。短い時間だったが視野が広がった。同一のテーマについて、自分の専攻分野と関連して短くて簡明に問題意識を語る形式は、効用性があると思った。

指定討論者が参加する自由討論では南基正先生が司会を務めた。ここでは移動の「自発性と非自発性」の区分が議論の中心で、塩出先生は、「個人が様々な目的で移動することを見せるのが、今回の問題提起だった」と述べた。しかし、その移動を左右するものの一つが国家であるという点を忘れてはならないという立場だ。国家と個人は一方的ではなく緊張関係であることを改めて確認することができた。移動と移住を分けるかどうかの問題についても議論があり、民族とはネーションかエスニック・グループか、エスニック・グループも歴史の中で作られたのではないか、などの議論が続いた。

3、4セッションはパネリストが参加した自由討論で、議論の幅がより広がっ

た。まず、劉傑先生が論点を整理した。ポイントは何が移動を規定するか、移動は何をもたらすか、各国の国史教育が移動の問題をどのように扱っているか、今、人の移動を考えることの意味など。これによって自由討論に先立って考え方を整理することができた。

多様で細かい専攻分野を持つ研究者たちの質問と論点提起は、対話をさらに深めた。「人の移動を考える時、人類に普遍的に影響を与えた宗教に焦点を当ててはどうだろうか。忘れられた移動にも関心を持つべきであり、一般の人々と問題意識を共有する必要がある」（平山昇）。「自発と非自発は大差ないかも知れない。『中動態』という概念、すなわち自発的ではないが環境的にそうせざるを得ない状況がある」（大川真）。「人の移動を基軸としてグローバルヒストリーを描くということは重要な試みである。今回のテーマにより、古代～近代国家社会というものをより客観的に見るできるようになった」（浅野豊美）。

「移動した移住民が現地との関係で生じる問題、移住2世代たちのアイデンティティ問題」（南基玄）。「移動と労働力の密接な関係」（佐藤雄基）。「人の移動に密接に関わる感染症が現代社会において自国民保護と矛盾をなす場面を感じた不思議」（市川智生）などの指摘が記憶に残った。また、本セッションの司会者であった鄭淳一、彭浩先生は専攻分野である日本と中国の旅券、戸籍の事例を詳しく紹介し、時代の理解に大きく役に立った。韓国の事例が十分に紹介されなかったのは残念だが、これは韓国史専攻者である筆者の責任でもある。

討論の後、宋志勇、三谷博先生の総括、趙珖先生の閉会挨拶が続いた。討論をもっと展開したいという発言が聞かれるとともに、この会議が充実していたことには皆が同意した。三谷先生は、多くの参加者が年長の世代が思いもよらなかった研究や発表もしているという点で明るい東アジアの未来を感じたと語り、こうして出会った仲の良い友達と一緒にこれからもこの対話を導いてほしいという希望を述べた。

今回の対話で、多様な時代と分類史を研究する研究者たちが集まり、共通のテーマを語るということのすごさに気づいた。問題提起は議論の幅を広げ、知的刺激は新たな疑問を引き出した。点から線へ、線から面へと広がることになるだろう。討論は終わらないものだ。9月11日の討論時間は終わったが、3国間の対話は終わっていないに違いない。国史たちの対話が続く一方で、研究者たちが自分の所属する場所で「対話の場」を広げることもできるだろう。

（金キョンテ「第6回国史たちの対話『人の移動と境界・権力・民族』レポート」より転載）

コロナ禍下に国史対話は続く 国境と世代を越えて

三谷 博 東京大学名誉教授

昨日、第6回目の「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」の研究集会がオンラインで開かれた。これは渥美国際交流財団の支援の下、2016年から東アジアの自国史研究者の間に対話の道を開くために開催してきたものである。国際関係や隣国史を研究している人たちは留学をきっかけに隣国人と日常的に対話してきたが、「国史」の研究者はそうした経験を持たない。20世紀から尾を引く東アジアの歴史摩擦を解消するためには、まず閉鎖環境で暮らしてきた「国史」学者たちに直接に対話してもらうことが必要である。早稲田大学の劉傑さんの首唱により、渥美財団のご理解を得て日・中・韓の歴史家たちが、ほぼ隔年に対話集会を繰り返してきた。

今回のテーマは「人の移動と境界・権力・民族」で、塩出浩之氏による基調報告の後、日中韓三国からそれぞれ二人が指定討論に立ち、その後、10人のパネリストたちによる自由討論を約3時間半にわたって展開した。以前と異なって発表はただ一人で、後はその場の展開に任せるという冒険的な試みだったが、実行委員会の村和明、李恩民、南基正、彭浩、鄭淳一氏らの周到的な準備とチームワークのおかげで、充実した討論とその連鎖が実現された。今回の主力となった三国の中堅と若手の歴史家たちは、着実な史料研究を基礎として専門分野と所属国を越える対話に積極的に踏み込み、学術討論を立派に成し遂げた。年配者としてうれしいことである。

この国史対話は、元来は東アジア三国、とくに日本と隣国との間にわだかまる歴史摩擦を解消し、国際関係への負担を軽くするために始められた。今世紀初頭、「歴史認識」問題が争点化したとき、私と同世代の歴史家たちは何度も対話を重ね、少なくとも歴史の専門家の間では、相手側が異なる解釈を見せた時、なぜ相手がそう考えるかを理解しようとするまでにはなった。しかし、その後、東アジアの諸政府は領土その他生々しい問題を敢えて争点化し、それによって歴史問題は後景に退くことになった。いま、20世紀前半の厳しい歴史について議論できる場は失われている。

しかしながら、今世紀初頭の東アジア歴史家たちの成果は見捨てるに忍びない。一步退いて、せめて学術レベルだけでも次世代の歴史家たちに日常的な交流と連携の場を用意しておきたい。学問的にも各国の歴史家たちが自国の学界に閉じこもるより遙かに生産的となるだろう。国史対話はこの度、当初と違った方

向に舵を切ったわけであるが、それは同時に世代交代の機会ともなった。昨年1月にフィリピンでの集会に加わった学者たちが渥美財団の元奨学生たちと協力し、新たな問題設定の下に動き始めたのである。今年1月には、コロナ禍を意識しながら「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」を取り上げ、その際、内容はともかく討議が十分に行えなかったとの反省に基づいて、若手自らが「人の移動と境界・権力・民族」を問題として設定し、学校教科書の「国史」を超えた歴史ナラティブを探り始めたのである。

無論、取り上げられた諸テーマが十分に討議しつくされたわけではない。しかし、中には「国境通過証明書」のように、古代から近世に至る議論が続いたセッションもあって、これらはいずれ共同論文集を編む可能性も見て取れた。

いま東アジア3国の国際関係は最悪であり、各国の世論の相互敵対関係は今世紀初頭には予想もされなかったほどである。しかしながら、今回の研究集会はそれと全く異なる潮流が存在し、若手がその担い手であることを世に示した。世は政治ばかりに規定されるのではない。学術を通じた絆が太く強靱なものに育ち、コロナ禍は無論、国家間の敵対関係を越えて、世に公益をもたらしてくれることを願う。今回の会議はその期待を大きく膨らませるものであった。

(エッセイ684：三谷 博「コロナ禍下に国史対話は続く 国境と世代を越えて」より転載。第6回「国史たちの対話」会議に参加した翌日にFacebook アカウントに投稿された文章です)。

第6回 国史たちの対話の可能性 人の移動と境界・権力・民族 参加者リスト

	氏名 (ローマ字)	氏名 (日本語)	氏名 (韓国語)	氏名 (中国語)	所属 (日本語)
発表者					
1	Shiode Hiroyuki	塩出浩之	시오테 히로유키	盐出浩之	京都大学
指定討論者					
2	Cho Won	趙 阮	조 윈	赵 阮	釜山大学
3	Zhang Jia	張 佳	장 자	张 佳	復旦大学
4	Enomoto Wataru	榎本 渉	에노모토 와타루	榎本 渉	国際日本文化研究センター
5	Han Sungmin	韓 成敏	한 성민	韩 成敏	世宗大学
6	Qin Fang	秦 方	친 팡	秦 方	首都師範大学
7	Okubo Takeharu	大久保健晴	오쿠보 다케하루	大久保健晴	慶應義塾大学
自由討論パネリスト					
8	Asano Toyomi	浅野豊美	아사노 도요미	浅野丰美	早稲田大学
9	Hirayama Noboru	平山 昇	히라야마 노보루	平山 升	神奈川大学
10	Ichikawa Tomoo	市川智生	이치카와 토모오	市川智生	沖縄国際大学
11	Kim Kyongtae	金 キョンテ	김 경태	金 囧泰	全南大学
12	Nam Kihyun	南 基玄	남 기현	南 基玄	韓国独立記念館
13	Okawa Makoto	大川 真	오카와 마코토	大川 真	中央大学
14	Sato Yuki	佐藤雄基	사토 유키	佐藤雄基	立教大学
15	Sim Chulki	沈 哲基	심 철기	沈 哲基	延世大学
16	Sun Jiqiang	孫 繼強	순 짜치앙	孙 继强	蘇州大学
17	Wang Yaozhen	王 耀振	왕 야오젠	王 耀振	天津外国語大学
実行委員					
18	Chen Lu	陳 璐	첸 루	陈 璐	早稲田大学
19	Cho Kwang	趙 珧	조 광	赵 珧	高麗大学名誉教授
20	Chong Soonil	鄭 淳一	정 순일	郑 淳一	高麗大学
21	Li Enmin	李 恩民	리 언민	李 恩民	桜美林大学
22	Liu Jie	劉 傑	류 지에	刘 杰	早稲田大学
23	Mitani Hiroshi	三谷 博	미타니 히로시	三谷 博	東京大学名誉教授
24	Mura Kazuaki	村 和明	무라 가즈아키	村 和明	東京大学
25	Nam Kijeong	南 基正	남 기정	南 基正	ソウル大学
26	Peng Hao	彭 浩	펑 하오	彭 浩	大阪市立大学
27	Song Zhiyong	宋 志勇	송 지용	宋 志勇	南開大学
同時通訳					
28	Ding Li	丁 莉	정 리	丁 莉	北京大学
29	Song Gang	宋 剛	송 강	宋 剛	北京外国語大学
30	Lee Hyeri	李 ヘリ	이 헤리	李 恵利	韓国外語大学
31	Ahn Younghee	安 ヨンヒ	안 영희	安 暎姫	韓国外語大学
32	Jin Danshi	金 丹実	김 단실	金 丹实	通訳翻訳者
33	Piao Xian	朴 賢	박 현	朴 賢	京都大学
翻訳					
36	Hong Yongil	洪 龍日	홍 용일	洪 龙日	東京大学
34	Yu Ning	于 寧	유 닝	于 宁	東京大学
35	Yun Jae-un	尹 在彦	윤 재언	尹 在彦	一橋大学
実行委員 / スタッフ					
37	Imanishi Junko	今西淳子	이마니시 준코	今西淳子	渥美財団
38	Tsunoda Eiichi	角田英一	쓰노다 에이이치	角田英一	渥美財団
39	Nagai Ayumi	長井亜弓	나가이 아유미	长井亚弓	渥美財団
40	Miyake Aya	三宅 綾	미야케 아야	三宅 綾	渥美財団

SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命：ITは教育をどう変えるか」
白井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ベマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. プレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 + 宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・ブートゥラ、孟 健軍、B. ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 榮濬
2003. 12. 4 発行
- SGRA レポート20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：COP3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」 2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行
- SGRA レポート24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート25 第14回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉銘、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005. 1. 24 発行
- SGRA レポート27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッヂ、朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力における
ソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行

-
- SGRA レポート 30 第19 回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート 31 第20 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート 32 第21 回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一 2006. 4. 10 発行
- SGRA レポート 33 第22 回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート 34 第23 回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤヤー、ミラ・ゾンターク、
セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート 35 第24 回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート 36 第25 回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート 37 第1 回チャイナ・フォーラム in 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート 38 第6 回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート 39 第26 回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート 40 第27 回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、ブラチヤー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート 41 第28 回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤヤー 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート 42 第2 回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15 年－無理解と失敗から
相互理解と信頼へ－」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート 43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート 44 第29 回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ
2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート 45 第30 回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～
日本、中国、シンガポール～」 佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート 46 第31 回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート 47 第32 回フォーラム講演録「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8 発行
- SGRA レポート 48 第3 回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く－
アジアの留学生と生活を共にした協会の50 年」 工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート 49 第33 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
- SGRA レポート 50 第8 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」
平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行
- SGRA レポート 51 第35 回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」
大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
- SGRA レポート 52 第36 回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21 世紀の課題」
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、プ・ティ・ミン・チイ、
劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート 53 第4 回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること～
TABLE FOR TWO～」 近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30 発行

- SGRA レポート 54 第37 回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：東アジアのエリート高校教育の現状と課題」 玄田有史 シム・チュンキャット 金 範洙 張 健 2010. 5. 10 発行
- SGRA レポート 55 第38 回フォーラム講演録 「Better City, Better Life ～東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル～」 木村建一、高 偉俊、Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 劍宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート 56 第5 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」 第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」 高見邦雄、汪 敏、張 昌玉 第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」 高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン 2011. 5. 10 発行
- SGRA レポート 57 第39 回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」 井上まどか、ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島 蘭 進、陳 継東 2011. 12. 30 発行
- SGRA レポート 58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」 平川 均 2011. 2. 15 発行
- SGRA レポート 59 第10 回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300 年前の東アジア地域交流」 朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10 発行
- SGRA レポート 60 第40 回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」 田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム・チュンキャット、F・マキト 2011. 11. 30 発行
- SGRA レポート 61 第41 回SGRAフォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」 恒川恵市、黒柳米司、朴 榮濬、劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18 発行
- SGRA レポート 62 第6 回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「Sound Economy ～私がミナマタから学んだこと～」 柳田耕一 「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」 郭 偉 2012. 6. 15 発行
- SGRA レポート 64 第43 回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」 朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート 65 第44 回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」 赤堀侃司、影戸誠、曹圭福、シム・チュンキャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート 66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994-1998 年）」（日本語・英語・中国語） 沼田貞昭 2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート 67 第12 回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」 平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬熙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート 68 第7 回SGRAチャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」 （日本語・中国語・英語） 宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート 69 第45 回 SGRA フォーラム講演録「紛争の海から平和の海へー東アジア海洋秩序の現状と展望ー」 村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 榮濬 2014. 10. 20 発行
- SGRA レポート 70 第46 回 SGRA フォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」 荒川 智、上原芳枝、ヴィラーク ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20 発行
- SGRA レポート 71 第47 回 SGRA フォーラム講演録「科学技術とリスク社会ー福島第一原発事故から考える科学技術と倫理ー」 崔 勝媛、島 蘭 進、平川秀幸 2015. 5. 25 発行
- SGRA レポート 72 第8 回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」 佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20 発行
- SGRA レポート 73 第14 回日韓アジア未来フォーラム、第48 回SGRA フォーラム講演録「アジア経済のダイナミズムー物流を中心に」 李 鎮奎、金 雄熙、榎原英資、安 秉民、ドマン ホーン、李 鋼哲 2015. 11. 10 発行
- SGRA レポート 74 第49 回SGRA フォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」 劉 傑、平野健一郎、南 基正 他15名 2016. 6. 20 発行
- SGRA レポート 75 第50 回SGRA フォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらしー環境と女性と未来に向けて」 神崎智子、齊藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27 発行

- SGRA レポート 76 第9回SGRA チャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中200年—文化史からの再検討」
劉建輝 2020. 6. 18 発行
- SGRA レポート 77 第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力—共進化アーキテクチャの模索」孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10 発行
- SGRA レポート 78 第51回SGRA フォーラム講演録「今、再び平和について—平和のための東アジア知識人連帯を考える—」南基正、木宮正史、朴栄濬、宋均宮、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27 発行
- SGRA レポート 79 第52回SGRA フォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」
劉傑、趙珧、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ
2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート 80 第16回日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力—新たなアジア型モデルの模索—」
金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート 81 第56回SGRA フォーラム講演録「人を幸せにするロボット—人とロボットの共生社会をめざして第2回—」
稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20 発行
- SGRA レポート 82 第57回SGRA フォーラム講演録「第2回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性—蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」
葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニバートル、向正樹、孫衛国、金甫桃、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10 発行
- SGRA レポート 83 第58回SGRA フォーラム講演録「アジアを結ぶ? 『一带一路』の地政学」
朱建栄、李彦銘、朴栄濬、古賀慶、朴准儀 2018. 11. 16 発行
- SGRA レポート 84 第11回SGRA チャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」
塚本磨充、呉孟晋 2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート 85 第17回日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」
孫赫相、朱建栄、文昊鍊 2019. 11. 22 発行
- SGRA レポート 86 第59回SGRA フォーラム講演録「第3回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17世紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ—」
三谷博、劉傑、趙珧、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、許泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姪姫、趙軼峰 2019. 9. 20 発行
- SGRA レポート 87 第61回SGRA フォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!？」
沈雨香、吉田文、シン・ジョンチョル、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行
- SGRA レポート 88 第12回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「日中映画交流の可能性」
刈間文俊、王衆一 2020. 9. 25 発行
- SGRA レポート 89 第62回SGRA フォーラム講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…? —不都合な真実を超えて」
ルウェリン・ヒューズ、ハンス＝ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵
2019. 11. 1 発行
- SGRA レポート 90 第63回SGRA フォーラム講演録「第4回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」
三谷博、大久保健晴、韓承勳、孫青、大川真、南基玄、郭衛東、塩出浩之、韓成敏、秦方 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 91 第13回SGRA-V カフェ講演録「ポスト・コロナ時代の東アジア」
林 泉忠 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 92 第13回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「国際日本学としてのアニメ研究」
大塚英志、秦 剛、古市雅子、陳 龔 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 93 第14回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」
稲賀繁美、劉 曉峰、塚本磨充、王 中忱、林 少陽 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 94 第65回SGRA-V フォーラム講演録「第5回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」
朴 漢珉、市川智生、余 新忠 2021. 10. 05 発行
- SGRA レポート 95 第19回日韓アジア未来フォーラム講演録「岐路に立つ日韓関係：これからどうすればいいか」
小此木 政夫、李 元徳、沈 揆先、伊集院 敦、金 志英、小針 進、朴 栄濬、西野 純也
2021. 11. 17 発行
- SGRA レポート 97 第67回SGRA フォーラム講演録「『誰一人取り残さない』如何にパンデミックを乗り越えSDGs実現に向かうか—世界各地からの現状報告—」
佐渡友 哲、フェルディナンド・C・マキト、杜 世鑫、ダルウィッシュ ホサム、李 鋼哲、モハメド・オマル・アブディン 2022. 2.10 発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局 (Tel : 03-3943-7612 Email : sgra@aisf.or.jp) へご連絡ください。

SGRAレポート No. 0096

第66回SGRAフォーラム

第6回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性
人の移動と境界・権力・民族

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8

Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512

SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール: sgra@aisf.or.jp

発行日 2022年6月9日

発行責任者 今西淳子

印刷 (株) 平河工業社

日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性 人の移動と境界・権力・民族

